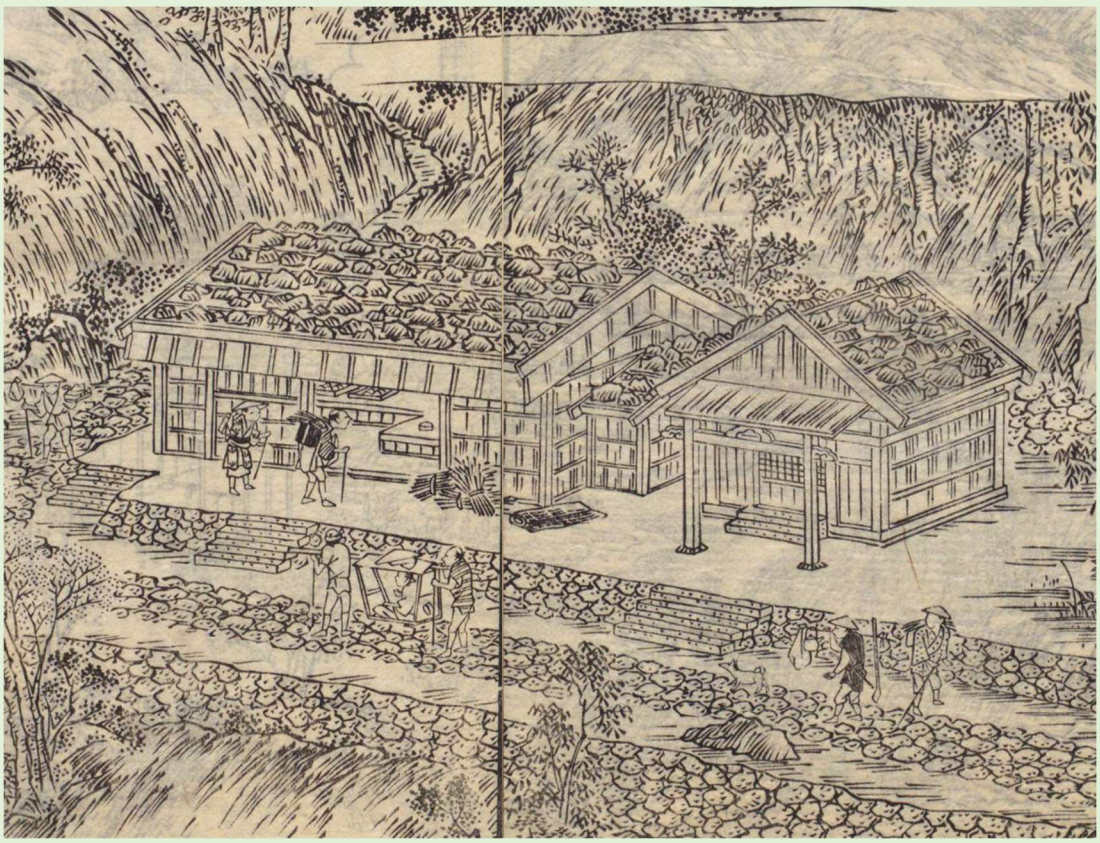
熊野参詣道伊勢路調査報告書Ⅱ

（大紀町～尾鷲市）



令和７（2025）年３月

三重県教育委員会

例　　言

１．本書は、熊野参詣道伊勢路の学術調査報告書である。
２．熊野参詣道にかかる調査報告はこれまでに、三重県教育委員会『歴史の道調査報告書Ⅰ－熊野街道－』1981 年、三重県教育委員会『伊勢街道・朝熊岳道・二見道・磯部道・青峰道・鳥羽道－歴史の道調査報告書―』1986 年、三重県教育委員会『熊野参詣道伊勢路調査報告書Ⅰ（伊勢市～大紀町)』2024 年を刊行している。本書はこれらの成果に加え、令和６（2024）年度に実施した調査成果を報告する。
３．調査は下記の体制で実施した。
調査主体：三重県教育委員会　社会教育・文化財保護課
熊野参詣道伊勢路調査報告書検討委員会：小澤毅（三重大学名誉教授：考古学)、板井正斉（皇學館大学教授：宗教社会学)、谷戸佑紀（皇學館大学准教授：歴史学)
調査・執筆担当：新名　強（第１・２章、第３章１節)、宮原佑治（第３章２～４節）
水谷侃司（第３章５・７・８節）伊藤裕偉（第３章６節）
４．調査にあたり、下記の方々からご指導・ご協力を得た。(敬称略・順不同)
家崎彰、伊津見孝明、伊藤文彦、内山裕紀子、梅谷陽子、川口有三、京泉勇平、坂本亮太、塚本明、出口眞一、中西尚文、脇田大輔、三瀬坂峠を守る会、常聲寺、尾鷲市中央公民館、皇學館大学（研究開発センター史料編纂所)、和歌山市立博物館、和歌山県立博物館、和歌山市和歌山城整備企画課、わかやま歴史館、大紀町教育委員会、紀北町教育委員会、尾鷲市教育委員会、三重県環境生活部

凡　　例

１．地図は、2017 三重県共有デジタル地図（数値地形図 2500（平成 29 年度撮影)）三重県市町総合事務組合を用いた。
２．下記の資料は、著作権保護期間が満了したものである。
『西国三十三所名所図会』『伊勢参宮名所図会』(国立国会図書館デジタルコレクション)、『西国三十三ヶ所めぐり絵図』(奈良県立図書情報館まほろばデジタルライブラリー）CC ライセンス。
３．写真はすべて社会教育・文化財保護課職員が撮影したものを使用した。
４．文中に記載した金石文等は、以下の記号で示した。
「／」‥‥改行
「〈　〉」‥‥割注または２行取りの文字
「文字」‥‥読みが不確定な文字
「□」‥‥判読不能文字（１文字)
「〔以下不明〕」‥‥判読不能文字（字数不明）
５．本書では、熊野参詣道に相当する道については「熊野道」と表記した。熊野参詣道以外の「街道」と重複する部分は、必要に応じて「街道」と表記した。
６．挿図上での熊野道の表記は、現存部分（アスファルト舗装部分を含む）は実線、遺存していない部分や想定部分は破線で示した。巻末の地図については、煩雑となるため、全て実線で示した。
７．原則として常用漢字を用いたが、必要に応じて常用外漢字を用いた。

目　　次

例言　凡例
第１章　はじめに……1
　1　調査にいたる経緯……1
　2　調査報告書の位置づけ……1
第２章　熊野参詣道伊勢路の概要……2
　1　概要……2
　2　調査対象……2
第３章　熊野参詣道伊勢路（大紀町・紀北町・尾鷲市）……5
　1　梅ヶ谷から二郷（荷坂峠道）……5
　2　梅ヶ谷から長島（ツヅラト峠道）……13
　3　長島から三浦……24
　4　三浦から相賀……40
　5　相賀から尾鷲……52
　6　岩屋堂と岩屋堂道……59
　7　尾鷲から三木里……71
　8　三木里から曽根……83
広域図……88

挿図目次

図１　熊野参詣道伊勢路と熊野三山の位置……1
図２　『西国三十三ヶ所めぐり絵図』……4
図３　蛇留地蔵……5
図４　足守地蔵……5
図５　いぼとり地蔵……5
図６　梅ヶ谷から荷坂峠の道……6
図７　梅ヶ谷川沿いの道……7
図８　伝巡礼墓……7
図９　荷坂峠頂上の切通し……7
図 10　観音堂跡……7
図 11　観音堂跡下の石積み……7
図 12　荷坂峠道……8
図 13　つづら折れ……8
図 14　尾根上の道……8
図 15　切通し……9
図 16　沖見平から長島を望む……9
図 17　二坂嶺（『西国三十三所名所図会』）……9
図 18　三本松長八茶屋跡……10
図 19　江戸道……10
図 20　明治道……10
図 21　長島側降り口……10
図 22　猪垣……10
図 23　一里塚跡石仏碑……11
図 24　片上の青面金剛……11
図 25　荷坂峠～二郷の道……11
図 26　片上の地蔵……11
図 27　片上南端の地蔵……11
図 28　菅谷の道標……13
図 29　八柱神社本殿……13
図 30　汲泉寺本堂……13
図 31　梅ヶ谷から米ヶ谷への道……14
図 32　定坂の荷車道……14
図 33　禅龍寺本堂……14
図 34　ツヅラト峠道……15
図 35　ツヅラト峠道への分岐点……16
図 36　ツヅラト峠上りの山道……16
図 37　ツヅラト峠に露出した岩盤……16
図 38　ツヅラト峠から望む熊野灘……16
図 39　『紀伊国絵図』にある地名と経路……17
図 40　『木国地図』にある地名と経路……17
図 41　岩盤を刳り抜いた階段……18
図 42　野面乱積みの石垣……18
図 43　石垣と木橋……18
図 44　最初の石畳……18
図 45　山の神祠……18
図 46　石畳……18
図 47　志子の道標……19
図 48　導地蔵……19
図 49　円通閣……19
図 50　泉福寺……19
図 51　志子から二郷・長島への道……20
図 52　二郷への山道・上り道……21
図 53　二郷への山道・尾根筋……21
図 54　二郷への山道・下り道……21
図 55　志子の庚申塔……21
図 56　山本への下り道……21
図 57　二郷神社……22
図 58　竜王山地蔵院……22
図 59　地蔵院庚申碑……22
図 60　二郷から長島への舟渡し「熊中奇観」……22
図 61　松本の道標（正面・左面・右面・裏面）……24

図 62　城腰山長楽寺……24
図 63　大島山仏光寺……24
図 64　津波供養塔（宝永４年・正面・左面）……24
図 65　長島から加田・海野への道……25
図 66　本町の道標（正面・右面・左面）……26
図 67　長島神社……26
図 68　西町大師堂……26
図 69　能化庵……26
図 70　加田の道標・地蔵……27
図 71　島地峠道と熊野道の合流点「紀伊国北牟婁郡長島浦全図」（部分）27
図 72　一石峠道の入口……27
図 73　一石峠道　江戸道・明治道合流点……27
図 74　一石峠道・海野から古里への道……28
図 75　一石峠道　急斜面を上る木段……29
図 76　一石峠道　開削型の道……29
図 77　一石峠道　明治道切り通し……29
図 78　海野の道標（左面・正面）……29
図 79　一石峠道　茶屋跡推定地……29
図 80　茶屋跡から見た鏡池・海野集落……29
図 81　横吹け峠……29
図 82　江ノ浦湾口……30
図 83　江ノ浦湾口に記された砂州「大日本帝国陸地測量部」長島（部分）30
図 84　鏡神社（長島）……30
図 85　海野への道「紀伊国北牟婁郡海野浦全図」（部分）30
図 86　七マガリの道……30
図 87　七マガリの道　尾根筋に続く道……31
図 88　白龍山瑞泉寺……31
図 89　海野の道……31
図 90　鏡神社（海野）……31
図 91　鏡池……31
図 92　海野から古里への道「紀伊国北牟婁郡海野浦全図」（部分）32
図 93　海野道　舗装された階段……32
図 94　海野道　山道……32
図 95　海野道　切通し……32
図 96　海野道　下りの山道……32
図 97　鋸坂（馬坂）……33
図 98　古里の道……33
図 99　鋸坂（馬坂）への道（左）……34
図 100　鋸坂（馬坂）　上り口……34
図 101　鋸坂（馬坂）　つづら折れ……34
図 102　鋸坂（馬坂）　残存する石段……34
図 103　鋸坂（馬坂）　岩盤の切り通し……34
図 104　鋸坂（馬坂）　茶屋跡推定地……34
図 105　鋸坂（馬坂）　岩盤を削平した道……35
図 106　鋸坂（馬坂）　分岐点……35
図 107　鋸坂（馬坂）　右側（開削）の道……35
図 108　鋸坂（馬坂）　左側（山寄せ）の道……35
図 109　若宮八幡神社……35
図 110　道瀬五輪塔群（阿弥陀如来堂裏）……36
図 111　道瀬　明治時代の直線的に続く道……36
図 112　田ノ谷川から三浦峠道への眺望……36
図 113　三浦峠道　上り口への分岐……36
図 114　三浦峠道　つづら折れ箇所……36
図 115　三浦峠道　切通し……37
図 116　三浦峠道……37
図 117　三浦峠道　野面乱積みの石垣……38
図 118　三浦峠道　江戸道分岐点……38
図 119　三浦峠道　江戸道に通じる切り通し……38
図 120　三浦峠道　開削道の石段（反対から）……38
図 121　三浦峠道　合流地点……38
図 122　三浦峠道　山寄せ道の石段（反対から）……38
図 123　三浦峠道　江戸道下り口……38
図 124　三浦の未舗装道……40
図 125　住宅の間に残る道……40
図 126　三浦の道……40
図 127　三浦の庚申祠……41
図 128　貞永山海蔵寺……41
図 129　泥岩露頭前の地蔵祠……41
図 130　始神峠道・明治道「大日本帝国陸地測量部」島勝（部分）41
図 131　明治 21 年以前の始神峠道「紀伊国北牟婁郡三浦全図」（部分）41
図 132　始神峠道の上り口……42
図 133　川岸の端の痕跡……42
図 134　平坦型の道と洗い越し……42
図 135　トンネル沿いの木段……42
図 136　つづら折れと石段……42
図 137　石段……42
図 138　緩やかな山寄せの道……42
図 139　始神峠道……43
図 140　始神峠茶屋跡推定地……44
図 141　始神峠からの眺望……44
図 142　始神峠の切通し（反対から）……44
図 143　始神峠道　江戸道・明治道分岐点……44
図 144　始神峠道　江戸道下り口……44
図 145　原池の南側の道「紀伊国北牟婁郡三浦全図」（部分）…44
図 146　江戸屋跡の建物（解体）と熊野道……45
図 147　江戸屋のもろぶた・膳など（海山郷土資料館）……45
図 148　馬瀬集落に向かう道……45
図 149　大慈山広禅院……45
図 150　広禅院境内の庚申祠……45
図 151　馬瀬の道……46
図 152　上里集落の道（右に兵助地蔵）……46
図 153　上里城跡・セキ山城跡（大河内川から）……46
図 154　上里・中里・船津（新田）の道……47
図 155　上里神社……47
図 156　修禅寺の庚申塔・宝篋印塔……47
図 157　明治期における大河内川の流路「紀伊国北牟婁郡中里村全図」・「紀伊国北牟婁郡上里村全図」（部分）……48
図 158　八重垣神社……48
図 159　清雲山龍谷寺……48
図 160　船津（中新田～船津）の道……49
図 161　八雲神社……49
図 162　中新田の庚申祠・灯篭……50
図 163　船津「紀伊国北牟婁郡船津村全図」（部分）……50
図 164　祥嶽山永泉寺……50
図 165　蛤石……52
図 166　銚子川の渡河位置……53
図 167　鷲下の道（『紀伊國北牟婁郡便ノ山全圖』）……53
図 168　鷲下の道の石畳……54
図 169　馬越峠道（発掘石畳）……54
図 170　馬越峠道の石畳……55
図 171　夜泣き地蔵……55
図 172　馬越峠道・尾鷲の道……56
図 173　間越嶺岩船地蔵堂（『西国三十三所名所図会』）……57
図 174　岩船地蔵堂跡……57
図 175　岩船地蔵堂・茶屋跡平面図……57
図 176　岩船地蔵……58
図 177　馬越峠の巡礼供養碑……58
図 178　安兵衛地蔵……58
図 179　馬越不動滝と祠……58
図 180　岩屋堂道（馬越峠～天狗倉山）（１）……59

図 181　岩屋堂道……60
図 182　岩屋堂道（馬越峠～天狗倉山）（２）……61
図 183　天狗岩……61
図 184　岩屋堂道（天狗倉山～岩屋堂）（１）……61
図 185　岩屋堂道（天狗倉山～岩屋堂）（２）……61
図 186　岩屋堂道（岩屋堂～尾鷲）（１）……62
図 187　岩屋堂道（岩屋堂～尾鷲）（２）……62
図 188　岩屋堂道（岩屋堂～尾鷲）（３）……62
図 189　岩屋堂道（岩屋堂～尾鷲）（４）……62
図 190　岩屋堂道（本線道～岩屋堂）……63
図 191　岩屋堂道（本線道～岩屋堂）……63
図 192　岩屋堂　巨岩と洞……63
図 193　岩屋堂　巨岩の北部……63
図 194　岩屋堂　堂跡１の石列・沓脱石……64
図 195　岩屋堂　墓地……64
図 196　平家景清一族郎党供養の木製塔婆……64
図 197　岩屋堂　巨岩開口部の敲打調整痕……64
図 198　かつての岩屋堂……65
図 199　石造聖観音菩薩坐像……65
図 200　木造薬師如来立像……66
図 201　護摩釜と鍋……66
図 202　岩屋堂平面図……67
図 203　岩屋堂　洞内の状況……67
図 204　岩屋堂　西国三十三所観音石仏の分類……68
図 205　岩屋堂　西国三十三所観音石仏台座分類……68
図 206　金剛寺仁王門……71
図 207　尾鷲神社……71
図 208　中井町の道標……71
図 209　山鼻庚申塚の道標地蔵……72
図 210　山鼻庚申塚の巡礼墓碑……72
図 211　中川……72
図 212　袖片橋……72
図 213　矢浜の道標……72
図 214　八鬼山（『西国三十三所名所図会』）……73
図 215　八鬼山の石畳……74
図 216　桜茶屋の一里塚……74
図 217　八鬼山町石及び関連石仏（No. １-20）……76
図 218　八鬼山町石及び関連石仏（No.21-37）……77
図 219　八鬼山越えの道……78
図 220　八鬼山嶺荒神茶屋（『西国三十三所名所図会』）……79
図 221　八鬼山荒神堂跡平面図……80
図 222　八鬼山荒神堂……80
図 223　荒神堂礎石（『八鬼山荒神堂～落慶記念～』）……80
図 224　八鬼山荒神堂跡礎石実測図……81
図 225　十五郎茶屋（『西国三十三所名所図会』）……82
図 226　名柄の一里塚……82
図 227　法然寺の道標（あいがめさま）……83
図 228　三木里の道標……83
図 229　ヨコネ道・三木峠道・羽後峠道……84
図 230　ヨコネ道の石段……85
図 231　三木峠道始点（三木里側）……85
図 232　古江町の石段……85
図 233　羽後峠道の石畳……86
図 234　羽後峠道の猪垣……86
図 235　羽後峠道の道標……86
図 236　賀田羽根の五輪塔……86
図 237　賀田の道標……86
図 238　曽根北の関所跡……87
図 239　曽根道祖伸……87
図 240　飛鳥神社……87

表目次

表１　道中案内等に見える伊勢山田～熊野新宮間の地名……３
表２　銚子川の渡河に関する道中案内の記録……52
表３　道中記に記載された岩屋堂……59
表４　岩屋堂石造物一覧(1)……69
表５　岩屋堂石造物一覧(2)……69
表６　八鬼山町石法量及び銘文一覧……75
表７　三木里から曽根への海路の記録一覧……83

関連史料目次

関連史料　……70

第１章　はじめに

１　調査に至る経緯

三重県内に所在する熊野参詣道（伊勢路）が、平成 16（2004）年 7 月 7 日に「紀伊山地の霊場と参詣道」を構成する資産として世界文化遺産に登録されてから、令和６（2024）年度で登録 20 周年を迎えることになる。三重県教育委員会（以下、「県教育委員会」とする。）では、世界遺産登録後も、関係市町・地元関係者・学識経験者等との連携のもと、登録地域内外の道標や石仏、道の石段・石畳等、熊野参詣道伊勢路に関連する資産の調査を継続して実施するとともに、伊勢路においてまだ解明されていない道の区間や隣接する資産等の把握・情報収集に努めてきた。

およそ 20 年間のこうした取組の中、当時の状態が保存された新たな古道の存在が現地調査によって発見されたり、歴史的・学術的評価が不明であった資産に関する新たな情報が寄せられたりするなどの成果が得られた。これらの新たな資産（世界遺産未登録）の存在は地元の人々の間でも広く認められ、保存会等の方々による保全活動も熱心に行われるようになった。新型コロナウイルス感染症の影響で訪問者が一時的に減少した時期があったものの、状態よく保全された古道への来訪者は年々増加している。そして、地元を中心に、これらの新たな資産の歴史的・学術的価値を明らかにし、文化財指定および世界遺産追加登録による保護措置を要望する声が次第に大きくなってきた。

これまで、熊野参詣道伊勢路については、「熊野街道」として昭和 55（1980）年度に県教育委員会が「歴史の道」の調査を実施し、その成果を公表しているものの、調査から約 40 年が経ち、研究の進展によって新たな学術的価値が見いだされたり、内容修正が必要な箇所が生じたりしている実情もあった。

そこで、県教育委員会では、熊野参詣道伊勢路の参詣道としての歴史的・学術的価値を再評価するため、令和 5（2023）年度より伊勢路の全域を改めて調査することとした。

２　調査報告書の位置づけ

今回の調査は、伊勢市から紀宝町に至る熊野参詣道伊勢路に関連する資産について、伊勢市からの巡礼路の順に実施し、令和５（2023）～７（2025）年度に分けて調査報告書によって成果を報告する。そして令和８（2026）年度以降の調査報告書においては、補足する資料等を示すとともに、総論的な視点でとらえた歴史的・学術的価値を評価する。

この調査報告書で示す歴史的・文化財的価値の評価は、新たな資産の文化財指定に供するとともに、既知の文化財の新たな価値づけに資するものと考えている。

第２章　熊野参詣道伊勢路の概要

１　概要

熊野参詣道は、紀伊半島の南端にある熊野三山（本宮、新宮、那智）へと向かう巡礼の道である。この巡礼道は複数のルートがあり、紀伊半島の東部を経て伊勢から熊野へ至る伊勢路、紀伊半島の西部を経て京・大坂方面から熊野へ至る紀伊路・大辺路・中辺路、高野山と熊野三山を結ぶ小辺路、吉野と熊野三山を結ぶ大峯奥駆道がある。これらの参詣道は、古代末期から近世・近代に至るまで、貴賤を問わず多くの人々が熊野三山への信仰と憧憬によって歩んだ道であり、我が国の歴史・社会・文化を考える上で欠くことのできない交通遺跡であるため平成 14（2002）年に国史跡に指定されている[1]。また、「史跡熊野参詣道」は熊野三山、高野山、吉野・大峯の霊場とともに平成 16（2004）年 7 月 7 日に「紀伊山地の霊場と参詣道」として世界文化遺産に登録された。

伊勢路は平安時代中期の日記[2]や紀行文[3]から 10 世紀ごろには利用されていたものと考えられるが、現在、古代末から中世に遡る道の存在は確認されておらず、世界遺産に登録されている道は、すべて近世以降に用いられた道である。なお、熊野参詣道の中で、10 世紀以降継続的に利用されていたのは中辺路のみであり、大辺路、小辺路も利用の盛期は近世以降となる。

江戸時代中期以降には、伊勢神宮への参詣が盛んとなり、伊勢神宮参詣後、西国三十三所巡礼に向かう者もあった。伊勢路はこのような西国巡礼者が通った道として評価されている[4]。巡礼者が通った経路については、当時の絵図（図１）や道中案内記[5]（表１）に見られるように、伊勢山田（伊勢市）を発出し、田丸（度会郡玉城町）で伊勢本街道から分岐して熊野へと至る道であったことがわかる。参詣道としては紀伊路・大辺路・中辺路が熊野三山と京・大坂間の、小辺路が熊野三山と高野山間の双方向の道であったのに対し、伊勢から熊野への一方通行であったことは伊勢路の特徴といえる。なお、巡礼者が通った道は紀州藩により整備された街道でもあり、巡礼者以外の者は双方向に利用していたことには留意が必要である。

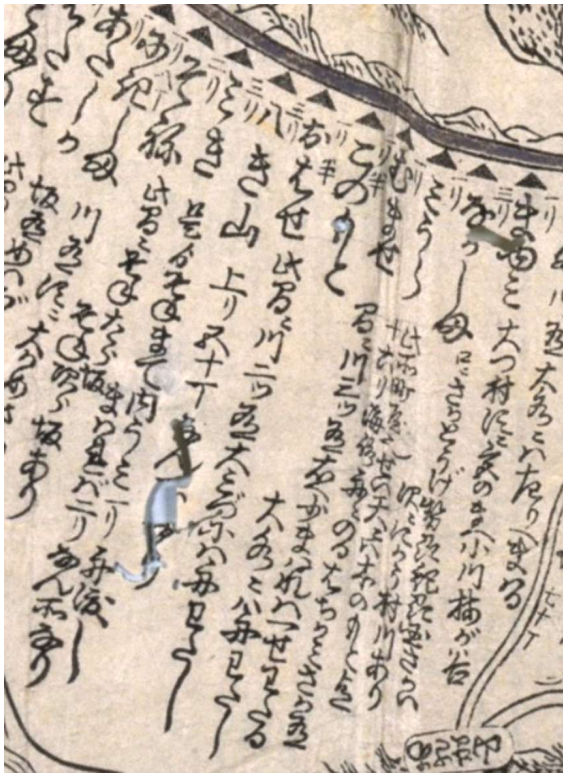
図１　熊野参詣道伊勢路と熊野三山の位置

２　調査対象

本書で記述する参詣道は、現在の大紀町から紀北町を通り、尾鷲市に至る、近世以前に利用された道を対象とする。ちなみに、伊勢から熊野へ至る道は、時期による変遷、大水時の渡河不可による迂回路、寺社参詣のための

寄り道等、様々な理由により複数存在する。本書では、道中案内記、絵図等の史資料、現地の踏査により確認された遺構・石造物等から、近世に最も多くの巡礼者によって用いられたと想定される道を中心に記述し、他の道は必要に応じ補足的に記述する（7）。

令和６（2024）年度は、大紀町から尾鷲市までの参詣道について調査を実施し、その成果を当報告書に記載した。また、世界遺産の追加登録候補資産については、県教育委員会職員のほか、学術調査活動員による現地調査も実施しており、国東山道や馬越峠から天狗倉山・岩屋堂に至る道や資産、玉城町から大紀町にかけての参詣道に関わる道や資産について、内山佳和・門野隆一・竹田憲治・西村美幸が学術調査活動員として調査を実施した。



▲まゆミ（一リ）　大つ村　次ニ宮のまへ　小川　梅が谷
▲ながしま（三リ）　次ニさかとうげ勢州紀州国さかい
次ニにかう村川あり
▲ミうら（一リ）　此所町屋也　せい天ニハ木のもと迄
十六リ海路舟ニのる　はちかミさか有
▲むませ（一リ）　間ニ川三ッ有右へ少まハれハ一せわたる
大水ニハ舟わたし
▲このもと（一リ半）
▲おはせ（一リ半）　此間ニ川二ッ有大ミづにハ舟わたし
▲八き山（三リ）　上リ五十丁なん所なり
▲ミき（三リ）　是よりそねまて内うミ一リ舟渡し
まハれはバ二リなん所なり
▲そ祢（二リ）　此間ニそね太郎坂
そね次郎坂あり

図２　『西国三十三ヶ所めぐり絵図』文化９（1812）年より一部抜粋（奈良県立図書情報館所蔵）

註

（1）　平成 14 年 11 月 15 日　文化審議会答申。
（2）　『いほぬし』(『群書類従』巻第 327)。
（3）　『権記』(『増補史料大成』)。
（4）　『世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」保存管理計画』2015 年、世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」三県協議会。
（5）　『順礼案内記』享保 13（1728）年のほか、『西国三十三所みしるへ』元禄３（1690）年、『西国巡礼細見記』安永５（1775）年、『順礼道中指南車』天明２（1782）年、『西国巡礼道中細見増補指南車』文化３（1806）年、『新増補細見指南車』文政 12（1829）年、『天保新増西国順礼道中細見大全』天保 11（1840）年等が刊行された。
（6）　伊藤文彦「文化遺産としての「巡礼路」の保存と継承の研究～熊野参詣道伊勢路を事例に～」2018 年。
（7）　巡礼者が本書で記述する道以外の道を用いて熊野へ至った可能性を否定するものではない。

表１　道中案内等に見える伊勢山田～熊野新宮間の地名（6）

西国三十三所道しるへ	順礼案内記	西国巡礼細見記	順礼道中指南車	西国巡礼道中細見増補指南車	新増補細見指南車	天保新増西国順礼道中細見大全	国土地理院発行地図
元禄３年	享保13年	安永５年	天明２年	文化３年	文政12年	天保11年	平成10年
1690	1728	1755	1782	1806	1829	1840	1998
宇治橋	伊勢山田	山田	山田	山田	山田	山田	伊勢市
		やなぎ	やなぎ	柳	柳／河端	川端　柳	川端町
					ばんと村	ばんど村	坂東
					上地村	上地村	上地町
		（ゆた野）	ゆだの	いたの	いた野	ゆた野	湯田野
			のしば	のしば	しば		
					田丸新町	田丸新町	
たまる	田丸	田丸	田丸	田丸	田丸	田丸	田丸
						野篠村	野篠
池辺						蚊野村	蚊野
	原	原	はら	原	原	原	原
あふか						野中村	野中
					鳴川村	鳴川村	成川
さな	あふかせ	あふかせ	大かせ	おおかせ	大がせ	相鹿瀬	相鹿瀬
						千代村	千代
					柳原村	柳原村	柳原
北とち原	とち原	とぢ原	とちが原	とちが原	栃原村 橡原	栃原	栃原
						神瀬村	神瀬
					下楠	下楠	下楠
あお	あを	あほ	あを	あを	粟生	粟生	粟生
三瀬村	ミせ	みせ	三せ	みせ	三瀬	三瀬	下三瀬
野尻	のじり	野じり	のじり	のじり	野尻	野尻	滝原
あそふ	あそ	あそ	あそ	あそ	阿曽	阿曽	阿曽
柏野	かしハの	柏野	かしわの	かしわの	柏野	柏野	柏野
山崎	さき	さき	さき	さき	崎	崎村	崎
こま	こま	こま	こま	こま	駒	駒村	駒
まゆミ	まゆミ	まゆみ	まゆみ	まゆミ	間弓	間弓	間弓
		大津村	大津村	大津村	大つ	大津	大津
梅が谷		梅が谷村	梅が谷村	梅が谷	梅ヶ谷	梅ヶ谷	梅ヶ谷
					片上村	片上村	片上
にがう		から村	にがう村	ニがう村	かう村	かう村	東長島
長嶋	長嶋	長島	ながしま	長嶋	長嶋	長嶋	長島
古里		ふる里村	ふる里村	ふるさと村	古里村	古里村	古里
たう瀬		どうぜ村	どうぜ村		同瀬村	同瀬村	道瀬
三浦	ミうら	三うら	三うら	三浦	三浦	三浦	三浦
馬瀬	むまぜ	馬瀬	むまぜ	馬ぜ	馬瀬	馬瀬	馬瀬
鳥井村			とりい村	とりゐ村	鳥井村		
上里村		上里村	上ミ里村	上さと村	上里村	上里村	上里
中里村		中里村	中里村	中里村	中里村	中里村	中里
下里村		下里村	下里村	下里村			
						船津新田	新田 中新田
舟津		船津村				船津村	船津
香の本	この本	香の本	こうのもと	香の元	香本	木本	相賀
原びんの村		ひんの村	びんの村	びんの村	びんの村	びんの村	便ノ山
			まごせ村				鷲下
おわし	おハし	おわし	おわし	尾わし	尾鷲	尾鷲	尾鷲市
					八之濱村	八之濱村	矢浜
三鬼	ミき	三鬼	みき	三鬼	三鬼	三木	三木里町
かた					加田	加田村	賀田町
曽根	そね	そね	そ禰	そね	曽祢	曽祢	曽根町
二鬼嶋	にきしま	にぎ島	にぎじま	二鬼嶋	二鬼嶋	二木嶋	二木島町
あたしか	あたしか	あたじか	あたしか	あたしか	新鹿	新鹿	新鹿町
はたす	はだす	はだす	はだす	はだす	波田須	波田須	波田須町
大泊	大とまり	大とまり	大とまり	大泊	大泊	大泊	大泊町
木之本	木の本	木の本	木の元	木の本 木の元	木本	木本	木本町
有馬	ありま	有馬	ありま	ありま	有馬	有馬	有馬町
			一木村	一木村		市木村	下市木
あたわ	あたハ	あたわ	あたわ	あたわ	阿田和	阿田和	阿田和
伊田		伊田村	井田村	井田村	井田村	井田	井田
うハ野					宇和埜村	宇和野村	上野
なる川		なる川	なる河村	なる川村	鳴川村	鳴川村	成川
新宮	新宮	新宮	新宮	新宮	新宮	新宮	新宮市

第３章　熊野参詣道伊勢路（大紀町・紀北町・尾鷲市）

１　梅ヶ谷から二郷（荷坂峠道）

○　梅ヶ谷

梅ヶ谷の道　熊野道は梅ヶ谷で、そのまま荷坂峠に向かう道と、西へ折れてツヅラト峠に向かう道に分かれる。荷坂峠に向かう道は、梅ヶ谷川の左岸を南下し、概ね現在の国道 42 号に重複していたと考えられ、部分的に集落内を通る旧道が残る。

【河内の観音・地蔵・庚申堂】　河内集落の南に３基の祠があり、４体の石仏が納められている。これらは、「蛇留観音」「足守地蔵」「いぼとり地蔵」「庚申さん」と呼ばれて、今も大切に祀られ、親しまれている。このうち「蛇留観音」は砂岩製の如意輪観音像で、高さ 41cm、幅 30cm、奥行きは 23cm である。台座は高さ 21cm、幅 30cm、高さ 30cm で、正面に「[　　] 弥陀佛」、左側面に「宝暦(1753)三酉／二月吉日／大内山／　川口村傳六」の銘がある。荷坂峠の頂上の観音堂に祀られていたもので、弘化４（1847）年の「荷坂峠　蛇留観世音　再建の勧進書」には、観音堂再建の経緯とともに、白い大蛇に襲われた巡礼者が観世音菩薩に念じて難を逃れ、そのお礼に如意輪観音が勧進されたことが記されている[1]。「足守地蔵」は砂岩製で、高さ 53cm、幅 24～16cm、奥行き 10cm で、地蔵の左側に「俗名おみや」、右側に「文化(1810)七年午三月」の銘があり、巡礼者か村人の供養塔と考えられる。台座は直径 30cm で蓮の花弁が刻まれる。この地蔵も観音堂の石段右下にあったものである。「いぼとり地蔵」も砂岩製で、高さ 41cm、幅 18～21cm、奥行き 16cm あり、地蔵の左側に「奉献大來妙典供養塔」、右側に「天下泰平日月清明」と刻む。台座は高さ 15cm、幅 28cm、奥行き 25cm で、正面に横書きで「村内安全」、縦書きで「願主／權六／世話人／伊兵衛」と刻まれる。旧道に架かる杣谷橋の脇にあったものが移設された。これらの石仏は、熊野詣やお伊勢参りへ向かう旧人などの信仰を集めていたと伝わる[2]。

図３　蛇留観音

図４　足守地蔵

図５　いぼとり地蔵

河内集落を過ぎると、国道・旧道とも２本の橋を渡る。『伊勢参宮道中記』には「一満ゆみヨリ　長嶋江　貳リ半／此間　川有　橋有　峠ニ勢州紀州之境」とあり[3]、江戸時代の熊野道もこの辺りに橋があったと考えられる。その先、国道は梅ヶ谷川の右岸を辿り、旧道は左岸を辿る。熊野道は、旧道に重複すると考えられているが、国道と旧道の間にも道の痕跡が残っている。河内集落を過ぎ、国道と旧道の分岐点から旧道を 50mほど進むと左手に猪垣があり、左に折れる道が

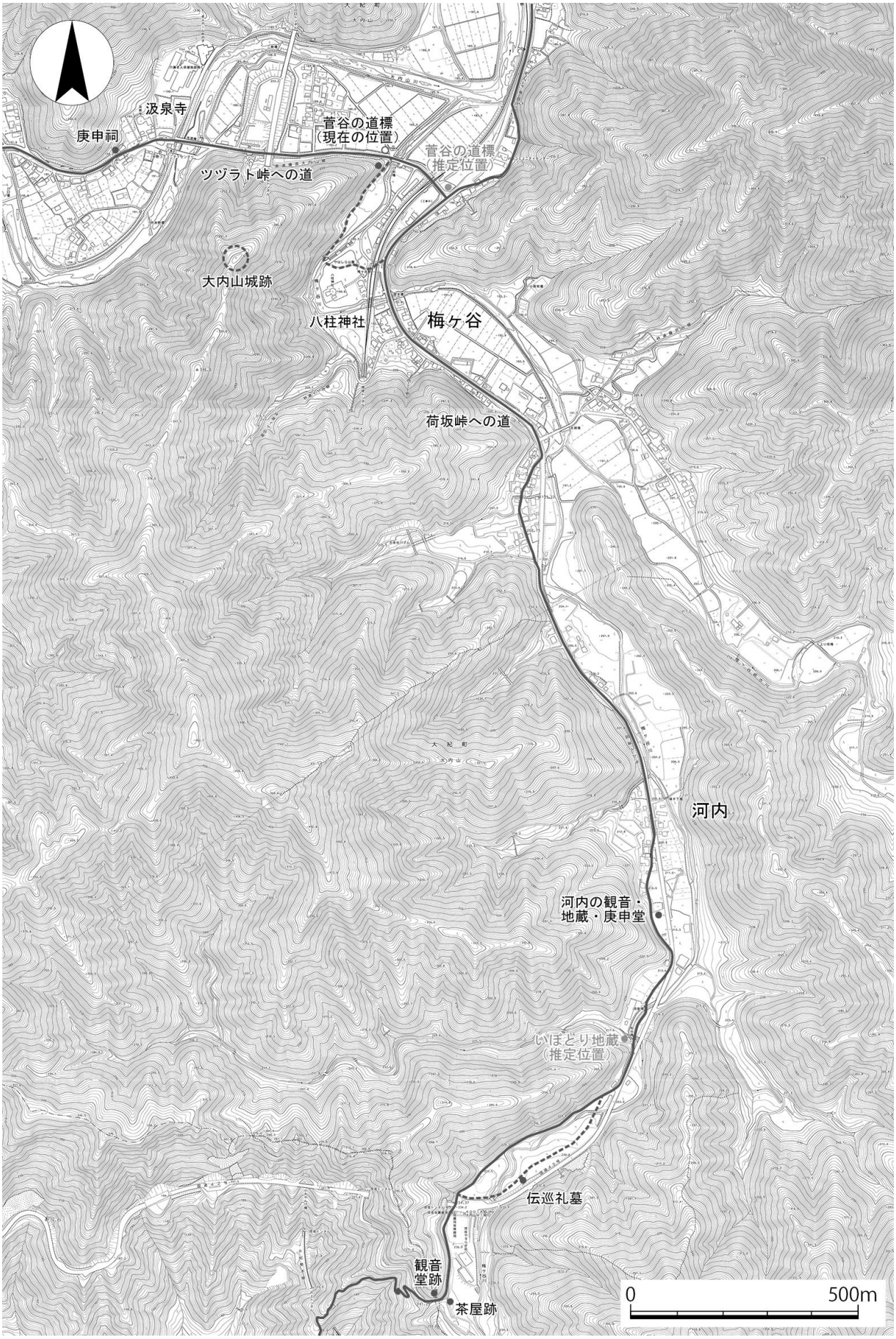


図６ 梅ヶ谷から荷坂峠の道（1/15,000）

残っている。この道は、梅ヶ谷川を渡った後は、概ね国道の西裾を辿る。幅は 1.4～2.6mで、両側には猪垣や石積みがあり、周囲には区画された耕作地の痕跡が残る。道は、峠の頂上手前で再び梅ヶ谷川を渡り、国道および旧道と合流する。道の両側には猪垣や石積みで区画された耕作地跡があり、また、巡礼者の墓と伝えられる石も存在する。この石は、高さ 50cm、幅 24cm、奥行き 18cm の自然石で、周囲には幅 0.8m、奥行き 1.1mの範囲で石組みが行われている。銘文はなく、墓かどうかは定かではないが、周囲の猪垣や石積みの存在を考えると、江戸時代の熊野道が、国道と旧道の間の梅ヶ谷川沿いを通っていた可能性も考えられよう。

図７　梅ヶ谷川沿いの道

図８　伝巡礼墓

○荷坂峠道

荷坂峠は二坂峠とも呼ばれ、頂上はかつての伊勢国と紀伊国の国境にあたり、『西国三十三所名所図会』に「荷坂嶺　是より紀伊國牟婁郡ト号す」と記されるほか、多くの道中記や日記にも国境の記述がみえる。現在、世界遺産および国史跡の範囲としては、北は荷坂峠の頂上部から、南は紀北町片上の降り口までの 1.1km が対象となっており、標高差はおよそ 200mである。『西国三十三所名所図会』には「上り十二丁　下り十八丁」とあり、これは概ね大紀町大内山の梅ヶ谷南端（河内集落）から、紀北町東長島の片上（旧片上村）北端までに相当する。この間が荷坂峠道と認識されていたようである。

現在の国道は昭和 42（1967）年に完成した荷坂トンネルを突き抜け、谷筋を大きく西に迂回して片上に至るが、それまでの熊野道はトンネルの 200mほど南にある切通しの位置を通っていた。江戸時代の道（以下、江戸道）はそのまま尾根筋を下るのに対し、明治時代の道は切通しを過ぎて一旦西に迂回した後に、この尾根筋を蛇行する「くるま道」（以下、明治道）と、現在の国道 42 号を辿る「新道」の２本が存在していた[4]。頂上部の切通しには、南側に茶屋跡、北側に観音堂跡が残る。

【観音堂跡】　切通しの左斜面（北側）、現在の道より 4.5mほど上に観音堂跡がある。かつては石段があったが、現在は崩落し、痕跡のみが残る。堂跡は幅 1.7m、奥行き 2.2mの範囲で斜面が削

図９　荷坂峠頂上の切通し（左手前が茶屋跡）

図 10　観音堂跡

図 11　観音堂跡下の石積み（角最上段の石に銘）

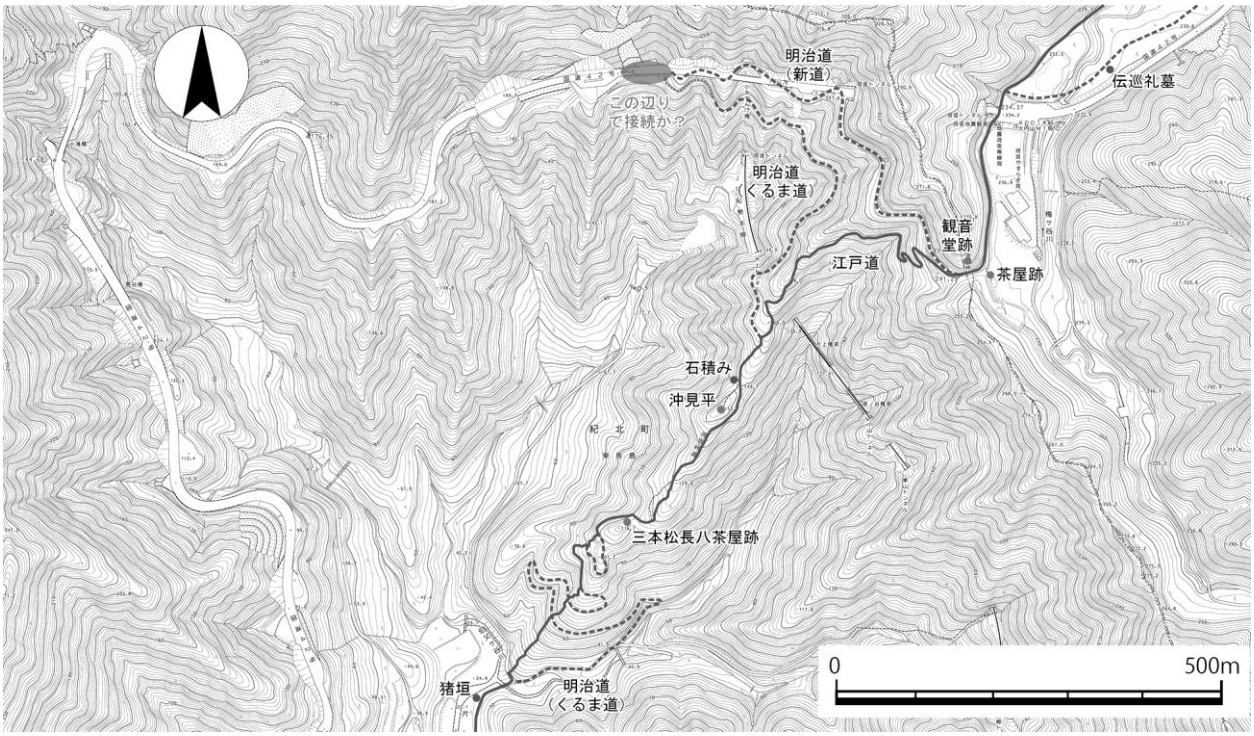


図９　荷坂峠道（１：10,000）

られ、三方に石積みが組まれている。観音堂内や石段左脇にあった石仏は、前述の河内集落に移されている。また、観音堂下の石積みには「二坂次郎／東傳三郎／建／文化元（1804）／子三月」と刻まれた石が残る[5]。この石は、明治道を作る際に、切通しの掘削に伴って、積みなおされたものと考えられる。観音堂に上る石段の右脇に位置し、さらに石積みの角の最上段という目立つ場所に配置されていることから、観音堂に関わる可能性が高い。観音堂は老朽化により弘化 4（1847）年に再建されているが、この老朽化した堂が文化元（1804）年に建てられたものであろうか。

図 13　つづら折れ

図 14　尾根上の道

【茶屋跡】　茶屋は昭和 10（1935）年ごろまで存在していたが[6]、現在は観音堂跡の向かい側、切通しの南側に敷地跡が残るが、削平のため、茶屋があった痕跡は窺えない。弘化２（1845）年に書かれた「篠崎家文書　道中記帳」（伊勢西国道中日記）には、「勢州と紀州の国境の（峠上）茶屋仁坂（屋）次郎二而休」[7]とあり、観音堂下の石積みの銘文とあわせて、江戸時代後期には、仁坂屋（二坂屋）と呼ばれる茶屋が存在していたことがわかる[8]。

頂上の切通しを過ぎると、緩やかに右に曲がる明治道と、左に折れて斜面を下る江戸道に分かれる。江戸道は、急な斜面を下るつづら折りの道が続き、幅は 0.9m程度と狭い。道には露出した角礫が散乱

するが、石畳は存在しない。谷筋の木橋を抜けて、しばらく尾根斜面を等高線沿いに進むと、尾根上に出て、左手に太平洋や長島の町並みが一望できる。道は小規模な切通しを抜けて、緩やかな傾斜となり、明治道と合流する。幅は 1.3mほどとなり、切通しが続くとともに、明治道と江戸道が交錯して、一部重複しながら、沖見平や三本松長八茶屋跡に至る。沖見平への分かれ道手前には、道の右下に長さ約 0.5m、高さ約 1.7mの野面乱層積みの石積みが残る。

図 15　切通し

【沖見平】　江戸道を右に折れ、20mほど進んだ尾根上に、沖見平と呼ばれる場所がある。ここからは太平洋や長島の町が眺望でき、『西国三十三所名所図会』の絵とよく似る。図会にも「峠より向こうを眺望ハ東南の滄海渺〻として紀の路の浦〻遠近ニ連り長嶋二江なんど眼前にありて風景言語に絶す」とあるように、これまで山中をぬけてきた巡礼者は、荷坂峠で初めて目にする太平洋の景色に目を奪われたことは想像に難くない。現地には、江戸時代の俳人で紀行作家の鈴木牧之が、寛政８（1796）年に荷坂峠で詠んだ歌２句[9]が掲げられている。

図 16　沖見平から長島を望む

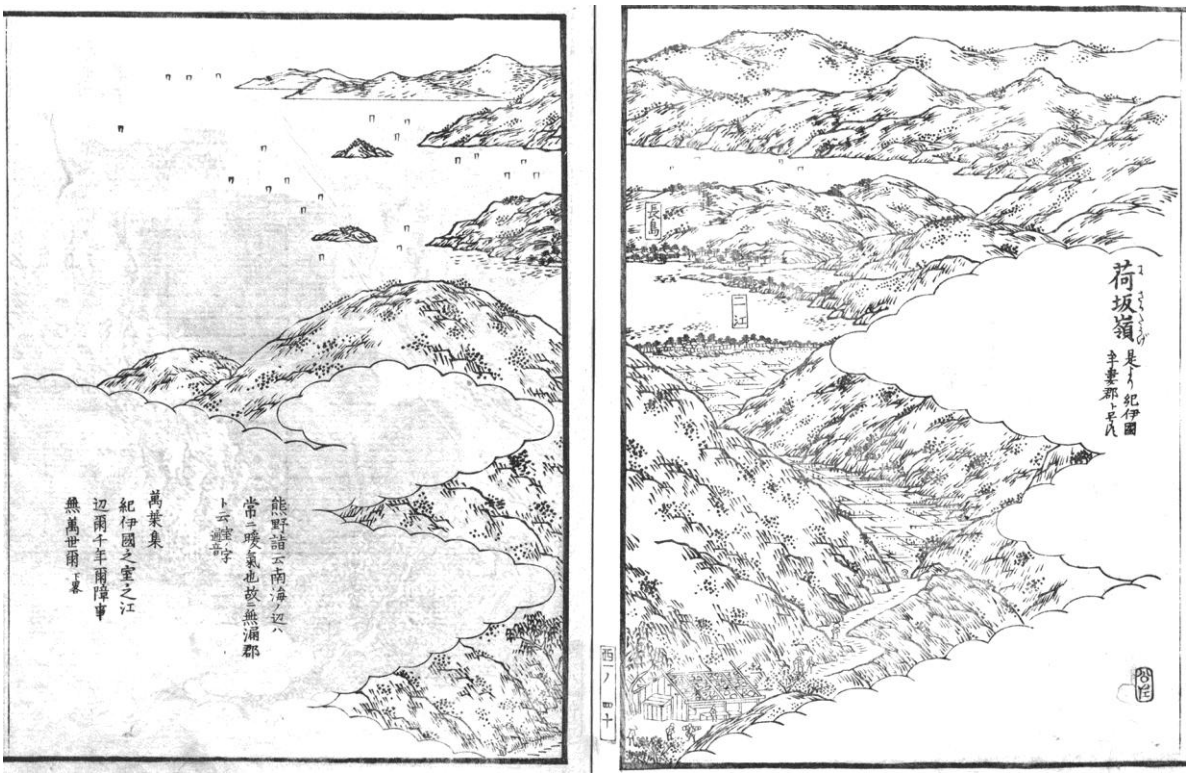


図 17　荷坂嶺（『西国三十三所名所図会』）

【三本松長八茶屋跡】　江戸道の左手の尾根上に、幅４ｍ、奥行き 16mほどの平地があり、かつては三本松と呼ばれ、茶屋があった場所と伝わる。現在は茶屋の痕跡は残っていない。

図 18　三本松長八茶屋跡

茶屋跡の右脇を下ると、再び江戸道と明治道が交錯しながら、長島側の降り口に至る。江戸道は幅 0.9mほどで直線的に急傾斜を下るのに対し、明治道は幅２～３ｍほどで傾斜は緩く、等高線に沿いながら尾根を大きく蛇行して降り口に至る。降り口は片上川と支流の合流点で、ここから片上集落までは平坦な道となる。

荷坂峠道については、和歌山藩が江戸時代になって整備し、ツヅラト峠道に代わり、荷坂峠道が本街道になったとされてきた。正徳２（1712）年に藩令により街道筋に一里塚が設置され、片上にも一里塚が造られたとされる [10]。また、正徳４（1714）には、藩内の道路整備を行っており、紀州藩か積極的な街道整備を行っていたことは疑いない [11]。荷坂峠道に残る蛇留観音も宝暦３（1753）年銘であるので、江戸時代前期には荷坂峠が利用されていたと考えられるが、ツヅラト峠よりも峠の標高が 100m以上も低く、また大内山と長島を結ぶ最短経路であったことを考えると、江戸時代以前にも双方を結ぶ近道として、荷坂峠道が存在していた可能性も考えられよう。

図 19　江戸道

図 20　明治道

図 21　長島側降り口

○片上の道

片上集落の北端まではおよそ 850mある。長島側降り口から、片上川を渡るとすぐ右手に猪垣が、左手には耕作のための石積みが残る。猪垣は高さ約１～1.5mで、現在は北面と道沿いに石積みが残り、約 50m続く。北面と基礎部分には人頭大の大きな石が使われ、上部は小規模な石で築かれている。耕作地は斜面を３～４段に整地したもので、中央部には石段がある。また、片上集落に至る途中には、紀北町指定文化財の一里塚跡石仏碑が残る。

図 22　猪垣

【一里塚跡石仏碑】　荷坂峠の長島側の降り口から南に 500mほど進んだところに、一里塚跡がある。かつて一里塚があったとされる場所で、現在も石仏が祀られている。地蔵菩薩の左側には「来應智源禅男」、右側には「心月智光法尼」の銘が刻まれていることから、石仏はもともと供養碑であったのであろうか。一里塚は藩令により正徳２（1712）年に設置され、近年まで石積みの塚があり、一里塚の近くには「松屋」と呼ばれる茶屋があったとされる [12]。

熊野道は国道 42 号をくぐり、片上集落に入る。道は西側の丘陵裾を辿る。片上集落の中ほどには青

図 23　一里塚跡石仏碑

図 24　片上の青面金剛

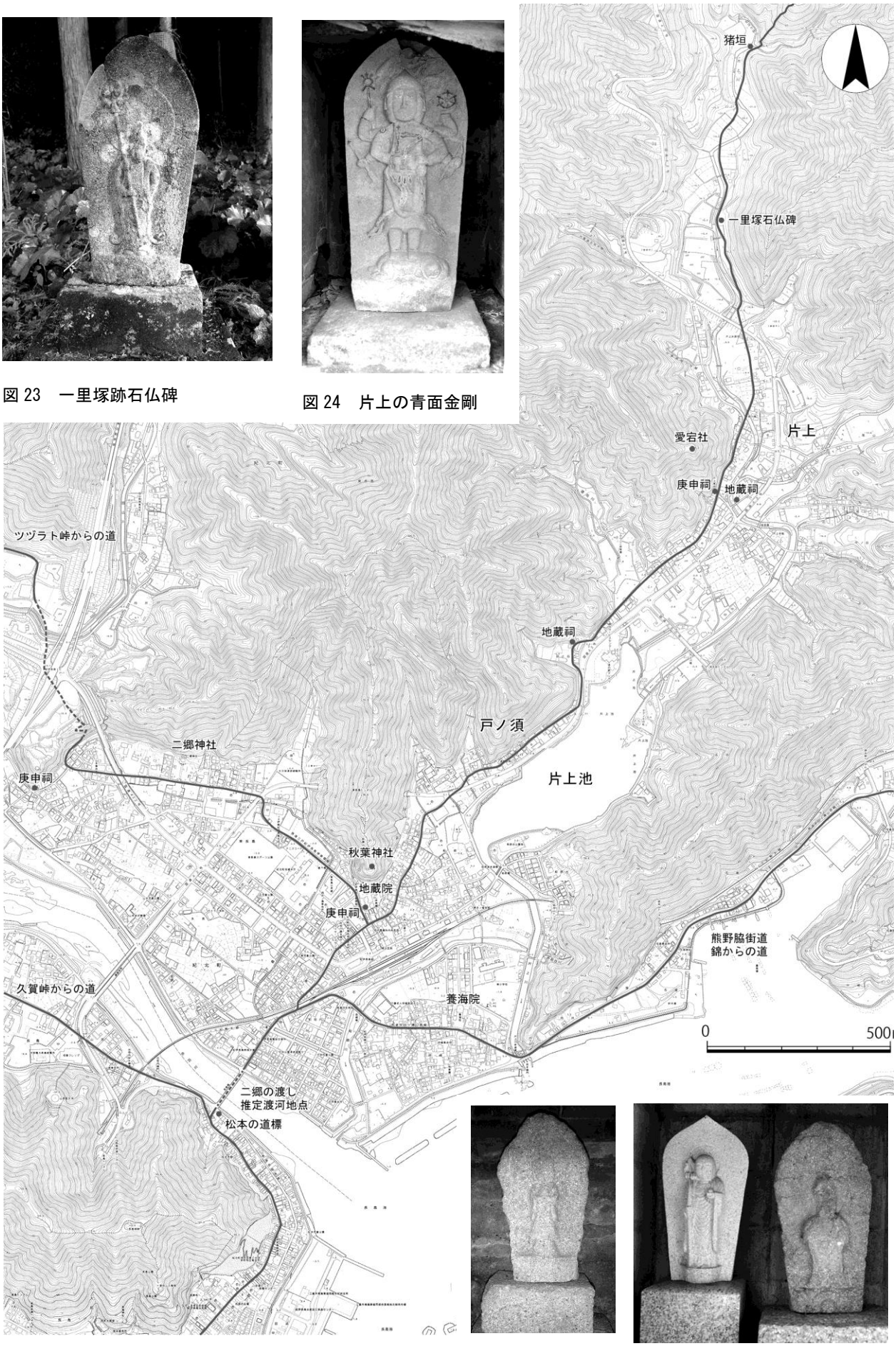


図 25　荷坂峠～二郷の道（1/15,000）

図 26　片上の地蔵

図 27　片上南端の地蔵

面金剛の石仏を祀る庚申祠があり、その上に愛宕社が所在する。また、熊野道を東に少し入ったところに地蔵祠があり、地蔵の右側に「た□やそふ」の銘がある。集落南端にも地蔵菩薩を祀る祠があり、片上池に至る。『西国三十三所名所図会』の片上池の記述には「片上村ニあり街道の左也」とあり、熊野道が池の西側を通っていたことが窺える。

○二郷の道

片上池西側の戸ノ須集落を抜け、熊野道は東長島へ至る。東長島はかつて二郷と呼ばれ、片上を含めて赤羽川左岸一帯は、旧二郷村に属していた。江戸時代には、和歌山藩の伝馬所が置かれ、呼崎には遠見番所が設置されるなど[13]交通の要衝として重要な場所であった。熊野道は地蔵院の前でツヅラト峠から志子を経てきた道と合流する。その後、JR 紀伊長島駅南側で紀勢本線を渡り、ここで大紀町錦から続く熊野脇街道と合流して、赤羽川へ至る。現在の長島橋の位置が二郷の渡しであったとされ、川を渡ると長島へと入る。江戸時代の旅日記等によると、干潮時は徒歩で川を渡り、満潮時や増水時は上流に迂回するか船で渡っており、19 世紀になると恒常的な舟渡しが成立したようである[14]。

註

（1）　大内山村史編纂委員会「64　河内の観音・地蔵・庚申堂」『大内山村史　文化編』大内山村、2004 年。

（2）　前掲（1）。昭和 64（1989）年の調査では、如意輪観音の台座正面は「南無阿弥陀佛」と判読している。

（3）　大馬金蔵『伊勢参宮道中記』1786 年。（復刻岩城資料白銀文庫第三巻、いわき地域学會出版部、1993 年。）

（4）　「くるま道」は「新道」以前に造られたと考えられるが、成立時期やどの位置で「新道」と接続していたかは不明である。一方「新道」は、明治 44（1911）年に測量が行われた陸地測量図（大正２（1913）年刊）に描かれていることから、明治 19（1886）から同 21（1888）年の改修工事の際に造られたものと考えられる。
紀伊長島ふるさと懇話会「昔を偲ぶ道の話」、2004 年。
家崎彰「荷坂峠の「くるま道」」『峠の茶屋の忘れ物（その１）　紀北町の熊野古道 江戸道と明治道』海山町郷土資料館特別展示資料(通算 45 号)、2024 年。

（5）　伊藤文彦『熊野古道伊勢路を歩く　熊野参詣道伊勢路巡礼－』サンライズ出版、2015 年。

（6）　三重県教育委員会『歴史の道調査報告書Ⅰ（熊野街道)』、1981 年。

（7）　() 内は行右側に記載。萩原龍夫「享保初年 弘化二年 伊勢西国道中日記（抄)」『史料と伝承』第５号、1982 年。

（8）　「荷坂峠　蛇留観世音　再建の勧進書」によれば、観音堂再建の発起人は「善五郎」と記される。紀北町大原の大昌寺の天井にある奉納絵の一つに「荷坂　久保善五郎」の名が見える。家崎彰氏のご教示によれば、久保家は志子にあり、近代まで荷坂峠で茶屋をしていたとの話が残っているとのことであり、二坂屋との関係は定かではないが、峠で茶屋を行っていた久保善五郎が観音堂再建の発起人であった可能性が高いと考えられる。

（9）　「長嶋や世を遁るなら此のあたり」「嶋山や霞もくめず千々の景」の２句が詠まれている。
鈴木牧之「西遊記神都詣西国順礼」『秋月庵発句集』、1830 年。

（１０）　紀伊長島町史編さん委員会「第三章近世　第七節交通」『紀伊長島町史』、1985 年。

（１１）　西山孝樹・藤田龍之・天野光一「『南紀徳川史』にみる社会基盤整備の記述に関する基礎的研究」『土木学会論集 D2（土木史)』第 77 巻１号、土木学会、2021 年。

（１２）　前掲（８)。町史によると松屋と呼ばれる茶屋は東家が営んでおり、荷坂峠頂上の石積みに刻まれた「東傳三郎」が松屋の関係者であれば、二坂次郎や久保善五郎も含め、茶屋の関係者が観音堂を勧進・再建の中心であった可能性が考えられる。

（１３）　「二郷村」『三重県の地名』平凡社、1983 年。

（１４）　『西国順礼日記』や『南勢西国記』では船渡しを利用した記述がある。また、『巡礼通考』では「川アリ　歩渡リ」とあり、『伊勢参宮道中記』には「塩時者／川上を渡る　大水ニハ船渡し」とあり、水位や旅人の状況に応じて様々な渡河方法が採られていたことが窺える。
中野某『巡礼通考』1680 年。辻武左衛門『西国順礼日記』(本宮町史編さん委員会 1997『本宮町史』近世史料編）1773 年。
西川正規・おもと・弥平南勢西国記』岐阜市博物館蔵（三重県教育委員会 1986『伊勢街道-歴史の道報告書』)、1855 年。
伊藤文彦「文化遺産としての「巡礼路」の保存と継承の研究～熊野参詣道伊勢路を事例に～」博士論文、2019 年。

２　梅ヶ谷から長島（ツヅラト峠道）

○　梅ヶ谷

梅ヶ谷の道　熊野道は滝原より、大内山川を遡上する形で南下する。大内山川は梅ヶ谷で西から北へ大きく流路が蛇行し、JR 梅ヶ谷駅の北約 500m地点で小河川である梅ヶ谷川と合流する。熊野道は字菅谷で分岐し、梅ヶ谷川に沿って道を南進すると荷坂峠へ、大内山川に沿って西進するとツヅラト峠へと至る。現在の国道 42 号・県道檜原大内山線の分岐点と江戸時代の熊野道の分岐点はほぼ重複すると考えられ、分岐から県道を約 150m西進した右手側には、国道が整備される以前の分岐点にあったとされる菅谷の道標が平成 16（2004）年以降設置されている。菅谷の道標（図 28）は、高さ 110 ㎝、幅 35 ㎝、奥行き 28 ㎝の花崗岩製で、正面に「(左指差し）くまの道」、左面に「右いせ道」と記される。現在はツヅラト峠道への道を「くまの道」と呼ぶが、従来は荷坂峠道を指したとされる[1]。また、この分岐点より約 250m南西には、蛇行する梅ヶ谷川に囲まれて八柱神社（図 29）がある。梅ヶ谷川を渡河後、現在の川口橋を越えた左手にはコンクリート製の庚申祠が設置され、背後の丘陵尾根上には中世の大内山城跡が位置する。紀勢自動車道の高架下を通って西進し、寺浦橋の架かる大内山川を越えると、すぐ右手に森宝山汲泉寺（図 30）が位置する。

図 28　菅谷の道標

【八柱神社】　天平勝宝元（749）年創祀と伝えられ、明治４（1871）年に村内７社が合祀されて八柱神社に改称されるまでは二天八王子社と称された[2]。ツヅラト峠道に進むには、梅ヶ谷川を渡河する必要があるが、分岐点から当社を経由して渡河する経路も想定される。

【大内山城跡】　標高 240mの丘陵尾根上に位置し、地上との比高は約 70mある。先の分岐点を見下ろす交通の要衝に立地し、北畠氏家臣の大内山氏によって室町時代に創建されたと伝わる。堀切を境に、南北の小規模な曲輪からなる[3]。大内山但馬守の屋敷地は、中世遺物の散見する汲泉寺前の中野垣内遺跡などが想定される。

図 29　八柱神社本殿

【森宝山汲泉寺】　現在は曹洞宗寺院で、延久（1069～1074）年間に土地の領主が開創したとの寺伝をもつ。大内山但馬守の菩提寺として、境内には一族の墓とされる五輪塔群がみられる。現在の本堂は銅板葺き入母屋造で昭和 47（1972）年の建立。本尊は室町時代の作とされる地蔵菩薩坐像である。本寺の伝来品には、県指定有形文化財（工芸）の雲板があり、銘文から永正 10（1513）年に製作されたことがわかる[4]。

汲泉寺を出てすぐ右手に煉瓦積みの庚申祠がある。庚申祠から約 250m西進すると、南北に大きく蛇行する大内山川にぶつかるが、当時も大きく迂回せず、周囲の浅瀬を渡河したと考えられる。

図 30　汲泉寺本堂

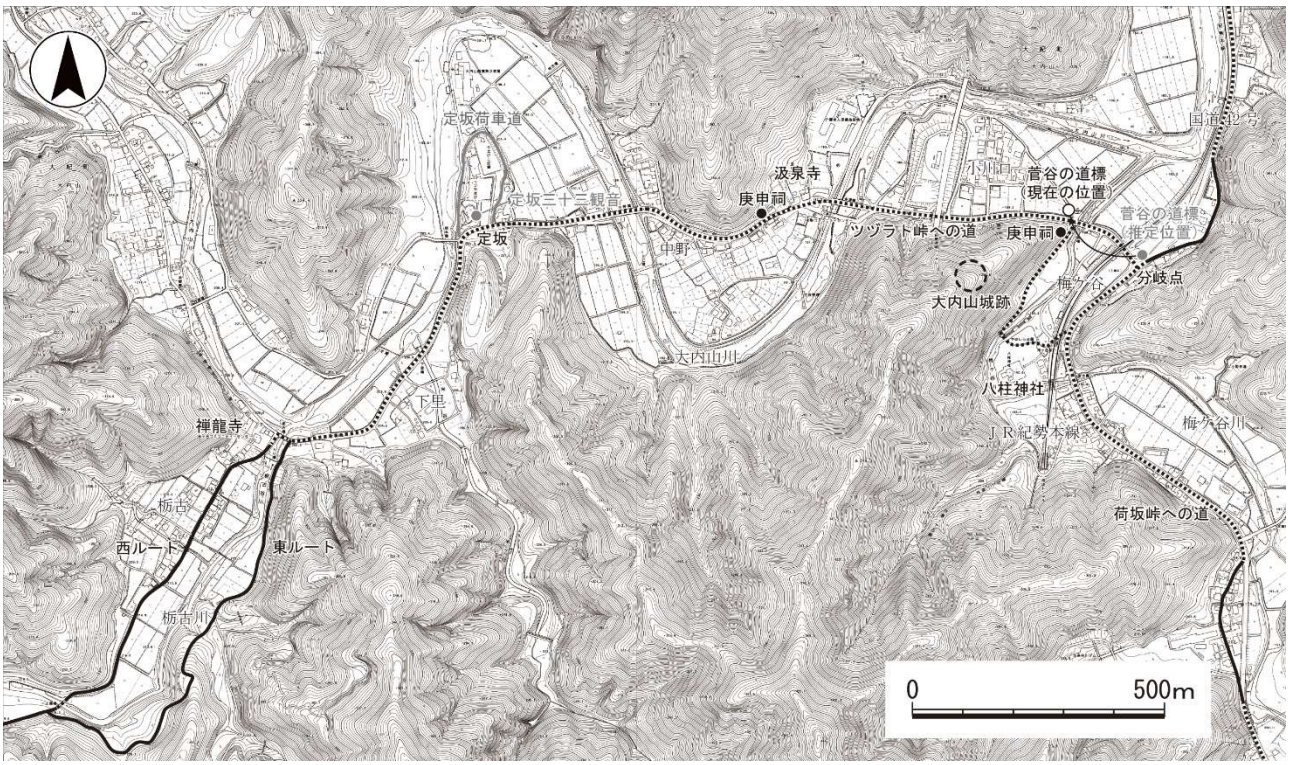


図 31　梅ヶ谷から米ヶ谷への道（1/15,000）

○　米ヶ谷

米ヶ谷の道　現在の中野橋を渡り、約 300m西進した先の字定坂の丘陵には、江戸時代には荷車が越えられない山道があった。明治 19（1886）年の大内山村地籍図[5]には、定坂の山道とは別に、丘陵を迂回する荷車道（図 32）が記されている。現在の丘陵は、県道の切通しにより分断されているが、地元住民の口伝などをもとに、昭和 9（1934）年以降に花山院遥拝所碑と定坂三十三観音菩薩等が設置されている。

図 32　定坂の荷車道

定坂を過ぎて川沿いに約 600m南進すると、大内山川と支流の栃古川の合流地点に至る。この地点で、ツヅラト峠へと向かう道は東西の二手に分かれる。東側は栃古川を渡らずに左に折れ、川沿いの森林内を進む道、西側は栃古川を渡って大渓山禅龍寺（図 33）に至り、栃古集落を抜けて再び栃古川を渡る道である。それぞれ約 800m～1㎞南進すると合流し、さらに約 500m南進すると分岐する林道が現れる。

図 33　禅龍寺本堂

【大渓山禅龍寺】　現在は曹洞宗寺院で、寺の過去帳に淳説和尚が元禄 12（1699）年から享保 12（1727）年まで住職をしたとの記録が残っている[6]ため、それ以前の創建と考えられる。本堂は瓦葺き入母屋造であるが、建立年は明らかとなっていない。宝暦 13（1763）年完成の『三国地誌』では「善龍寺 米ヶ谷（こめがたに）村」と記載されている[7]。本尊は釈迦如来である。

図 34　ツヅラト峠道（1/8,000）

ツヅラト峠道　林道をさらに約 200m南進すると、右側に幅約２ｍの砂利敷きの道が現れ、ここから先が世界遺産のツヅラト峠道の区間となる。この分岐点には、旧大内山村の頃の「旧熊野街道ツヅラト峠登口」と世界遺産登録時の「熊野参詣道ツヅラト峠道」の石柱が設置されている（図 35）。砂利敷きの道を緩やかに下りながら約 50m進むと、谷沿いの小川に架けられた木橋を渡る。木橋の先にある階段を上ると土道となり、標高約 230m地点から峠の標高 357mまでの比高約 130m分を、約 500ｍの山道で上る。上り道の大部分は幅 1.0～1.8m程度の山寄せの道（図 36）で、石畳や石段は敷かれず、石垣による補強も行われていない。約 200m進むと、過去の山崩れによる影響で傾斜が急となるため、横木を渡した階段が整備されている場所がある。周辺では、過去に何度も山崩れが生じたようで、２か所で流出した路肩に丸太橋を架けて補強している。さらに約 200ｍ進むと、林道に再び合流し、整備された階段を約 50m上ると峠に到達する。

図 35　ツヅラト峠道への分岐点

図 36　ツヅラト峠道上りの山道

峠は、幅約 10～20mの尾根の平坦面にあり、一部で岩盤の露出がみられ（図 37）、眼下は紀伊長島の町と熊野灘が眺望できる（図 38）。伊勢神宮を出発した巡礼者にとって最初にみる熊野の海で、現在は休憩施設のあずまやとともに、旧大内山村「旧熊野街道ツヅラト峠」の石柱がある。

図 37　ツヅラト峠に露出した岩盤

伊勢国と紀伊国の国境となる峠からの下り道は、標高 357mから標高約 100mまで、約 250mの比高を長さ約１㎞のわずかな区間で下る。かなりの急傾斜で、道が「つづら折れ」に何度も曲がるため、「ツヅラト」の名称が付けられたと推測できる。この道は、紀州藩主の徳川頼宣が進めた藩政改革の中で、寛永 12（1635）年に新宮から田丸（紀州藩領）までの伊勢路を熊野往還道として整備した際、大内山村から長島浦への路線が荷坂峠道に変更されたと考えられてきた[9]。明確にツヅラト峠道からの路線の変更を示す文献史料はないが、江戸時代には「荷坂」を示す史料が多数みられること[10]や片上一里塚が所在すると推測されること[11]から、荷坂峠道が熊野道として頻繁に使用されたことは間違いない。一方、ツヅラト峠道が江戸時代より遡って熊野道として使用されたことを示す史料は存在しない。

図 38　ツヅラト峠から望む熊野灘

しかし、江戸時代後期にはツヅラト峠の存在を示す記述がいくつかみられ、天保元（1830）年の『紀伊続風土記』には、「（略）志子の丑の方二十町許勢州米（ヨネガ）（ママ）谷村に至る米ヵ谷の峠を紀勢の界とす（略）」[12]、天保４（1833）年の『勢陽五鈴遺響』には「大内山ノ内米ヶ谷ヨリ渓路廿町ヲ経テ紀州牟婁郡赤羽へ径アリ」[13]とある。ほかにも江戸時代後期と考えられる『木国絵図』[14]や『紀伊国絵図』[15]には、現在の大内山から長島区間で「ツヅラト峠道」と「荷坂峠道」とみられる２つの道が示されており、ツヅラト峠道側には「二郷村ヨリ勢州米ヶ谷迄一里」との記載がある（図 39・40）。

図 39　『紀伊国絵図』にある地名と経路（和歌山県立博物館蔵）

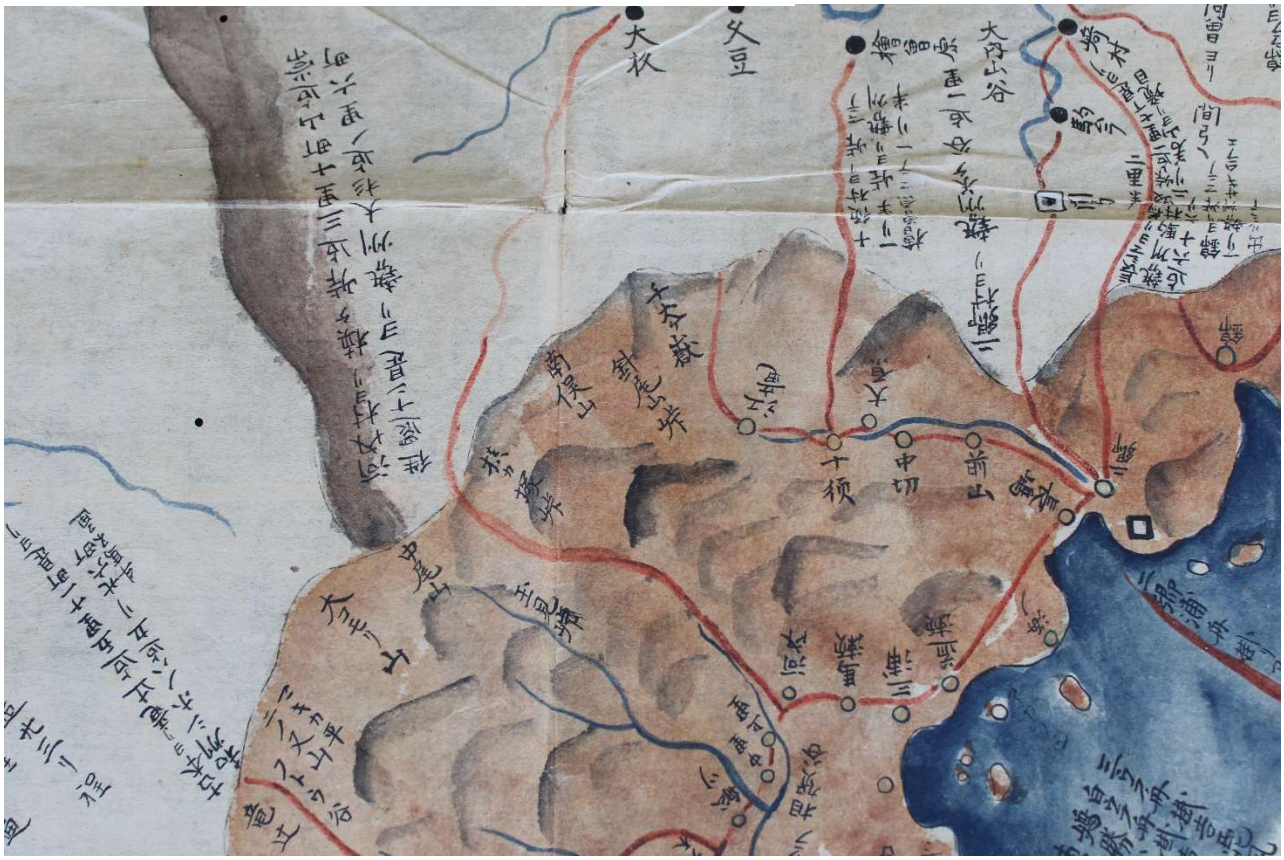


図 40　『木国地図』にある地名と経路（わかやま歴史館蔵）

以上、ツヅラト峠道については、明確に中世に遡る根拠は見当たらないものの、江戸時代に巡礼の道として利用された可能性を否定することはできない。

では「ツヅラト」の呼称はいつから使われるようになったのか。江戸時代まで遡る資料はみられないが、明治 20（1887）年には「字ツヽラ谷」[16]、明治 22（1889）年「字ツヽラ谷」「ツヽラ山」「ツヽラ川」「ツヽラト峠」[17] の記載があり、明治 44（1911）年に「ツヅラト峠」[18] と記されることから、明治時代の中で「ツツラ」「ツツラト」などが、最終的に「ツヅラト」へと変化したものと推測される。

このつづら折れとなる道は、まず峠から岩盤の崖面を下るところからはじまるが、部分的に岩盤を階段状に刳り抜いている（図 41）。岩盤を抜けると急峻な土道をW字状に約 50m進む。その先は山崩れに起因する谷が複数みられ、標高約 200m地点に至るまでの長さ約 500mの区間では、それらを迂回するように幅約 1.8mの山寄せの道が緩やかに東西に蛇行している。この区間では、谷部に高さ２～３ｍの野面乱積みの石垣（図 42）が整備され、特に雨水等が流れるような場所では、石垣間に水路を設け、その上に木橋が架けられている（図 43）。標高 230m地点で、最初の石畳がみられるようになるが（図 44）、道全体に敷かれているわけではない。約 100m進むと左手に自然石が祀られた山の神祠がみられ（図 45）、さらに約 200m進むと石組の炭焼き窯が石畳と一体化している箇所がある。この標高約 200m地点から志子集落に延びる谷筋へは、比高約 100m分を 200～300mの距離で一気に下りる。そのため道は小刻みにつづら折れとなり、約 30 ㎝幅の不整形の砂岩・泥岩系堆積岩を不規則に敷き、目地を小石で充填するツヅラト峠道に特徴的な石畳[19] が断続的にみられる（図 46）。特に傾斜が急激に変化する地点では石段が採用されている。

図 41　岩盤を刳り抜いた階段

図 42　野面積みの石垣

図 43　石垣と木橋（紀北町側から撮影）

図 44　最初の石畳

図 45　山の神祠

図 46　石畳

石畳の終点には、旧紀伊長島町の頃に設置された「ツヅラト石道跡」の町指定文化財の石碑と「ツヅラト石道登り口」の石碑が立てられている。石段を下り、谷底にある志子川まで下ると、川下にある砂防ダムを迂回する道へと続く整備された石段があるが、当時は迂

回せずに小川沿いをまっすぐに下っていたらしく、現在も砂防ダムの脇にその名残の道が続いている。迂回路を約 250m南進すると、世界遺産登録の翌年の平成 17（2005）年に設置された「つづらと峠・魚まち」の石碑があり、さらに約 50m進むと小川手前の右手に地蔵祠がある。小橋で志子川を渡ると、右手に正面「右いせ道／左やま道」、左面「明治四十五（1912）年赤羽青年団」と記された志子の道標がある（図 47）。この道標は、全く同じものが２基１対となって峠にも設置されていたが[20]、山頂の道標は現在行方がわからなくなっている。志子の道標からさらに約 300m南進すると、左手にコンクリート製の地蔵祠があり、地蔵には「空／導地蔵／大正十五（1926）年六月造」と記されている（図 48）。住民の話によると、この地蔵はもともと峠付近に設置されていたが、昭和に大紀町側で定坂三十三観音が盗難されたこともあり、管理の行いやすい麓まで志子の住民が移設したという。志子川に沿った山裾の道をさらに約 400m南進すると、志子の集落の入口に至る。

図 47　志子の道標

図 48　導地蔵

○　志子

中桐への道および円通閣　先行研究や地域の伝承では、荷坂峠道が成立する以前の中世の道として、ツヅラト峠道から志子を抜け、赤羽川を遡上して中桐にある円通閣に立ち寄り、島地峠を越えて長島の加田へと至る経路が考えられてきた[21]。特に聖観音像を本尊とする円通閣（図 49）については、明治 22（1889）年の『三重県紀伊国北牟婁郡地誌』で、「此観音堂ハ西国手引ノ観音ト云フ故ハ本村ハ古クハ熊野街道ニシテ熊野権現三所及ヒ西国巡礼道ナリ（略）」と記載され[22]、さらに「本尊の聖観音は西国三十三所巡り手引きの導観音である」「朝寝をしていて札所となりえず以来朝寝観音とよばれる」などと口承されており[23]、円通閣が古くから西国巡礼の対象であったことが強調されている。事実、昭和 30（1955）年に円通閣の大修理が行われた際、本尊が安置された下床板裏に「奉彩色観音像並脇立于時万治元戊戌（1658）従十月（略）泉福寺補巌」と記されていたことが確認され[24]、「奉寄進寛文己巳（1665）五歳十二月吉日　大工高野太夫家次勢州河崎釜屋　紀州牟婁郡赤羽荘中前（ママ）村徳生山長（ママ）福寺　前山村水谷友三郎姥」の銘文を持つ鰐口が現存している[25]。江戸時代前期から聖観音が泉福寺（図 50）または長福寺の本尊として、地域の信仰の対象となっていたことは間違いない。

図 49　円通閣

図 50　泉福寺

しかし、明治時代の史料や口承を除き、江戸時代以前に遡って西国巡礼や熊野参詣と円通閣の関係性を示すような史料、道中日記などは確認できていない。たとえば『紀伊続風土記』には、中桐村の項目

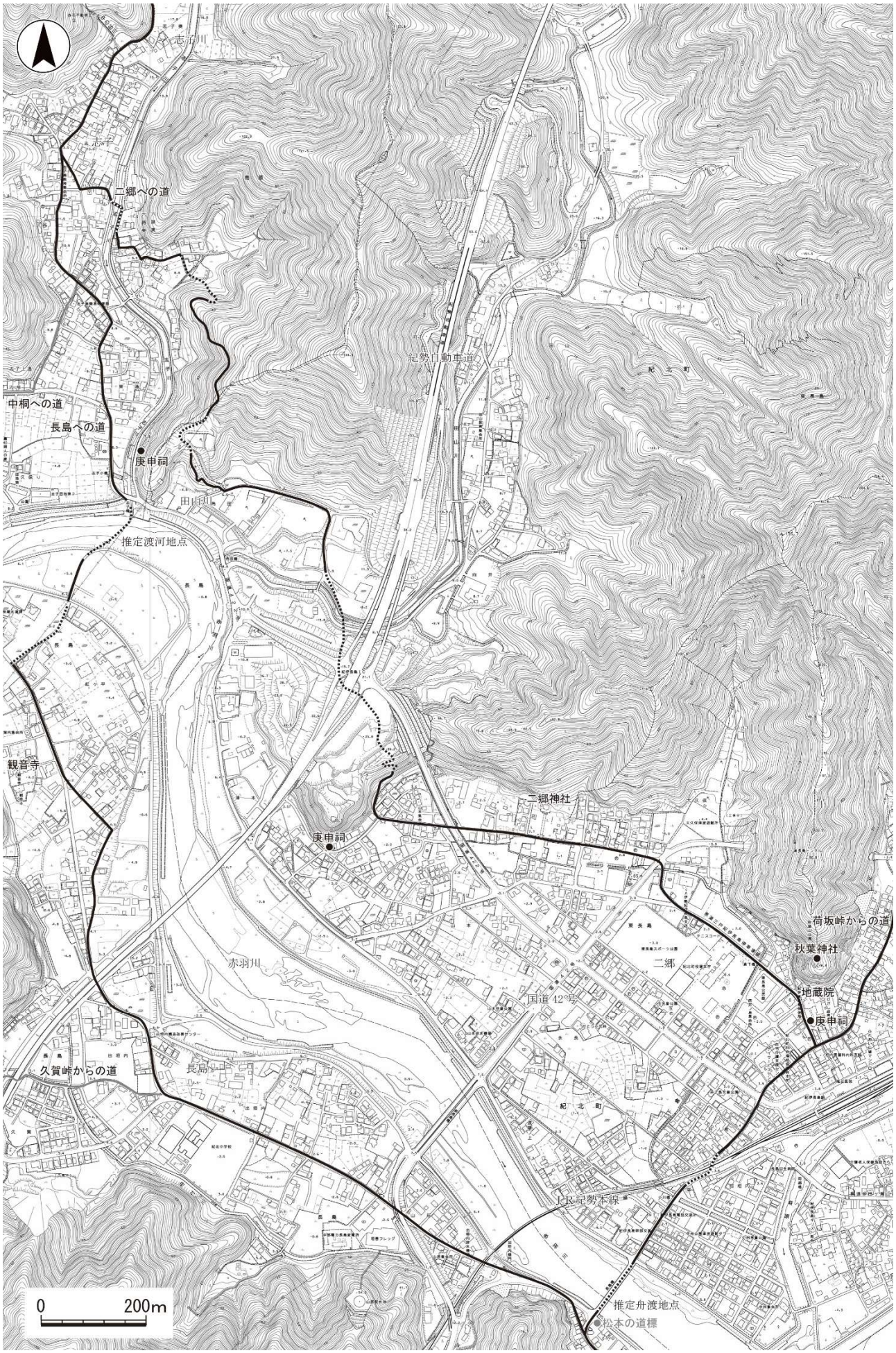


図 51　志子から二郷・長島への道（1/10,000）

に「泉福寺」はあるものの、円通閣や長福寺の記載は見当たらない[26]。また熊野道について、江戸時代の絵図では、ツヅラト峠道から南下した道は、中桐ではなく二郷（現在の東長島、昭和 25（1950）年に長島町に編入）あるいは長島に向けて延びている[27]。以上、明治時代の記述や地域における伝承はあるものの、江戸時代まで遡って円通閣が巡礼の対象として、また島地峠道が熊野道として使用された根拠が確認できなかったため、本報告ではこの経路についての詳述は控える。

図 52　二郷への山道・上り道

図 53　二郷への山道・尾根筋

図 54　二郷への山道・下り道

二郷・長島への道　ツヅラト峠道から下りてきた道は、志子川を渡って志子集落内に入る道と、志子集落には入らずに志子川と丘陵間を通る狭隘な町道に分岐する。町道は、約 1.4 km南進すると赤羽川沿いの県道水戸紀伊長島停車場線に至るが、これは後世に造成されたものであり、志子集落内を通る道が熊野路であろう。集落内を約 600m南進すると、南東の志子川対岸集落に抜ける道と、そのまま南進して赤羽川に至る道に分岐する。二郷へと向かう場合は、志子川対岸集落へと抜けて、東側の丘陵を越える。畑や作業場など、近年の造成により不明瞭な部分は多いが、山中には尾根へと至る幅 1～1.5mの道が残っている（図 52～54）。一方、赤羽川に向けて約 700m南進すると、安政[5]（1855）２年と記された像を含む３体の青面金剛石像からなる志子の庚申祠（図 55）を志子川対岸に望み、現在は丘陵を切通しで二郷へと至る県道に合流する。江戸時代の絵図に従い、当時はそのまま赤羽川を渡河し、対岸の長島に至った可能性を考えておきたい。

図 55　志子の庚申祠

図 56　山本への下り道

○　二郷

二郷の道　志子東側の丘陵を越える道は、途中で民間施設により消失しているが、田山川の北側に下りる。道はそのまま約 200m、田山川と並行しながら東進する。現在は紀勢自動車道の造成によって大きく改変されているが、もとはもう一つの丘陵を越える道が存在したと考えられる。明治 20（1887）年の「紀伊国北牟婁郡二郷村全図」では、「宇坂ノ谷」から上り、「字山本後」で集落へと下る道が記載されている[28]。山本庚申祠と山本会館の間で下り（図 56）、約 300m東進すると二郷神社（図 57）、約 600m南東進して地蔵院（図 58）および地蔵院庚申碑（図 59）、さらに約 100m南進すると、荷坂峠道を下りてきた二郷中心部を通るもう一つの熊野道と合流する。

【二郷神社】　弘安の役の翌年、弘安５（1282）年創建の伝承をもつ。正哉吾勝々速日天忍穂耳命を祭神とし、江戸時代には二天八王子社あるいは山本神社と呼称された明治 40（1907）年に殿州社・猪口社・山ノ神社・浅間社の四社に加えて、名倉の天ノ宮神社・金刀比羅神社が合祀され、明治 41（1908）年に二郷神社に改称された[29]。

【竜王山地蔵院】　曹洞宗寺院で、寛文６（1666）年、仏光寺二世風国大順の法弟全室による開山される。それ以前にこの地にあったとされる竜蔵寺から山号を竜王山としている。境内には延命子安地蔵として親しまれてきた六地蔵があり、地蔵院の由来とされている[30]。

【地蔵院庚申碑】　地蔵院の六地蔵横にお堂があり、紀北地域最大とされる高さ 114 ㎝の青面金剛立像と文字庚申碑が対になって安置されている。碑文には「（正面）奉供養庚申塔一基、（右面）東喜衛門佐母喜捨、（左面）元禄（1688）年四月吉日」とある。町指定有形（建造物）文化財。

図 57　二郷神社

図 58　竜王山地蔵院

図 59　地蔵院庚申碑

合流した熊野道は、方向を南西に変え、約 500m進むと赤羽川河口部に至る。対岸の長島へは赤羽川を渡ることとなるが、道中記には、潮時に応じて舟渡しあるいは上流での徒歩による渡河が行われたことが記されている。江戸時代後期の『熊中奇観』[31] では「二郷川舟ワタシ川向ひハ長島湊左ハ入海大島見ゆる此川潮ど紀にハ遥川上を渡るといふ」記述とともに舟渡しの絵図が掲載されている（図 60）。また、延宝８（1680）年の『巡礼通考　一名西国名所記単』には「ニ口（カウ）川アリ歩渡り」とあり、干潮時には上流部を徒歩により渡河したと推測される。

図 60　二郷から長島への舟渡し「熊中奇観」（和歌山県立博物館蔵）

註

（１）昭和 20 年代までは街道に設置されていたが、国道の整備以降、中央公民館で保管されていた。平成 16（2004）年に世界遺産登録を契機に現在の場所に設置された。大内山村史編纂委員会『大内山村史』文化編、2004 年。

（２）前掲註（１）。

（３）『日本城郭大系』第 10 巻 三重・奈良・和歌山、1980 年。

（４）三重県『三重県史』別編 美術工芸（解説編）、2014 年。

（５）「三重県庁文書」県指定有形文化財、三重県蔵。

（６）前掲註（１）。

（７）上野史古文献刊行会翻刻『定本三国地誌（上）・（下）』、1987 年。

（８）三重県教育委員会『歴史の道調査報告書Ⅰ―熊野街道―』、1981 年。

（９）『西国三十三所名所図会』「荷坂嶺」『西国三十三所道しるへ』「に坂」鈴木牧之『西遊記神都詣西国順礼』「二サカ峠」などに荷坂峠の記載がみて取れる。

(10) 前掲註（９）。

(11) 紀北町文化財調査委員会『紀北町の文化財』「片上一里塚石仏碑」、2012 年。

(12) 仁井田好古等編『紀伊続風土記』第３輯牟婁、物産、古文書、神社考定、1910 年。

(13) 安岡親毅著、倉田正邦校訂『勢陽五鈴遺響』第５巻、三重県郷土資料刊行会、1978 年。

(14)『木国地図』わかやま歴史館蔵。掲載にあたっては和歌山市まちづくり局まちおこし部和歌山城整備企画課（当時）の許可を得た。なお、この絵図は岩井宏美編『江戸時代図誌』第 18 巻畿内二、1979 年筑摩書房発行に「紀伊国絵図」として掲載されているが、掲載に際して行った調査では「木国（きのくに）絵図」であることが明らかとなった。

(15)『紀伊国絵図』（江戸時代、和歌山県立博物館蔵）。

(16) 明治 20（1887）年の紀伊国北牟婁郡嶌原村全図に「九十九折れ」部分の下り道の字名は「字ツヽラ谷」と記載されている。前掲註（５）。

(17) 野地義智『三重県紀伊国北牟婁郡地誌』全 復刻版、1973 年。島原村に大内山村往還道として「（略）志子ヨリ北方ニ折レツヽラト峠ニ至ル伊勢国度会郡大内山村界迄一里十七町八間則坂ナリ」と記される。そのほかにも「ツヽラ山」「ツヽラ川」「ツヽラ谷」とあり、明治時代以前には地名として定着していたと考えられる。

(18) 大日本帝国陸地測量部「長嶋」、1911 年。

(19) 三重県・三重県教育委員会『熊野古道と石段・石畳』、2007 年。

(20)『紀伊長島町史』紀伊長島町史編さん委員会、1985 年。

(21) 前掲註（８）。

(22) 前掲註（17）。

(23) 平松令三編『三重県の地名』郷土歴史大事典、日本歴史地名大系 24、1983 年。

(24) 西田益三『新長島風土記』昭和 31 年版、紀伊長島ふるさと懇話会、1996 年。

(25) 前掲註（20）。

(26) 前掲註（12）。

(27) 前掲註（14）（15）。

(28) 前掲註（５）。

(29)「二郷神社御由緒」より。

(30) 前掲註（20）。

(31)『熊中奇観』（江戸時代後期、和歌山県立博物館蔵）。

３　長島から三浦

○　長島

長島の道　赤羽川を渡河して長島に至る経路は少なくとも三つが想定できる（図 51）。一つ目は、『紀伊国絵図』に基づき想定される経路（図 39）で、ツヅラト峠道を下り、志子から二郷を経由せずに直接渡河して長島の北部に至る。二つ目は二郷から河口部を舟渡しにより渡河する経路、三つ目は干潮時等に二郷の上流部を歩いて渡河する経路で、道中記等にあるように二郷の集落内を経由した渡河が最も多く利用されていたと考えられる。志子から渡河した場合は、観音寺の北北東の地点で長島側の道に出る。そこから約 900m南進すると、中桐から久賀峠を越えて下りてきた道と合流するが、このあたりに二郷から赤羽川を歩いて渡河した場合の合流地点があったと推測される。

久賀峠道との合流地点から約１km進むと、今度は二郷からの経路に合流する。この周辺には「(正面）東　左熊野道（左面）南　右伊勢道、(裏面）西　大杉赤羽道、(右面）明治三十二年十月」と記された松本道標（図 61）があったが[1]、現在は風の広場公園に移設されている。松本道標から熊野道を南西に約 500mに進むと右手に長楽寺（図 62）および長島城跡があり、さらに約 200m進むと右手に仏光寺（図 63）が位置する。

図 61　松本道標（正面・左面・右面・裏面）

図 62　城腰山長楽寺

図 63　大島山仏光寺

図 64　津波供養塔（宝永４年・正面・左面）

【長島城跡】　『紀伊続風土記』では岡山城跡（城腰）と記載されている中世の山城で、初代加藤甚左衛門により至徳元（1384）年に築城されたとする記録がある[2]。南方斜面の平場もこの城の一部と考えられ、麓に位置する長楽寺は加藤氏の居館があったと推定されている[3]。天正年間に戦火により焼失したと伝わる。

【城腰山長楽寺】　浄土真宗本願寺派の寺院で、本尊は阿弥陀如来である。寛永 12（1635）年に僧賢誓によって開山され、宝永４（1707）年地震に伴う津波で記録や什器が流出したとの記事がある[4]。また長楽寺には、五世住職服部性慶師が安永２（1773）年に記した町指定文化財である『長楽寺古絵図』のほか、境内には戦国期の五輪塔・宝篋印塔などが残されている。

【大島山仏光寺】　曹洞宗寺院で、本尊は釈迦如来である。元和９（1623）年に三州大龍が陽浦山常光院として開山し、二世風国大順の明暦元（1654）年に山号を大島山に改めて、寺域を現在の場所に移した。さらに四世別伝芳禅は、正徳３（1713）年に常光院の寺号を現在の仏

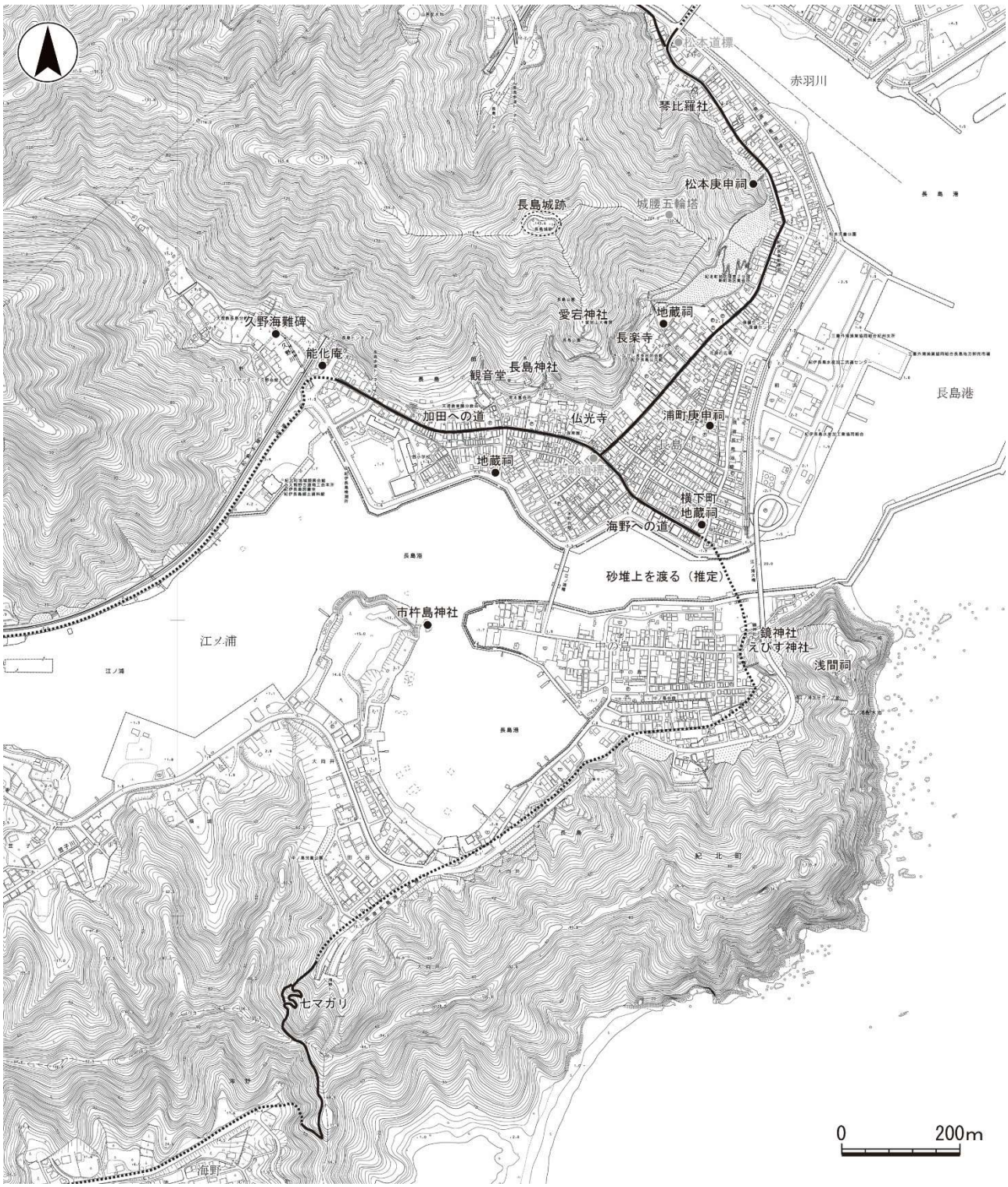


図 65　長島から加田・海野への道（1/10,000）

光寺に改めた。先述した二郷の地蔵院に加えて 10 の末寺があり、江戸時代は格式の高い寺院であったとされる[5]。

【津波供養塔】　仏光寺境内に２基あり、宝永地震と安政（嘉永）地震の大津波被害が記録されている。特に宝永地震の記録は「（正面）経／塚／津波流死塔、（左面）宝永四丁亥（1707）年十月四日未ノ上刻大地震直ニ／津浪入在中不残流失其上五百餘人流死／仕候自今以後大地震時者覚悟可有事」とあり（図 64）、この津波の被害が甚大であったことを伝えている。

仏光寺を過ぎると、長島の中心地であった本町の四ツ角に至り、菓子店の脇に本町道標（図 66）がある。この道標は、昭和 28（1953）年まではこの地にあったが、船だんじりと接触したために折れ、その

後の紆余曲折を経て、郷土資料館の開館に合わせ、元の位置に戻されたものである[6]。「(正面) 是より那智山に二十四里／北　右くまの道、(右面) 西　左いせ道、(左面) 丁安政四年(1857)／巳二月吉日／立之　施主／小津屋とみ／宇田屋柳／嵐屋とき／田中屋とめ」とあり、北から来た熊野道は右に曲がって加田方面に西進し、西から来た伊勢道は左に曲がって二郷方面に北進するという道標である。

ただし、この熊野道の認識は、18～19 世紀以降のものである。江戸時代後期の『熊中奇観』には、長島の記述に「(略) 此町すぐに左にいたれば濱通海野に至る、是古道なり、今は右の方へ行熊野路也、海野は海邊景色よし、又鏡池といふ有 (略)」とあり[7]、長島から右・加田への道を今の道、長島から左・海野(かいの)への道を古道とする。実際、延宝８ (1680) 年の『巡礼通考一名西国名所記単』では、「大嶋山 浄(ママ) 光寺 (略) 長嶋ヲ出テ入海アリ七マガリト云道アリ　鏡坂　麓ニ丸キ池アリ (略)」と記載されており[8]、先述の仏光寺が大島山常光院 (浄は誤記か) であった時期と合致するため、信憑性は高い。また、海野には鏡池と呼ばれる円形の池が現在もあり、17 世紀後半には海野を経由して古里に至る道も使用されていたと考えられる。一方、海野を介さず加田から古里に至る一石峠道についても、17 世紀以前の記録がないわけではない。元禄３ (1690) 年の『西国三十三所道しるへ』には「長嶋より古里の一こく坂と云小坂あり此坂すぎて又小さかあり」と記されており[9]、17 世紀末には、海野を経由する道と一石峠道が併用されていた可能性がある。このことは江戸時代後期の『紀伊国絵図』からも読み取れ、道を示す線は加田を経由するように江ノ浦の入り江沿いを進むが、地名としては海野と記されている[10]。これらを踏まえると、熊野道は、17 世紀末には海野と加田を通る経路が併用されているが、18 世紀後半には海野経由の道が古道とされ、一石峠道が熊野道となったらしい。この間には、先述した宝永４ (1707) 年の宝永地震および大津波があり、残存する道中記も宝永３ (1706) 年と享保 16 (1731) 年の間に約 25 年の空白期があることから、この災害が熊野道にも大きく影響を与えた可能性がある。

以上、長島から古里までの熊野道は、加田を経由して一石峠道を使用する道と、17 世紀以前の海野を経由する古道があり、本報告では両者を熊野道として取り扱う。

加田の道　本町道標を右に曲がり、江ノ浦に沿って加田方面に街中の道を西進する。右手には長島神社 (図 67) や西町観音堂 (図 68) があり、約 500m進むと現在の国道 42 号に合流する。この地点には、現在は能化庵(のうげあん) (図 69) と呼ばれる堂があり、背後には明治 32 (1899) 年の久野海難碑を含む長島墓地が広がっている。国道 42 号を江ノ浦に沿って約 800m南西に進むと、右手に JR 紀勢本線赤羽踏切があり、踏切の先に加田の道標や地

図 66　本町道標 (正面・右面・左面)

図 67　長島神社

図 68　西町大師堂 (観音堂)

図 69　能化庵

蔵が祀られた祠がある。

【長島神社】　天正年間の長島城の戦火により社殿や記録が焼失したため、創建時期は不明である。建速須佐之男命が祭神で、近世には牛頭天王社と呼ばれていた。街道沿いの高台に位置し、毎年１月の神社祭礼には船だんじりが出される[11]。

【西町観音堂】　仏光寺や長楽寺の創建以前から静居庵（じょうごあん）と呼ばれた堂があり、平安末から鎌倉の聖観音坐像が安置されている。静居庵は三州大龍が得度し、同地に常光院を創建したとされ、その後に仏光寺が現在の場所に移される際に観音堂のみがこの地に残された[12]。

【能化庵】　宝永大津波により 500 人余りが亡くなったため、既存の墓地には埋葬しきれず、現在の西町小学校の周辺に埋葬された。その際、死者を供養するために地蔵菩薩が安置する能化庵が建立された。小学校校地の拡張に伴って現在の場所に移されている[13]。

図 70　加田の道標・地蔵

加田の道標　祠には、地蔵菩薩立像と加田（かだ）の道標が安置され、地蔵には「（右面）自光性智童男、（左面）延宝三卯（1675）年三月晦日」、道標には「（正面）此三禅定門、（右面）文化十一戌（1811）天、（左面）四月十七日、（裏面）左くまの道」と記される（図 70）。明治 21（1888）年の「紀伊国北牟婁郡長島浦全図」（図 71）[14] より、この道標の前が島地峠から下りてきた道と熊野道の合流地点であることは明らかであり、熊野道が現在の国道よりも山側を通っていた可能性がある。道標には「左くまの道」とだけ記載されており、長島から来た巡礼者が、誤って島地峠方面に行かないために設置されたと考えられる。なお、この分岐点でも、円通閣や泉福寺など島原中桐方面へと導くものは存在しない。さらに、近世以前の島地峠の下り道と熊野道の接続点は、島地峠から熊野方面への往来を想定した谷の西側ではなく、長島との往来を想定した谷の東側にある。島地峠道は、赤羽と長島を往還する生活道であったと考えられる。

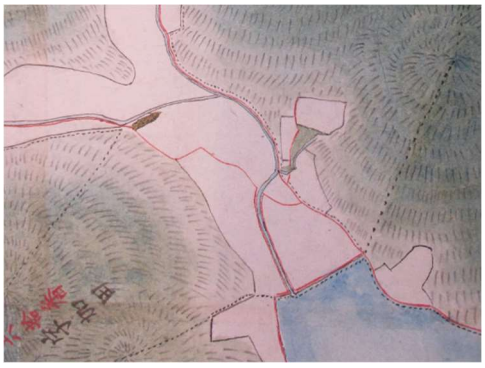


図 71　島地峠道と熊野道の合流点

（「紀伊国北牟婁郡長島浦全図」〔部分〕）

道標を過ぎ、現在は国道 42 号の高架道を約 800m西進すると、商店の脇に谷へと下りていく小道がある。この小道を約 200m南進すると、昭和初期に地元の人が行き倒れた旅人を供養するために設置した無縁地蔵があり、一石峠道への入口に続く道となる。しかし、国道の造成により、当初の道は大きく改変された。従来は江ノ浦に注ぐ小川の右岸沿いを進む道があり、とぎれとぎれではあるが、国道の高架下にその名残と考えられる道が残る。

図 72　一石峠道の入口

一石峠道　明治 44（1911）年に造成された長島隧道へと続く道を右にみて、無縁地蔵の前の直線的な道を約 200m進み、林道に合流する。林道を横断すると一石峠道の解説看板があり、こ

図 73　一石峠道 江戸道・明治道合流点

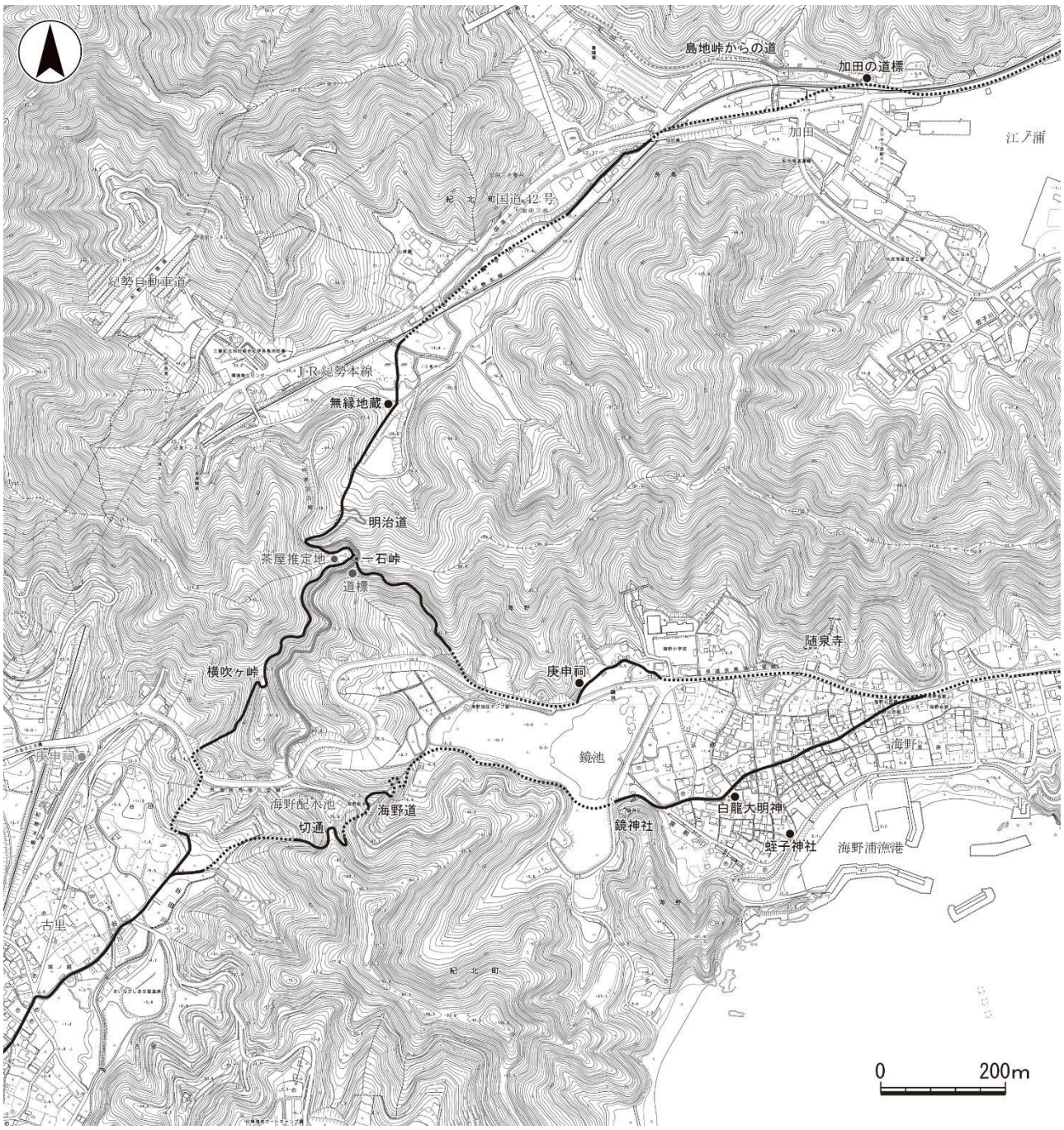


図 74　一石峠道・海野から古里への道（1/10,000）

の山道が一石峠道となる(図 72)。さらに直線的に約 50m進むと、幅が広い明治道と合流するが(図 73)、これを横断し、直線的に斜面を約 50m上る。再度、明治道に合流して約 20m東進すると、右手の急斜面に設けられた木段を上る（図 75）が、もともと峠に向けて緩やかに上る道があった箇所を明治道が寸断していると考えられる。木段を上るとすぐに尾根に向けて、幅 1.5～1.8mの横開削型の道（図 76）が約 20m続き、幅 4.8m、高さ 4.5～5.0mの巨大な明治道の切通し（図 77）を眼下に山寄せの道を進むと江戸時代の峠に至る。切り通しには一石峠道の看板とともに、海野の道標（図 78）が海野への三差路に設置されているが、本来は江戸道のある尾根部にあったと考えられる。

【海野の道標】　熊野街道と海野からの道の合流地点の三差路に設けられていたとされる道標で、「(正面）右くまの道、(左面）左いせ道」と示されている。20 年ほど前の林道工事で、海野側の崖下から発見され、現在の三差路の近くに置かれている。下半部が欠損しており、江戸時代の峠

周辺に下半部が埋まっているとされる[15]。

また、安永２（1773）年の「西国順礼日記」には「(略）いちこく峠上ニ茶屋一軒有、下り而ふるさと村（略)」とあり[16]、峠に隣接して茶屋が存在したことがほかの道中記も含めて明らかとなっている。峠から尾根部を南西に道を進むと、道と隣接する約 10m四方の平場があり、茶屋があったと考えられる（図 79)。茶屋跡推定地からは、鏡池と海野の集落、熊野灘を見渡すことができる（図 80)。峠から明治道と並行する幅 1.8mの山道を南西に約 300m進むと、幅約２m、高さ約 2.2mの小規模の切通しがみられ、地元の呼称では「横吹け峠」（図 81）と呼ばれている[17]。峠から緩やかに下る道を約 150m南進すると、県道長島港古里線によって道は寸断される。県道の下部も段々畑となっており、道の足跡を確認することは困難である。本来は古里の集落に向けて、緩やかに斜面を下りたものと推測され、現在は県道脇に移された古里の庚申祠も、もとは峠を下りた集落への入口に置かれていたとされている[18]。以上が加田から古里への新道である。古里へと入る前に、長島まで戻り、以下、古道である海野への道について記載する。

図 75　一石峠道 急斜面を上る木段

図 76　一石峠道 開削型の道

図 77　一石峠道 明治道切り通し

図 78　海野の道標（左面・正面）

図 79　一石峠道 茶屋跡推定地

図 80　茶屋跡からみた鏡池・海野集落

図 81　横吹け峠

海野への道　『熊中奇観』では、長島から左に進むと海野（かいの）へ至る古道があり、海野には鏡池があると記されている。さらに『巡礼通考一名西国名所記単』では、長島を出ると「七マガリ」という道が、鏡池の横を通る「鏡坂」までの間にあったと読み取れる[19]。長島を左に進むと「七マガリ」道で海野に至り、さらに鏡池の近くにある「鏡坂」を通って古里に至る道が古道と考えられる。

長島から左に進む道は、19 世紀に設置された本町道標から左というわけではなく、長島の集落内を通った後に江ノ浦を渡ったと考えられる（図 82）。正確にその経路がわかる近世史料は見当たらないが、明治 44（1911）年の大日本帝国陸地測量部の地図では、江ノ浦の開口部に砂州が伸びており、おそらくは干潮時であろうが、この砂州を渡る道が示されている（図 83）[20]。

図 82　江ノ浦湾口

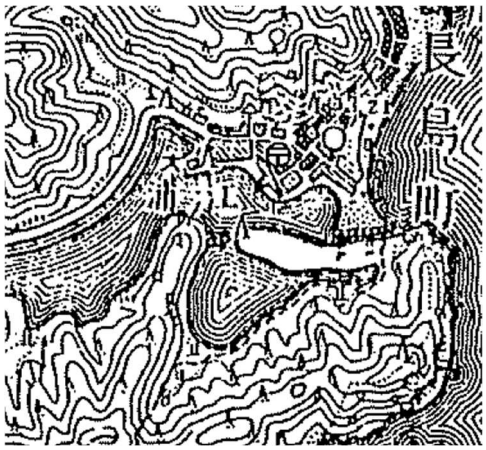


図 83　江ノ浦湾口の砂洲
（「大日本帝国陸地測量部」長島〔部分〕）

【鏡神社】　鏡神社（図 84）は山頂にある浅間祠と一体となり漁業者の信仰を集めている。社殿にある創建縁起には正平 13（1358）年に漁師が大島近海の小島海中で発見した鏡を神鏡とし、長島の平岩町に祠を建てて祀ったものが、現在の中の島地区に移されたものとされる[21]。なお鏡神社には元文５（1736）年、浅間祠には享保４（1720）年銘の石燈籠がそれぞれ残されている。

図 84　鏡神社（長島）

また、明治 21（1888）年の「紀伊国北牟婁郡長島浦全図」には長島から海野への道は記載されていないものの、同じ年の「紀伊国北牟婁郡海野浦全図」（図 85）では長島から山を越えて海野への道が記載されている[22]。明治年間の地図から推測すると、字田ノ谷から海野へと続く山道が、道中記に記された旧熊野道の「七マガリ」（図 86）であったと推測する。田ノ谷には、昭和 48（1973）年から平成 16（2004）年まで使用された海野浦隧道と、以降の県道長島港古里線のトンネルが通っており、現在も長島から海野への最短の道である。

図 85　海野への道
（「紀伊国北牟婁郡海野浦全図」〔部分〕）

「七マガリ」の道　「七マガリ」への道は、現在の県道が開通する以前の海野浦隧道に向かう旧道のさらに脇に山道の入口がある。この道は、電柱が設置された際にも使用され、山道の入口にはコンクリートの階段が設置されている。山道に入ると、約 100mは隧道と並行する緩やかな上り坂であるが、そこからは約 200mの距離で比高約 50mを上る。急な斜面となるため、道が九十九折れに曲がる箇所がみられ、これが「七マガリ」の語源であろう。つづら折れの区間が終わると、尾根に向けて幅約２mの緩やかな土道（図 87）がそのまま残存しており、そのまま標高約 80mの稜線へと上る。道は稜線上の道と接続し、稜線沿いを約 100m南進すると、右手に海野へと下る道が現れる。途中までは緩やかに下るが、比高約 30mを約 100mの距離で一気に下りる。海野集落の北東端、現在のトンネル南側から山道を抜け、海野集

図 86　七マガリの道

落へと向かう。

○　海野

図 87　七マガリ 尾根筋に続く道

図 88　白龍山随泉寺

一石峠道（海野）　海野の集落を南にみて、山沿いの県道を約 500m 西進すると道は分岐する。そのまま県道を進んで鏡池の北側の海野の道を通り、一石峠を経由して古里へと至る経路と、分岐で左に曲がり、海野集落を抜けて鏡池南側を通り、直接古里へと至る海野道である。北側の道は、分岐点をそのまま西進すると随泉寺（図 88）に至り、さらに約 300m進めば鏡池がみえてくる。ここで県道から離れ、鏡池を避けるように旧道を約 100m進むと、海野の庚申祠が右手の山間にひっそりと佇んでいる。再び県道に戻り、約 250m西に進むと、一石峠道の海野の道標への上り口があったと考えられるが、県道の切通しにより削平されている。現在は、県道の脇から急坂を上れば江戸時代の坂道に合流できる。道幅が約 1.8～2.0mの山寄せの土道で、途中では岩盤を刳り抜いて溝状の道となる部分もある（図 89）。緩やかに約 200m上ると、海野の道標がある一石峠明治道の三差路に至ることができる。

図 89　海野の道

【白龍山随泉寺】　寛文５（1665）年に長島の仏光寺二世風国大順により開山された曹洞宗寺院で、仏光寺末寺とされている[23]。

図 90　鏡神社（海野）

一方、南側の道は県道から南西に分岐し、現在の海野の集落内の道となる。約 500m南西に進むと海野の鏡神社（図 90）があり、鏡池（図 91）が目の前に現れる。先述した「紀伊国北牟婁郡海野浦全図」には、鏡池南側の湿地を抜け、古里へと通じる山道が記されており、海野から古里への最短経路となる。

図 91　鏡池

【鏡池】　18 世紀後半の『熊中奇観』や 19 世紀前半の『紀伊続風土記』には鏡池と記載されている。名称の由来は、池の形状と海へと流れる水路が柄の形にみえることによる。隣接して鏡神社が所在するが、創建時期や長島の鏡神社との関係性など、不明な点が多い。

海野道　先述した古里への最短の経路は、『三重県紀伊国北牟婁郡地誌』では、古里の字谷田と海野の字西垣内を結ぶ海野道と記される（図 92）。ただし、一石峠道が明治時代には県道（三等）であるのに対して、海野道は里道（二等）であり[24]、19 世紀前半に紀州藩の本草学者として活動した源伴存の『和州吉野郡群山記』でも「古里より海野へ行く道有り。領有り。山原を通る。右に海野の鏡池見ゆ。」とする[25]。熊野道が新道となる 18 世紀以降は一般的に一石峠道が使われていたと考えられる。

図 92　海野から古里への道（「紀伊国北牟婁郡海野浦全図」〔部分〕）

熊野道が海野を経由したと考えられる17世紀以前に、海野道を使用したとする明確な記録は見当たらない。しかし、距離的に海野から古里への最短経路となる海野道が使われたことを否定することはできず、熊野道として使用された可能性を示しておきたい。鏡神社から海野道への道は、鏡池の湿地帯を避けるように約 300m西進すると山道の入口に至る。現在は、山頂付近に

図 93　海野道 舗装された階段

図 94　海野道 山道

図 95　海野道 切り通し

図 96　海野道 下りの山道

ある海野配水池から鏡池に配水する水路が斜面に設けられ、管理用の舗装階段が整備されている（図 93）。階段の途中から分岐し、明治以前に遡る山道（図 94）も約 50m残存し、再び舗装階段に合流する。階段をさらに上ると海野配水池の建物前の林道と合流するが、本来の山道は林道により寸断されている。林道を約 50m北進したあたりから再び山道を上ると、幅 1.8～2.0m、高さ約 2.0mの海野道の切通し（図 95）が残っている。切通しを越えて、幅 1.8mの山寄せの道（図 96）を下り、古里へと向かうが、途中から段々畑の開削のため道は不明瞭になる。段々畑を下りると畑の用水路脇に出て、約 50m南進すると古里の舗装道に合流する。

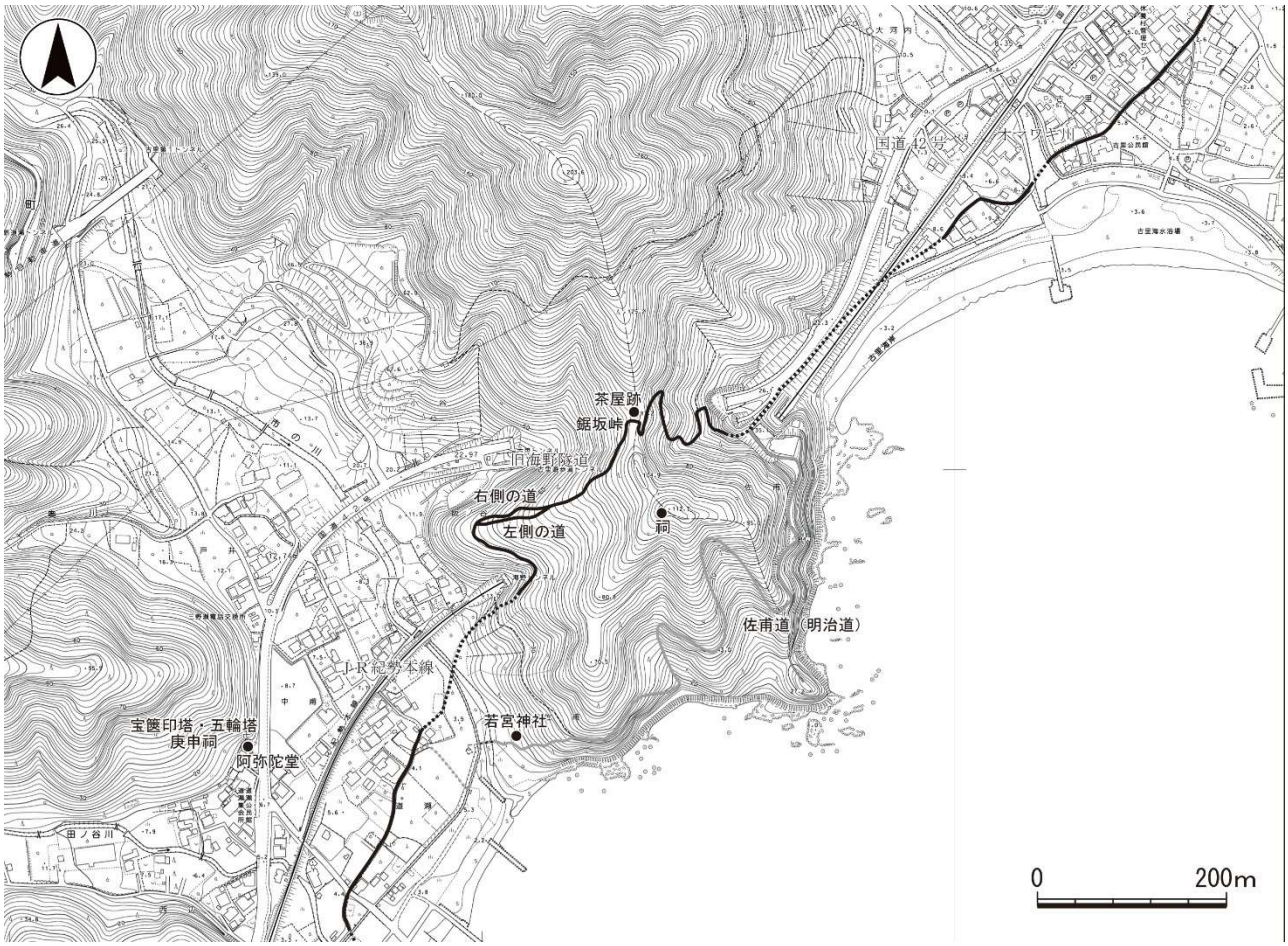


図 97　鋸坂（馬坂）（1/8,000）

○　古里

古里の道　一石峠道から山道を抜け、古里の集落の東北端から約 200m道なりに進むと、海野道を下りてきた道と合流する。そのまま南西に約 400m進むと、現在の民宿や旅館が建ち並ぶ街の入口となる（図 98）。街中の道を約 300m進むと、現在はオマワキ川の堤防に直進を阻まれるが、往時はそのまま川を渡って対岸の集落を抜けていた。道はその先で JR 紀勢本線と国道 42 号によって失われているが、当時はそのまま海岸沿いを山道に向けて南西に直進したと考えられる。古里の交差点から国道 42 号線に沿って約 500m進み、古里トンネルおよび旧海野隧道

図 98　古里の道

の左側にある廃ホテルへの坂（図 99）を上ると山道がある。これが「鋸坂（のこぎりざか）」と呼ばれる道である。

鋸坂（馬坂）　鋸坂は、嘉永６（1853）年の『西国三十三所名所図会』にも「鋸坂　馬坂とも云道急なり古里より道瀬ニいたる間之行程六丁許」と記されており、ほかにも近世道中記の中で「のこぎり（ノコギリ）坂」「のこきり（ノコキリ）坂」と表記される。また、『熊中奇観』では「馬坂俗にのこぎり坂といふ」とあり[26]、明治 21（1888）年の「紀伊国北牟婁郡海野浦全図」の字名にも馬坂という名称が残る[27]。古里から道瀬への道は、近代以降に海側に山を迂回する「佐甫道（さぼみち）」が荷車道として開通し、そちらが長く使用されるうちに鋸坂は人々の意識から薄れ、場所がわからなくなっていた。しかし、平成 23（2011）年に地元の有志が、近世陶磁器の散布から峠の茶屋跡を発見し、江戸時代の山道である鋸坂の場所が特定された。

図 99　鋸坂（馬坂）への道（左）

鋸坂への入口は、国道 42 号の歩道から分岐した坂を上る。廃ホテルの脇を左に曲がり、山沿いに進むと佐甫道へと通じるが、曲がらずにそのまま急傾斜の鋸坂への山道を直進する（図 100）。鋸坂は、もともと今の国道 42 号が通る場所に上り道があったと考えられるが、古里トンネルによって失われ、途中から残る山道に合流する。急傾斜の道はつづら折れとなり、約 150 mの区間で標高約 60mを上る（図 101）。途中には石段が残存している箇所があり、往時の状況を偲ばせる（図 102）。そのまま道を進むと標高 97m地点で峠となるが、峠は岩盤を高さ 30 ㎝ほど切り通し（図 103）、北側には茶屋跡と考えられる約 10m四方の平場（図 104）がみられる。平場周辺には、近世の陶磁器と川原石の玉砂利が少量散布し、茶屋および信仰の対象となるような祠が存在していたことが推測される。峠の茶屋とは反対側の尾根筋を上ると、標高約 110m地点にコンクリート製の祠が１基存在し、もとは茶屋と隣接して存在したものが、ある時点でここに移された可能性がある。この場所は、現在は背の高い杉林で見通すことはできないものの、江戸時代は広く熊野灘を見渡すことができたと考えられる。

図 100　鋸坂（馬坂）　上り口

図 101　鋸坂（馬坂）　つづら折れ

図 102　鋸坂（馬坂）　残存する石段

図 103　鋸坂（馬坂）　岩盤の切通し

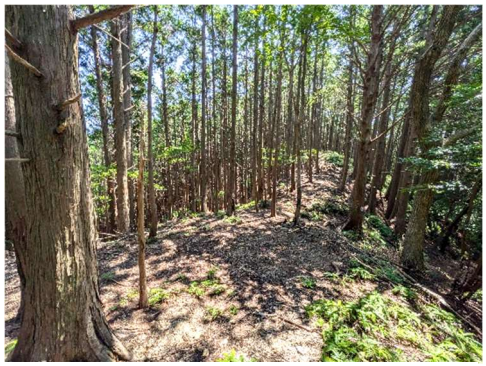


図 104　鋸坂（馬坂）　茶屋跡推定地

下り道は、峠を背に左に曲がる形ではじまり、上り道よりも比較的緩やかに尾根筋

を下る。途中で岩盤が露出する地点もあるが、山道の路面に合わせて削平されている（図 105）。幅約 1.5m の山道を約 100m西進すると、道が二股に分岐する（図 106）。この左右の２つの道は、約100m下ると最終的には合流する。左側の道は南側の尾根裾を通る幅約２mの山寄せ型の道、右側の道は尾根筋と並行する幅約1.5mの開削型の道で、両道の間は土塁状の高まりのようになり、樹木が繁茂している。もとは開削型の右側の道（図 107）があったものの、倒木や枯れ枝などの堆積あるいは水路化などの影響により、次第に右側の道は使われなくなり、その後に山寄せ型の左側の道（図 108）が整備されたと推測できる。合流した２つの道は左に曲がり、尾根から等高線に沿いつつ谷に向けて下る。約 50m進むと JR 紀勢本線の海野トンネルの上部を迂回する道となるが、本来はトンネル出口の線路付近に下りて、市の川を渡り、道瀬集落内へと入ったものと考えられる。現在は、迂回しながらもう一つの尾根を上り、段々畑の跡をつづら折れに下ると、佐甫道の延長上の道と合流し、階段で若宮八幡神社（図 109）の脇に下りる。神社前の赤い橋で市の川を渡り、堤防沿いの舗装道を約 50m進んで、堤防の階段を下り、約 50m北進すると、道瀬集落内の道に合流する。

図 105　鋸坂（馬坂）　岩盤を削平した道

図 106　鋸坂（馬坂）　分岐点

図 107　鋸坂（馬坂）　右側（開削）の道

図 108　鋸坂（馬坂）　左側（山寄せ）の道

図 109　若宮八幡神社

【若宮八幡神社】　『三重県紀伊国北牟婁郡地誌』によると、道瀬浦はもともと三浦にある豊浦神社を産土神としていたが[28]、ある時より三浦から分離したとされる。境内には恵比寿神社、山ノ神神社に加え、浅間神社遥拝社が近年設置されている。

○　道瀬

道瀬の道　現在の国道 42 号が開通する以前は、熊野道沿いに道瀬集落の中心があったと考えられるが、現在は国道周辺に商店や公民館が位置している。熊野道からは約 200m北西に離れるが、公民館の裏には、道瀬に関連する石仏・石塔群が集約された阿弥陀堂がある。

【道瀬宝篋印塔群】　阿弥陀堂の脇に 15 世紀後半の宝篋印塔４基と組合式の五輪塔が点在している（図 110）。そのほか、享保 21（1736）年の銘のある道瀬の庚申祠や「(正面) 三界萬霊、(右面) 寛政元（1789）年九月廿日、(左面) 堀内氏」と記された供養塔がみられる。正式名称は町指定有形（建

造物）文化財、道瀬五輪塔群。

熊野道は、舗装された道瀬集落内の道を約250ｍ南西に進むと田ノ谷川を渡る橋がある。この橋の手前で川と並行していた道は不自然にクランクし、直線的な道路へと接続する（図 111）。この道は明治 21（1888）年の「紀伊国北牟婁郡道瀬浦全図」にも記され[29]、後の大正３（1914）年に完成する旧海野隧道（古里歩道トンネル）へと連なる。おそらく、明治時代の佐甫道などと同様、荷車道として橋とともに集落内を横切る直線的な道に整備されたと考えられる。江戸時代以前は、田ノ谷川と並行した道はそのまま道瀬の海岸まで至り、現在はコンクリート堤防となった海岸線の砂堆上などを歩いたらしい（図 112）。道はそのまま道瀬遺跡を抜けて、現在も三浦峠の上り口となっている山道へと上る。

図 110　道瀬宝篋印塔群（阿弥陀如来堂裏）

図 111　道瀬 明治時代の直線的に続く道

図 112　田ノ谷川から三浦峠道への眺望

図 113　三浦峠道 上り口への分岐

【道瀬遺跡】　熊野灘臨海都市整備事業に伴い発掘調査が行われた遺跡で、平安時代末から鎌倉時代の製塩炉や古墳時代中・後期の関東系土師器を含む多数の土器が出土している[30]。

三浦峠道　道瀬跨線橋に連なる舗装道から林道を約 100m進むと、三浦峠道に分岐する木段の道が左手に現れる（図 113）。階段を上ると幅 1.8～2.0ｍの山寄せの道となり、すぐ左手に世界遺産登録時の「熊野参詣道／三浦峠道（熊ヶ谷道）」の石碑と解説板がある。杉林の中の山道を約 200m進むとつづら折れとなる区間が続き（図 114）、約 100ｍの等高線に沿って緩やかに上りながら北進すると、再度つづら折れとなる。この区間は、明治道と江戸道が併存しており、小刻みに曲がり、つづら折れとなって直線的に上る道が江戸道、大きく蛇行して、緩やかな道が明治道と考えられる。途中には現在は使用されていない旧道が２か所あり、どちらもかなりの急坂となる。嘉永６（1853）年の『西国三十三所名所図会』に「坂道急なり三浦坂ともいふ」と記されたことを考えると、急坂が江戸道であったと推測される。つづら折れ区間から約 50m南進すると標高約 118m地点で、幅約３ｍ、高さ約 3.5～４ｍの三浦峠の切通しが現れる（図 115）。本来は尾根付近を越えていたものを、荷車道の整備に際して切通しとしたものであろう。

図 114　三浦峠道 つづら折れ箇所

図 115　三浦峠道 切通し

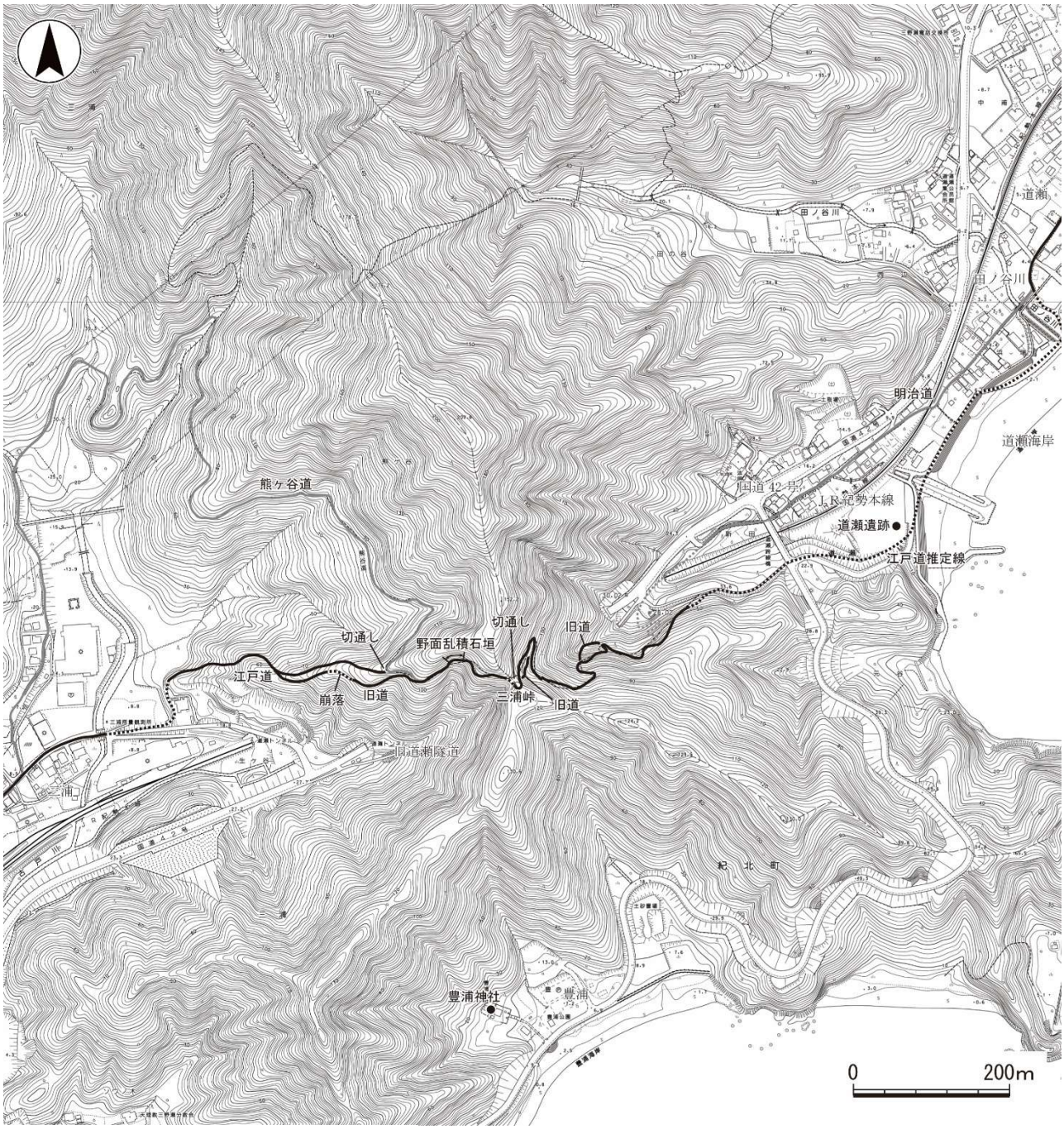


図 116　三浦峠道（1/8,000）

切通しを抜けると道は右に曲がり、幅 1.8～２ｍの山寄せの道となる。約 100m山道を西進する野面乱積みの石垣区間があり（図 117）、さらに約 50m進むと江戸道が分岐する（図 118）。この道は、幅 1.8ｍの山寄せの道が約 80m続くものの、先で崩落しておりそのまま直進することはできない。先述した分岐点からさらに約 50m先に、熊谷道と分岐する幅約２ｍ、最大高約 2.5mの切通しから、幅約 1.5mの

図 117　三浦峠道 野面乱積みの石垣

図 118　三浦峠道 江戸道分岐点

縦開削型の道が別に設けられている（図 119）。分岐した道は緩やかな下り坂となり、途中で石段が残存している箇所（図 120）や近世陶器の破片の散布もみられた。約 50m西進すると、先述の崩落した道の先に合流することも可能であるが、鋸坂（馬坂）の下り道と同様に、新旧の経路が並行する。さらに約 50m進むと二つの開削型の道は合流し（図 121）、山寄せの道に変わるが、この付近にも石段が残存している箇所がみられる（図 122）。さらに道を約 80m下ると、民間会社の倉庫裏側に出る（図 123）。舗装道を緩やかに下り、古戸川を渡って約 100m西進すると、熊谷道が下りてきた道と合流する。

図 119　三浦峠道 江戸道に通じる切通し

図 120　三浦峠道 開削道の石段（反対から）

図 121　三浦峠道 合流地点

図 122　三浦峠道 山寄せ道の石段（反対から）

図 123　三浦峠道 江戸道下り口

註

（1）『紀伊長島町史』紀伊長島町史編さん委員会、1985 年。
（2）仁井田好古等編『紀伊続風土記』第３輯牟婁、物産、古文書、神社考定、1910 年。
（3）前掲註（1）。
（4）野地義智『三重県紀伊国北牟婁郡地誌』全 復刻版、1973 年。
（5）前掲註（4）。
（6）前掲註（3）。
（7）『熊中奇観』（江戸時代後期、和歌山県立博物館蔵）。
（8）『巡礼通考一名西国名所記単』延宝８（1680）年（内閣文庫 34881 号）。
（9）『西国三十三所道しるへ』元禄３（1690）年（国立国会図書館）。
（10）『紀伊国絵図』（江戸時代、和歌山県立博物館蔵）。
（11）平松令三編『三重県の地名』郷土歴史大事典、日本歴史地名大系 24、1983 年。
（12）前掲註（3）。
（13）前掲註（3）。
（14）「三重県庁文書」県指定有形文化財、三重県蔵。
（15）家崎彰氏にご教示いただいた。
（16）辻武左衛門『西国順礼日記』（本宮町史編さん委員会『本宮町史』近世史料編、1997 年）。
（17）家崎彰氏にご教示いただいた。なお、この峠はこれまで「平方峠」と呼称されることもあったが、「字平方」は比幾海岸南東の地名（図 32）であるため、正しい呼称とは言えない。
（18）現地解説板の説明に基づく。
（19）前掲註（7）（8）。
（20）大日本帝国陸地測量部「長嶋」三重県伊勢国多気郡、度会郡、紀伊国北牟婁郡、1911 年。
（21）前掲註（3）。

(22) 前掲註（14)。
(23) 前掲註（４)。
(24) 前掲註（４)。
(25)『和州吉野郡群山記』御勢久衛門、東海大学出版会 1998 年。
(26) 前掲註（７)。
(27) 前掲註（14)。
(28) 前掲註（４)。
(29) 前掲註（14)。
(30)『道瀬遺跡（第２次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター、2000 年。

４　三浦から相賀

○　三浦

三浦の道　熊野道は熊ヶ谷道と江戸道が合流した後、三浦集落に向かって南西に進む。舗装された直線的な道は、明治時代に整備され、約 150m進むと左側に JR 紀勢本線の三野瀬駅がある。駅の反対側には山沿いに迂回する石段と未舗装の道（図 124）が約 30m残るが、これが江戸時代の熊野道である。途中から舗装された道となり、再び直線的な道に合流すると、住宅の合間に幅約１ｍの江戸時代の道（図 125）がある。さらに約 50m進むと三野瀬郵便局前で三差路となり、熊野道は緩やかに南下するが、右側の道を約 50m北進すると、元禄 10（1697）年の銘がある三浦の庚申（図 127）と海蔵寺（図 128）が位置する。

【貞永山海蔵寺】　島勝浦にある円通山安楽寺の末寺で、『三重県紀伊国北牟婁郡地誌』には「正寶（ママ）二年五月僧的道開基創建ス」とあるが、僧的道は元和（1615～1624）

図 124　三浦の未舗装道

図 125　住宅の間に残る道

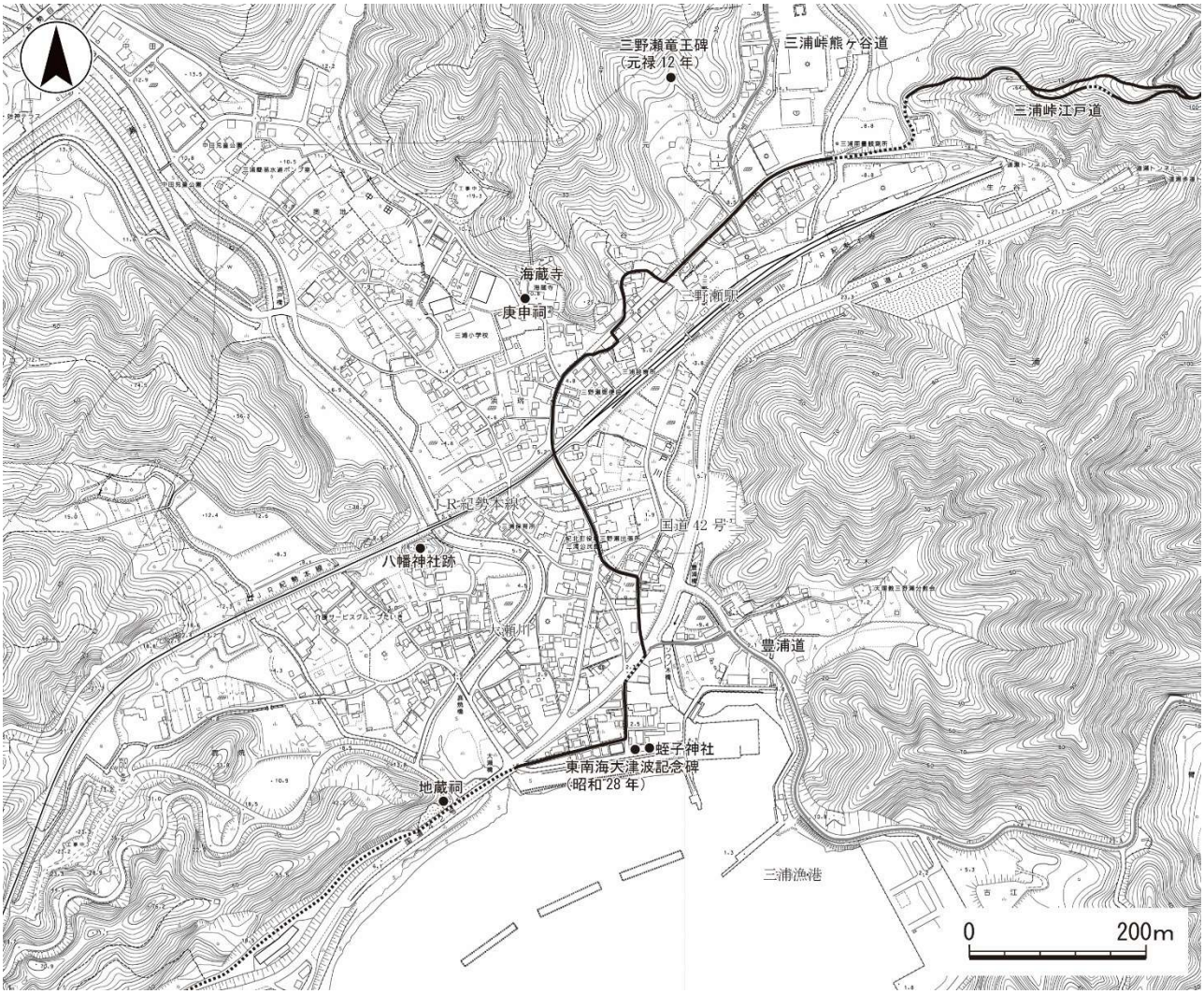


図 126　三浦の道（1/8,000）

年間に安楽寺を中興したとされるため、正保２（1645）年の創建と考えられる[1]。

郵便局を過ぎて約 80m南進すると JR 紀勢本線の三浦踏切を渡り、さらに約 150m南進すると五差路となる。そのまま直進する広い道は明治時代に整備されたもので、近世以前の熊野道は左奥の道である。幅約２ｍの道を道なりに約 150ｍ進むと、国道 42 号に合流し、ここが熊野道と豊浦への道の分岐点となる。熊野道は、南西脇にある海岸線への国道を進み、蛭子神社と昭和 19（1944）年に発生した東南海大地震の被害を記録する三浦津波碑が所在する堤防沿いの道手前を右折し、約 130m西進すると再び国道に合流する。大瀬橋で大瀬川を渡り、国道を約 80m西進すると、右手に高さ約 20mの泥岩の露頭がある。周囲は樹木で覆われるが、露頭前の広場に地蔵祠が２か所あり、天保７（1836）年銘の供養碑と地蔵などが祀られている（図 129）。国道を南西に約 300m進むと、始神峠道への入口にあたる南北幅約 200ｍの太地の谷に至る。

図 127　三浦の庚申祠

図 128　貞永山海蔵寺

図 129　泥岩露頭前の地蔵祠

始神峠道　太地の沿岸部は、国道に隣接して熊野灘臨海公園として整備された始神さくら広場が広がっている。国道を挟んで北側の山には、明治 44（1911）年測図の大日本帝国陸地測量部の地図（図 130）にも記されている明治時代の始神峠道（以下、明治道）が熊野街道として記されるが[2]、荷車を想定した緩傾斜の道が続いている。始神さくら広場の南側に抜け、約 500m太地川沿いを西進すると、宮川第二水力発電所と鉄塔の裏側に始神峠道・江戸道の上り口（図 132）がある。ただし、江戸道の上り口へと至る道の途中までは昭和に新しく整備されたもので、明治 21（1888）年の「紀伊

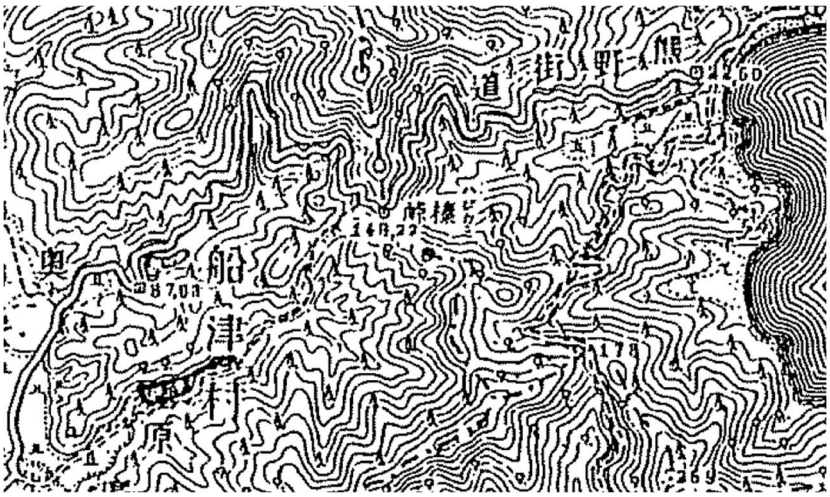


図 130　始神峠道・明治道（「大日本帝国陸地測量部」島勝〔部分〕）

図 131　明治 21 年以前の始神峠道（「紀伊国北牟婁郡三浦全図」〔部分〕）

国北牟婁郡三浦全図」（図 131）を参考にすると、現在の発電所内を進んだと考えられる。くわえて国道に類似する谷の北側の道も示されており、江戸道の本線と考えられるが[3]、現在は失われている。本線は紀北町クリーンセンターを過ぎたあたりで谷の南側に方向を変更したとみられ、その名残の山道が一部で確認できる。本道は峠に向けて傾斜が急になるあたりで合流するが、合流地点から約 500m東にある上り口には、世界遺産登録時の「熊野参詣道／始神峠道」の石碑と解説板がある。杉林の平坦な山道が続き、途中５か所で小川を渡る木橋があり、５つ目の木橋の手前でもう一つの江戸道と合流する。川岸には、現在は橋のない箇所にも石垣がみられ（図 133）、過去には違う位置に橋が架かっていたと推測される。

図 132　始神峠道の上り口

図 133　川岸の橋の痕跡

図 134　平坦型の道と洗い越し

図 135　トンネル沿いの木段

図 136　つづら折れと石段

図 137　石段

図 138　緩やかな山寄せの道

橋を渡ってからの道は、始神峠に向けた明確な上り坂となるが、これまでの道とは変わって自然礫が多く散布し、部分的に石段が整備される箇所もある。最初、緩やかに傾斜を上る平坦型の道が約 80m続き、一定間隔で洗い越しもみられる（図 134）。JR 紀勢本線の三浦トンネルの開削により部分的に道が失われ、トンネル沿いに整備された木段（図 135）で標高約 20m上ると再び本道が出現する。標高約 65m地点からは尾根伝いの山寄せの道となり、標高約 130m地点までを約 200m、つづら折れで一気に上っていく（図 136）。このつづら折れ区間は、始神峠道で唯一、石段が継続的に整備され、泥岩を中心に花崗岩も含まれる（図 137）。石段の周辺は、10 ㎝以下の自然礫が舗装されたように散布している。つづら折れ区間が終わると石段もみられなくなり、散布している自然礫も粒が細かくなる。尾根筋の緩やかな山寄せの道を約 300m進み（図 138）、尾根に到達する。

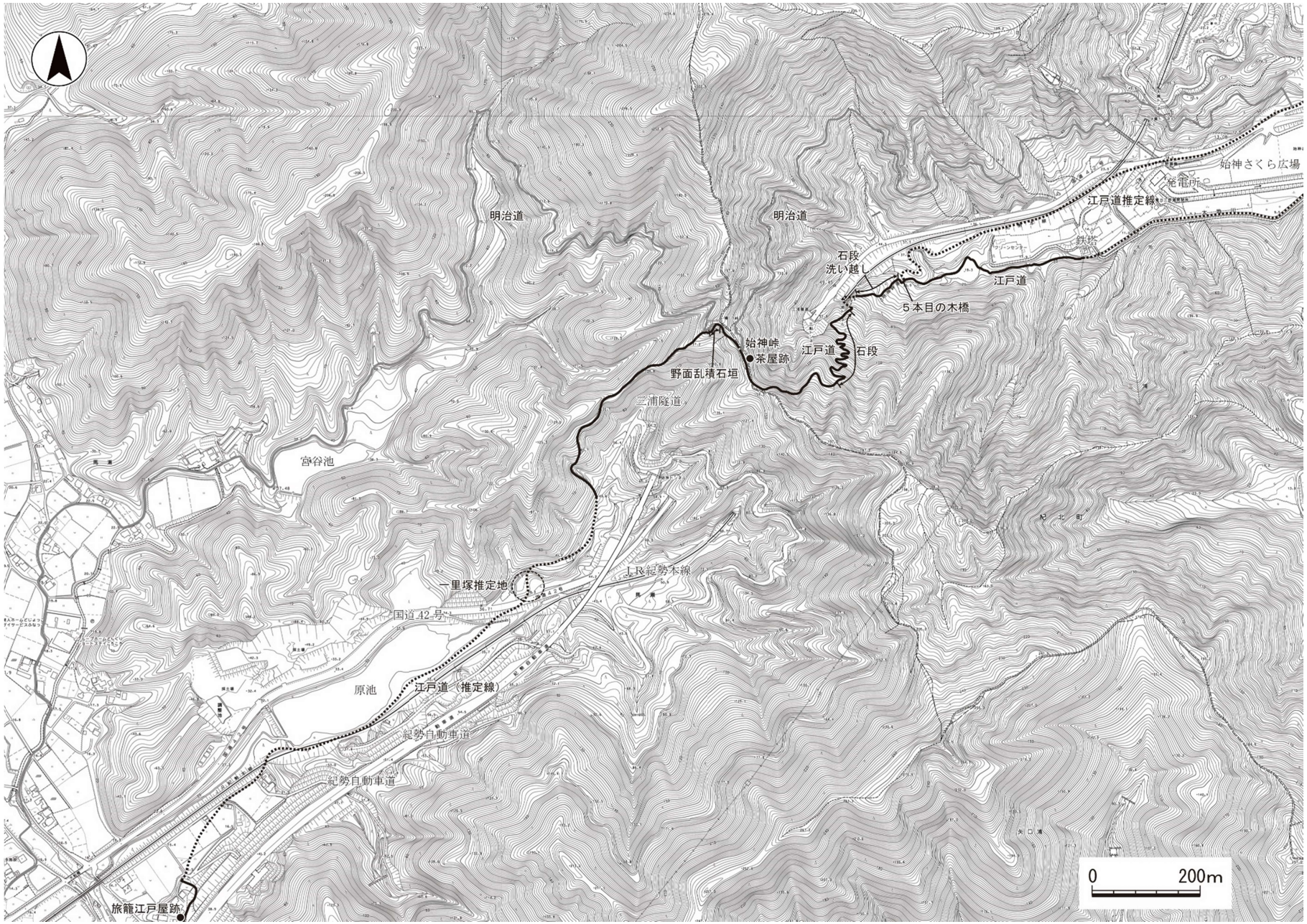


図 139　始神峠道（1/10,000）

標高 147mの峠地点は平坦面となり、茶屋があったとされ（図140)、陶磁器や石臼の破片が表採されている[4]。いつからか、「茶屋跡」と彫られた自然石が置かれている。峠からは熊野灘を見下ろすことができ、寛政８（1796）年の『西遊記神都詣西国順礼』の中で鈴木牧之は、「はじかみ坂は西国礼所一、二の険難なりしにいまだ東雲近き折から、海上の絶景やゝ眼を覚ますが如く（略)」として「大洋に潮の花や朝日の出」などと詠っている[5]。また、天保元（1830）年の『紀伊続風土記』には「三浦に越ゆる峠を椒（ハジカミ）坂といふ（中略）頂上より望めは長島郷の諸村眼底にありて北は紀勢の境の山屏風を列ぬる如く西より東に指出て志州の方に連なれり正東大洋を望めは際涯なくして晴日日の始めて出る頃は洋中に富士峯を視るへし」とあり[6]、当時の峠からは今以上の絶景が望めたと考えられる（図 141)。

図 140　始神峠茶屋跡推定地

図 141　始神峠からの眺望

図 142　始神峠の切通し（反対から）

図 143　始神峠道 江戸道・明治道分岐点

図 144　始神峠道 江戸道下り口

峠の下には明治道の敷設に伴い開削された路面幅３m、高さ６～７mの切通しが位置する（図142)。峠の脇の木段で切通しに下りることができるが、切通しの両側斜面に寸断された江戸道が部分的に残り、江戸道は明治道に取り込まれる。幅約 1.8mの山寄せの道を約 50m北西に進むと、野面乱積みの石垣が現れる。この石垣を境として、石垣の上が明治道、下が江戸道である（図 143)。江戸道は、幅約 1.5mの山寄せの道を南西に進み、高低差 100mを約 500mの距離で下る。大正６（1911）年に整備された三浦隧道から続く砂利道に下りるが（図 144)、道なりに進む

図 145　原池の南側の道　（「紀伊国北牟婁郡三浦全図」〔部分〕）

と国道 42 号と合流し、原池の北側を抜けて馬瀬の集落へと至る。しかし、この経路はいうまでもなく新しい道で、明治 20（1887）年の「紀伊国北牟婁郡馬瀬村全図」では、原池の南側を通る道が示されており[7]、大正時代の砂利道や国道を横切って、原池の南側に回り込む（図 145）。原池周辺は、大正時代の道・国道 42 号・JR 紀勢本線・紀勢自動車道が交錯する場所で、江戸道の痕跡はほぼ失われている。ただし、原池と JR 紀勢本線の間には江戸道と推測できる山道が僅かに残存している。原池を過ぎた熊野道は、字原口で分岐する。熊野道は直進して大船川を渡り馬瀬集落へと進む道と、左に曲がり、字広を経由してから大船川を渡り馬瀬集落へと進む道の二つがある。字広を経由したのは、「江戸屋」と呼ばれる宿場があったためである。

【旅籠江戸屋跡】　江戸道を下った大船川の手前の字広には、江戸出身の人物が旅の途中でこの地に留まり、宝暦（1751～1763）年間に開業したとされる旅籠江戸屋が所在する。紀勢自動車道の工事に際して、明治 27（1894）年建築の建物（図 146）が解体され、建物と道の一部が発掘調査された。旅籠江戸屋の遺構は検出されなかったため、明治時代の建物の礎石が江戸時代にも使用されたと考えられている。海山郷土資料館には、もろぶたと膳（図 147）が江戸屋伝世資料として保管されている。もろぶたの側面には「馬瀬　江戸屋善右衛門」「文化（1806）三年春吉日」の墨書がみられ、膳の裏面には「エトヤ」の焼印がみられる。なお、熊野道の発掘調査では、舗装や石畳などは確認されていないが、幅約２ｍの山寄せの道と石垣を確認している[8]。

図 146　江戸屋跡の建物（解体）と熊野道

図 147　江戸屋のもろぶた・膳など
（海山郷土資料館蔵）

馬瀬の道　江戸屋を出て高台を下ると、矢口浦に抜ける道と、大船川を渡って馬瀬に向かう道に分岐する。熊野道は馬瀬に向かうが、現在は畑となり、江戸時代の道は失われている。しかし、馬瀬の集落に近づくと水田区画と異なる方位の幅約２ｍの舗装された道が、集落に接続しており、これが熊野道と考えられる（図 148）。約 100m北西に進んで JR 紀勢本線の線路下を潜り、さらに約 50m進むと馬瀬集落内の道に合流する。現在は国道で集落と分断されているが、北の山沿いに馬瀬神社、さらに約 200m西に広禅院が位置している（図 149）。

図 148　馬瀬集落に向かう道

【大慈山広禅院】　寛文９（1669）年に長島の仏光寺二世風国大順により開山された曹洞宗寺院で、仏光寺末寺とされている[9]。境内

図 149　大慈山広禅院

図 150　広禅院境内の庚申祠

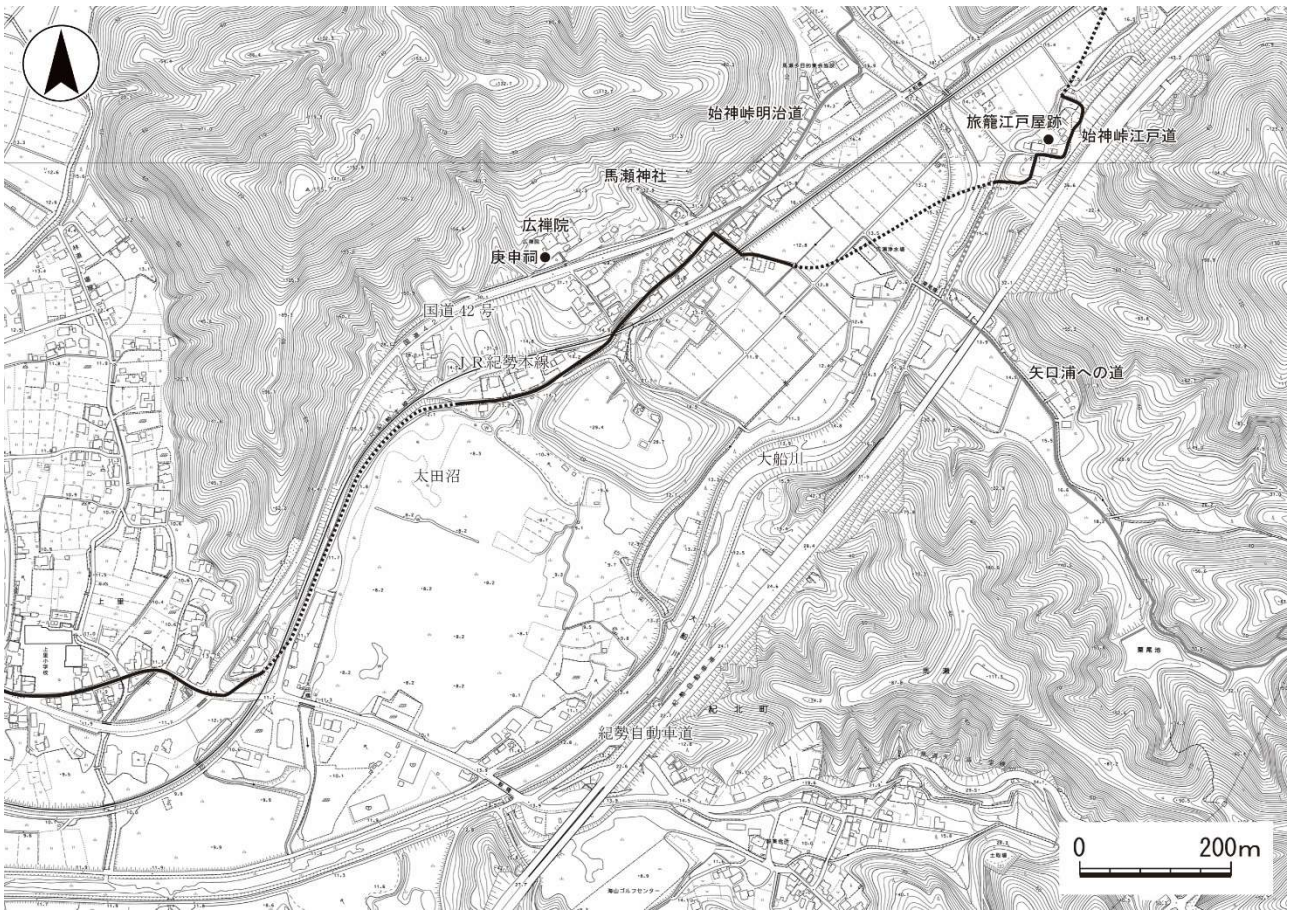


図 151　馬瀬の道（1/10,000）

には、享保 12（1727）年の地蔵菩薩等が含まれる庚申祠のほか、17 世紀代の五輪塔と宝篋印塔がそれぞれ２基みられる（図 150）。

広禅院を過ぎると熊野道は、太田沼を左手に、丘陵に沿って緩やかに南に向きを変える。約 700m進むと県道矢口浦上里線と合流し、上里踏切を渡って上里へと進む。

上里の道　熊野道は国道 42 号をそのまま直進し、緩やかに湾曲しながら現在の上里小学校前を過ぎ、再び国道に合流する。約 350m西進すると大河内川を渡り、上里集落の中心部へと入るが、本来は平助地蔵と呼ばれている地蔵菩薩がある南の旧道側に接続していた（図 152）。幅約３ｍの舗装された道を約 150m進み、国道から分岐した直線的な街道に合流する。熊野道の北側の浅間山は、大河内川と大船川の合流地点を見下ろす位置にあり、浅間祠が所在するが、中世城館の上里城跡も存在した。また、上里城跡から約 800mの大河内川の対岸には、熊野道を挟むようにセキ山城跡もあり（図 153）、「紀伊続風土記」[10] および「三重県紀伊国北牟婁郡地誌」[11] には、城の腰という地名と関所が所在したとされる。さらに約 350m西進すると、山側に上里神社（図 155）と修禅寺が位置する。この周囲の悪水小川内という字に一里塚があったとされるが [12]、国道が通ることもあり、痕跡は残っていない。

図 152　上里集落の道（右に平助地蔵）

図 153　上里城跡・セキ山城跡（大河内川から）

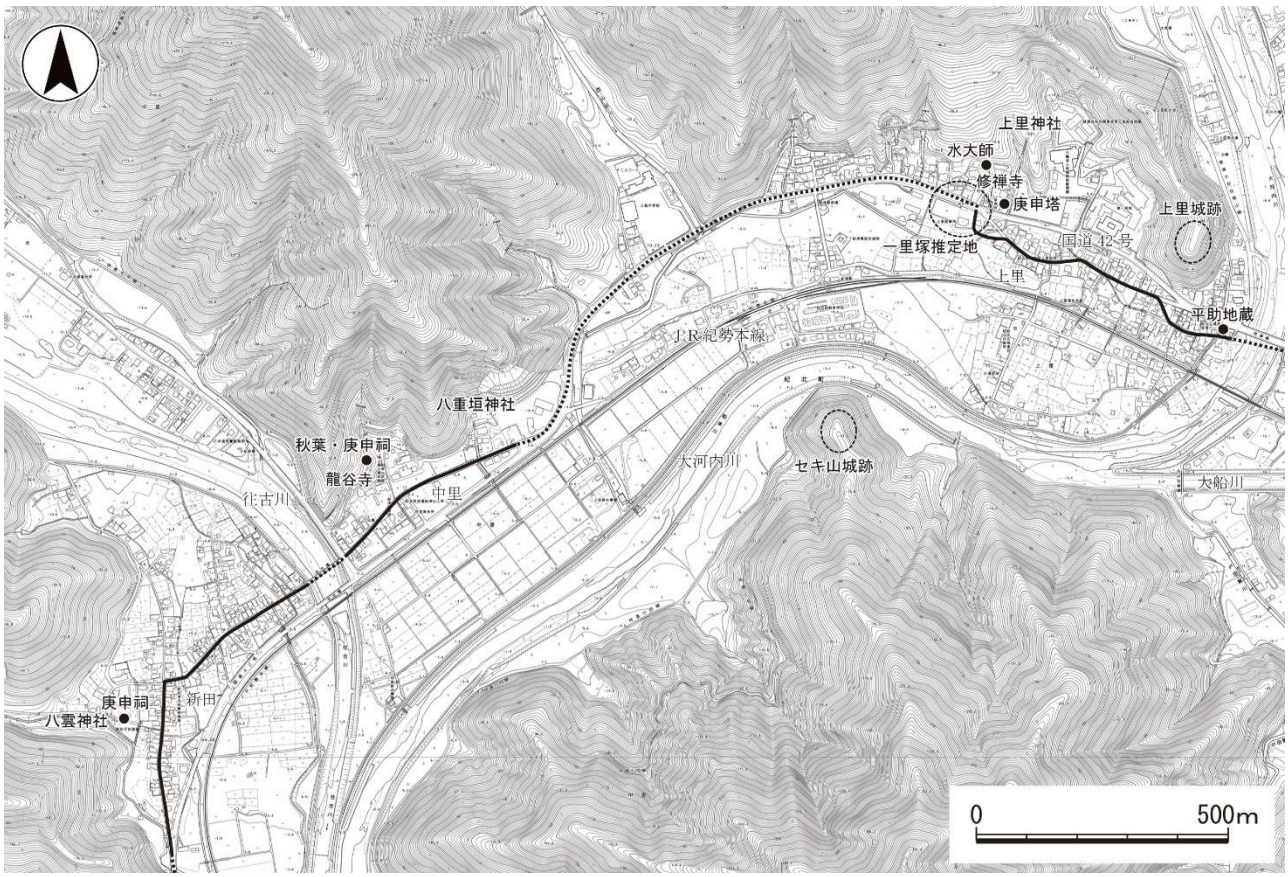


図 154　上里・中里・船津（新田）の道（1/15,000）

【上里城跡・セキ山城跡】　関所について「紀伊続風土記」は、「寛永雑記」の記載を引用している。そこには、源平合戦時に相模国三浦から流された平六兵衛の子孫が、海賊の襲来に際して合戦し、首 70 余りを討ち取ったそのことが朝廷まで聞こえ、褒美として熊野道の通行に際して５文の通行料金を取ることを許された。しかしその後、子孫は文禄元（1592）年の朝鮮の役に出兵し、行方不明となったため、関所も廃止されたとされている[13]。上里城とセキ山城は中世に築かれたもので、城の腰の地名は上里城跡の東麓にあったとされるが[14]、立地や位置関係から、両城が一体となり熊野道を意識して設けられたと考えられる[15]。

図 155　上里神社

図 156　修禅寺の庚申塔・宝篋印塔

【上里神社】　「紀伊続風土記」では、もとは大宝天王社と呼ばれ、馬瀬・河内・上里・中里・船津の五村の産土神であったと記載されている[16]。また「三重県紀伊国北牟婁郡地誌」では、八幡宮も現在は上里神社に合祀されているが、八幡宮は宝永（1704～1711）年間までは一里塚の上にあったとされる[17]。

【十笏山修禅寺】　延宝（1673～1681）年間に長島の仏光寺二世風国大順により開山された曹洞宗寺院で、仏光寺末寺とされている。「三重県紀伊国北牟婁郡地誌」には、薬師堂を安永８（1779）年に 14 代僧が再興したとの記述があり[18]、「熊中奇観」にも「修禅寺曹洞宗薬師堂有」と記載さ

れるため、当時は薬師堂も併設されていたと考えられる[19]。本堂は昭和３（1928）年に全焼し、現本尊である宝冠釈迦如来坐像は、昭和５（1930）年に本堂が再建された際に仏光寺より贈られたとあり、薬師堂やその本尊も焼失したと考えられる。境内には松場氏のものとされる 14 世紀後半の宝篋印塔のほか、宝暦５（1755）年銘をもつ文字庚申塔が安置されている（図 156）。

修禅寺を過ぎると熊野道は国道に取り込まれる。約１㎞西進すると、山と低地の合間を縫うように道が通るが、ここが上里と中里の境界である。現在は、水田などの用水路が道と隣接するが、明治 20（1887）年の「紀伊国北牟婁郡中里村全図」「紀伊国北牟婁郡上里村全図」（図 157）では、大河内川が現在の流路とは別に、北側に蛇行しながら分岐し、中里で再び合流する様子が描かれている。当時の熊野道は丘陵と大河内川の合間を抜けるように続き、上里と中里の村境は現在よりも明確であった。

図 157　明治期における大河内川の流路　（「紀伊国北牟婁郡中里村全図」・「紀伊国北牟婁郡上里村全図」〔部分〕）

中里の道　中里に入ると、熊野道は再び国道から分岐する。舗装された道を約 150m南西に進むと、右手には八重垣神社（図 158）、さらに約 250m進むと現在の海山町郷土資料館と隣接して龍谷寺が所在する（図 159）。龍谷寺を過ぎて往古川を渡り、船津へと至る。

【八重垣神社】　もとは二天八王子社と呼ばれ、明和２（1765）年に中里村の産土神として上里神社から分離したとされる[20]。

【清雲山龍谷寺】　正徳元（1711）年に僧智円によって創建された曹洞宗寺院で、度会郡大紀町の滝原院の末寺である[21]。境内の裏山には祠があり、秋葉・庚申が祀られている。

船津の道　往古川を渡ると船津の新田集落に入る。熊野道は集落内の舗装された道となり、約 350m南西に進むと、新田集会所で三差路となって南へ向きを変える。道の右手には八雲神社（図 161）があり、さらに約 300m南進すると再び国道に合流する。

図 158　八重垣神社

図 159　清雲山龍谷寺

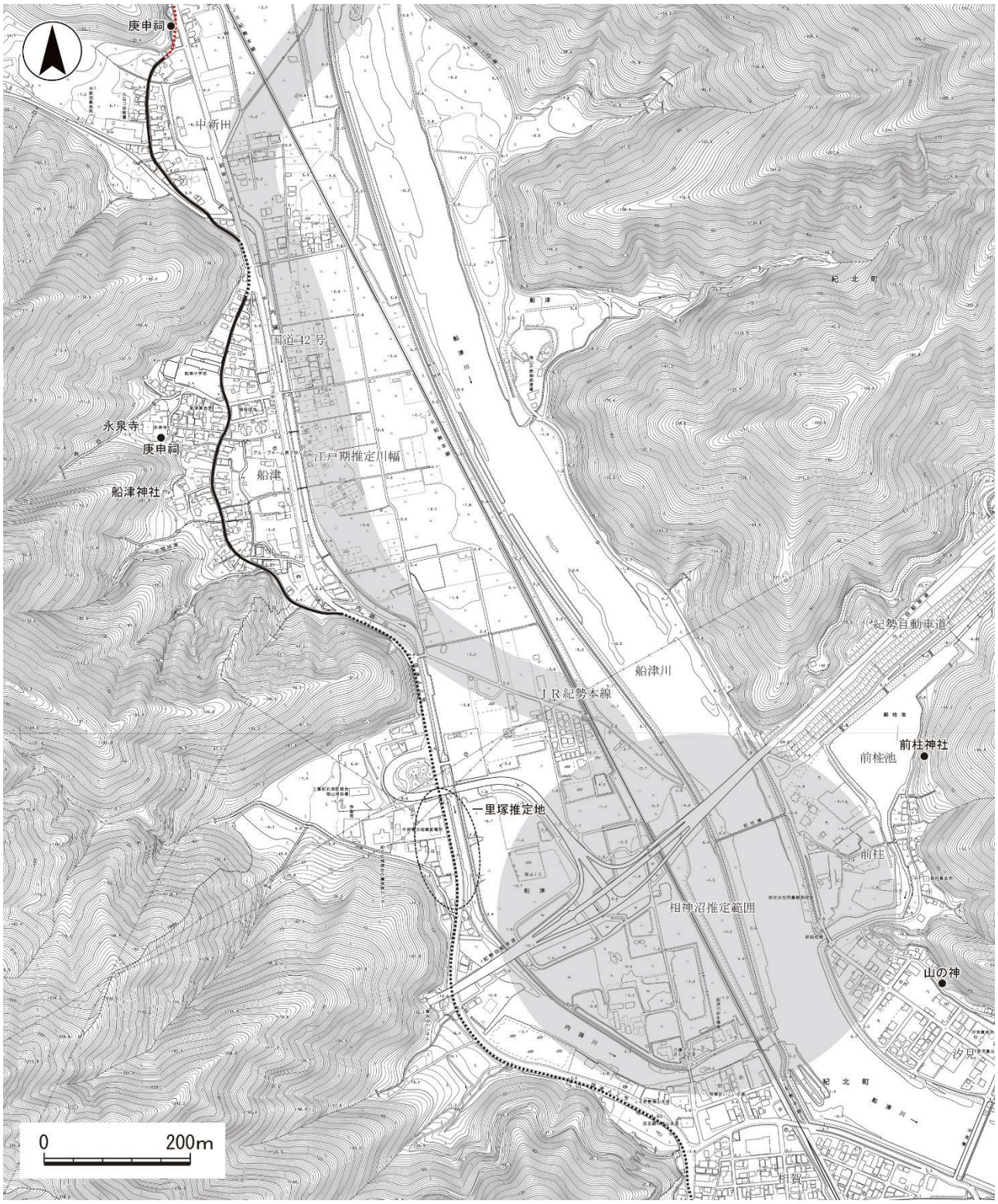


図 160　船津（中新田～船津）の道（1/10,000）

【八雲神社】　小さな社に隣接して享保 14（1729）年銘の文字庚申塔を納めた祠が安置されている。なお、裏山の中腹には浅間社と秋葉社がそれぞれ祀られている。

熊野道は国道に合流して約 200m南進するが、途中のバス停の裏には中新田の庚申祠と燈籠がある（図 162）。中新田の集落に差し掛かると熊野道は国道から山側に分岐し、集落内の道を約 400m南進して道は再び国道に合流する。この地点では国道

図 161　八雲神社

図 162　中新田の庚申祠

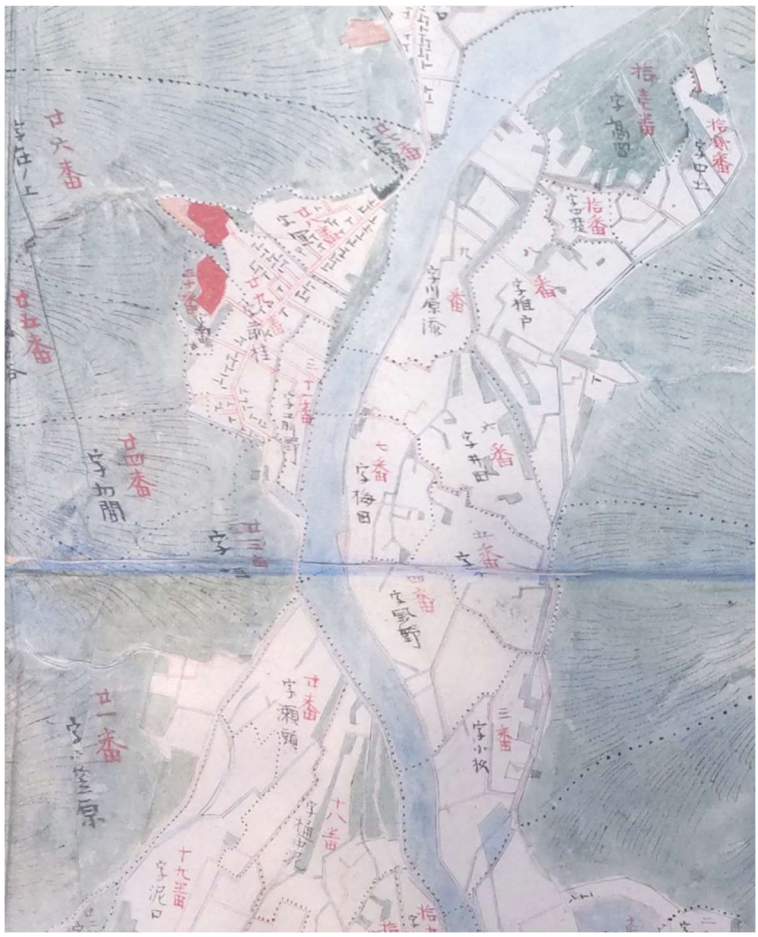


図 163　船津　（「紀伊国北牟婁郡船津村全図」〔部分〕）

に隣接して約 100m、内頭川と船津川の間に低地が広がっているが、先述した中里の大河内川と同様、明治 20（1887）年「紀伊国北牟婁郡船津村全図」[22] では、船津川の流路が現在よりも大きく西側に蛇行している（図 163）。本来の熊野道は、船津川と山の隙間を縫うように南進し、船津の集落へと至る。再び国道から山沿いの道に分岐し、約 300m南進すると、永泉寺（図 164）と船津神社が右手の山側に位置する。

【祥嶽山永泉寺】　万治３（1660）年に僧英俊によって創建された曹洞宗寺院で、福井県永平寺の末派である。もともとは舟津山點釣寺という名であったものを、万治年間に改めたといわれている[23]。境内には青面金剛立像と享保 16（1731）年の銘のある文字庚申塔のほか、多数の石仏などが安置されている。

図 164　祥嶽山永泉寺

さらに約 350m南東へ進むと再び国道と合流し、そのまま相賀までの約 1.2 ㎞は国道を南進する。途中の字小笠原には一里塚があったとされるが[24]、正確な位置は明らかではない。また、船津と相賀の境には相神沼と呼ばれた入り江が広がっていた。内頭川と前柱池がその痕跡である。現在は大部分が埋め立てられ、畑などになっているが、熊野道はこの相神沼を迂回するように、現在の国道と同様に山裾を伝って相賀集落へと進む。

註

（１）野地義智『三重県紀伊国北牟婁郡地誌』全 復刻版、1973 年。
（２）大日本帝国陸地測量部「嶋勝」三重県紀伊国北牟婁郡、1911 年。
（３）「三重県庁文書」県指定有形文化財、三重県蔵。
（４）家崎彰氏にご教示いただいた。
（５）小倉肇「鈴木牧之と『西遊記神都詣西国順礼』」『熊野道中記 いにしえの旅人たちの記録』みえ熊野の歴史と文化シリーズ①、みえ熊野学研究会編、2001 年。
（６）仁井田好古等編『紀伊続風土記』第３輯牟婁、物産、古文書、神社考定、1910年。
（７）前掲註（３）。
（８）三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道紀勢線（尾鷲北～紀伊長島）建設事業に伴う旅籠江戸屋跡・近世熊野街道跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告307、2009年。

（９）前掲註（１）。
(10) 前掲註（６）。
(11) 前掲註（１）。
(12) 前掲註（１）。
(13) 前掲註（６）。
(14) 白石博則「熊野参詣道伊勢路周辺の関所と中世城館跡－①伝上里関と城館跡」『熊野歴史研究』第 25 号、熊野歴史研究会、2023 年。
(15) 伊藤裕偉「熊野参詣道伊勢路と中世城館」『Mie history～特集 三重の中世２～』vol.18、三重歴史文化研究会、2006 年。
(16) 前掲註（６）。
(17) 前掲註（１）。
(18) 前掲註（１）。
(19) 『熊中奇観』（江戸時代後期、和歌山県立博物館蔵）。
(20) 前掲註（１）。
(21) 前掲註（１）。
(22) 前掲註（３）。
(23) 前掲註（１）。

５　相賀から尾鷲

○　相賀

相賀の道　現在の紀北町海山区相賀は、江戸時代には古ノ本村と呼ばれていた。中世以前は伊勢神宮領の木本御厨と呼ばれたが、同じ表記の村が木本郷（現熊野市）にあったため、慶長６（1601）年の検地帳[1]では「粉本村」と記された。宝暦８（1758）年の大火で全村焼失し、「火の粉」を嫌って、明和元（1764）年に古ノ本村となる。明治２（1869）年の大火で禰宜町・横町・中町が焼失。明治 10（1877）年に村名を相賀村とした。昭和９（1934)年に読みを現在と同じ「あいが」とした[2]。

図 165　蛤石

熊野道は船津川の支流、内頭川の右岸山際にあったが、現在は国道 42 号により当時の様子は明らかではない。相賀北交差点から約 150m南下すると三差路があり、向かって左側が近世の熊野道である。そこから約 150m南下すると相賀神社（江戸時代は二天八王子社と称される）に至る[3]。相賀神社からさらに約 300m南下すると、寛文３（1663）年創建の真興寺に至る。真興寺の南には銚子川があり、巡礼者は渡河することになる。

【蛤石】無量寿山真興寺の境内にある石造物。高さ 33 ㎝、幅 115 ㎝、正面「順れい　蛤石／手引観音／尾州／名古屋／船入町　南無阿弥陀仏／杉屋／佐太郎」、裏面「天保十一（1840）／＜庚／子＞／五月／釋了義／菩提」とある。中央には円形の窪みに観音菩薩坐像を半肉彫りする。尾張国名古屋船入町の杉屋佐太郎が番頭の了義の菩提を弔うために造立した。『西国三十三所名所図会』の「粉本」には「(略）川岸の堤に蛤蜊石の観音あり、近年尾州の人建る」とある。もとは銚子川の川岸にあったものを移設したと考えられる。

銚子川の渡河　相賀から馬越峠へと向かうには銚子川を渡河する必要がある。銚子川の渡河については伊藤文彦が渡河地点や変遷について検討をしているので、それを参考とする[4]。

近世の道中案内にある渡河の記載は表２のとおりである。橋に関する記述はなく、平常時は徒歩による渡河であったと考えられる。なお、江戸時代後期に熊野街道の景観について記載した『熊中奇観』では、板を２枚渡しただけの橋が描かれているが、挿し絵と文章の内容が一致しない箇所があり、その内容を全面的に信ずるには値しない。渡河の回数は、『西国三十三所道しるへ』では「川二つあり」、『順礼

表２　銚子川の渡河に関する道中案内の記録

西国三十三所道しるへ	元禄3年	1690年	此出口に川二つあり次の川あしき川なり水出ニハ此町出口より右のかたへびんの山と云所へ廻るべし原びんの村と云所ニ渡し舟ありて一人三匁つつにて渡す
順礼案内記	享保13年	1728年	間に川三ツ有右へ少まハれハ一せ渡るあしき川なり大水にハ舟わたし
西国巡礼細見記	安永５年	1775年	川三つあり、大水には少し川上ひんの村に舟わたし有舟賃三文
順礼道中指南車	天明２年	1782年	町の出口に川あり大水の時ニ此所にてわたれバ三カ所にてわたるゆへ少し川上へ行びんの村といふ所に舟渡しあり
西国巡礼道中細見増補	文化３年	1806年	町の出口に川有大水にはわたり瀬多し少シ川上へ登りびんの村へゆけハ船あり
新増補細見指南車	文政12年	1829年	香本出端ニ川あり大水にハ右へ廻り川上にびんの村に船わたし有
天保新増西国順礼道中	天保11年	1840年	木ノ本出端に川有高水ニハ右廻り川上ミびんの村に船わたし有

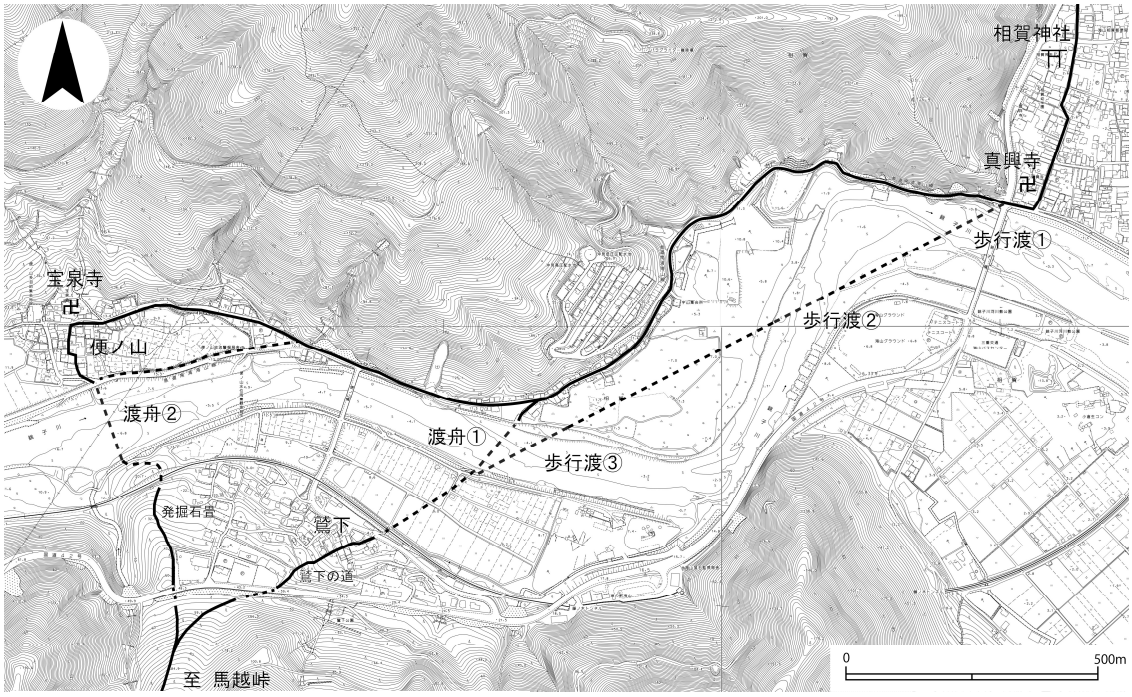


図 166　銚子川の渡河位置（1/15,000）

案内記』『西国巡礼細見記』では「川三つ」、『順礼道中指南車』では「三ヶ所にてわたる」と、２～３か所の渡河地点があったとされる。「紀伊国北牟婁郡便ノ山村全図」（図 167）には銚子川の渡河地点が描かれ、近世の渡河地点であった可能性が高い。以上から、一度目の渡河は国道 42 号の銚子橋付近（図 166 歩行渡①）、二度目の渡河は海山グラウンド前の河原から宇山集落前の河原（図 166 歩行渡②）、三度目の渡河は宇山集落前の河原から鷲下集落前の河原（図 166 歩行渡③）と想定する。

次に渡舟について検討する。前述の道中案内では、増水時（水出、大水、高水）は「びんの村」または「原びんの村」に舟渡があることが記されている。「びんの村」「原びんの村」は現在の便ノ山集落に相当するとみられ、銚子川左岸を上流に進み、舟で渡河したと考えられる。（図 166 渡舟②）なお、便ノ山集落には、宝泉寺という寺院があるが、巡礼者が逗留したかは定かではない。また、図 166 徒歩渡③とほとんど同じ場所で渡舟が行われていたとの伝承もあり、この地点（図 166 渡舟①）も舟で渡った可能性を指摘しておく。

銚子川の渡河は道中案内記以外の資料でも確認できる。『西国三十三所名所図会』には「便山川」とあり、「古本村の出端にあり平日ハ歩行」と記される。また、十返舎一九の『方言修行金草鞋』第九編には「香の本よき町なり、出口に川あり、大水の時はこの川三ヶ所にて渡る。川上のびんの村という処に舟渡しあり、（中略）びんの渡しにて、厚びんの渡しなれとて天窓（あたま）から銭をおしがるつらの河舟」とある。

鷲下の道　「紀伊国北牟婁郡便ノ山村全図」（図 167）では、銚子川を渡河した後、馬越峠方面へ南西に進む道が記されている。

図 167　鷲下の道（『紀伊国北牟婁郡便ノ山村全図』）

現在、この道の多くは圃場（ほじょう）整備により痕跡が

失われているが、JR 紀勢本線の線路を越えた先に線形をとどめるコンクリート舗装の道が残されている。コンクリート舗装の区間は約 130mの上り坂となっており、一部コンクリートがはがれた箇所には幅 1.2mの石畳が確認される（図 168）。現在、世界遺産となっている馬越峠道の石畳は、この辺りまで続いていたものと考えられる。この道は国道 42 号により分断され、馬越峠へ至る道は迂回路が設けられている。

なお、『北牟婁郡地誌』におけるワシゲ道（里道第二等）は北西から熊野街道に接続する道[4]であり、本稿で述べる熊野街道の鷲下の道とは別である。

『熊中奇観』では、徒歩で川を３回渡るルートを「但此路ハ本道にあらず順礼の旅人多く此路を通るといへ共山際の石径（いしみち）にて甚難所也輿馬通らず」と評しており、便ノ山へと向かうルートが本道であり、そちらへ向かうように勧めている。鷲下の道は山際の道ではなく、難所でもないため、『熊中奇観』の示す道が何を指すのか不明だが、未発見のルートが存在する可能性は想定しておく必要がある。

馬越峠道（発掘石畳）　前述のとおり、大水の際は相賀から便ノ山集落へ進み、そこから舟で銚子川を渡河し（図 166 渡舟②）、その後、馬越峠道の尾根筋へと進む道があった。JR 紀勢本線の北側は近年の開発で地形の改変が進み、以前の状態は不明だが、線路の南側には幅約 1.8mの石畳が残っている（図 169）。この石畳道は平成 16（2004）年に馬越峠道が世界遺産に登録された後に地元有志の手で新たに発見された道であり、「発掘石畳」と呼称されている。線路の南側から創価学会尾鷲会館の西側を通り国道 42 号までの約 180mに道とその痕跡が確認できる。

石畳道は国道 42 号により分断され、国道の南側から史跡指定範囲までの約 80mの区間には明確な石畳は確認できないが、石畳の部材と考えられる石材が点在している。

この道と鷲下の道は同時期に併存し、両者の差異は銚子川の渡河方法の違いに求められるだろう。

図 168　鷲下の道の石畳

図 169　馬越峠道（発掘石畳）

馬越峠道　馬越峠道は紀北町と尾鷲市の間に位置する峠道で、平成 14（2002）年に国史跡指定を受けている。史跡指定範囲は、延長 2.5 ㎞、峠の標高は 332m。現在、鷲下公園の西側より石畳の道があるが、これは近年に国交省が整備したものであり、近世のものではない。

『西国三十三所名所図会』には「間越坂」と見え、「古本村より坂の麓まで凡半里ばかり峠の上下一里坂道すべて敷石にて頗る嶮しく難所なり峠に地蔵堂ありて前に茶屋一軒あり」と、巡礼者にとって難所であることが知られていた。

史跡区間の始点から約 210mはとぎれることなく石畳が敷設され、幅も約 2.7mと広く、馬越峠道の特徴的な景観を形成している(図 170)。始点から約 400m進むと夜泣き地蔵に至る。石積みの祠に赤色の前かけを付けた自然石が祀られている(図 171)。明治時代までは石製の地蔵尊が祀られていたと伝わる。

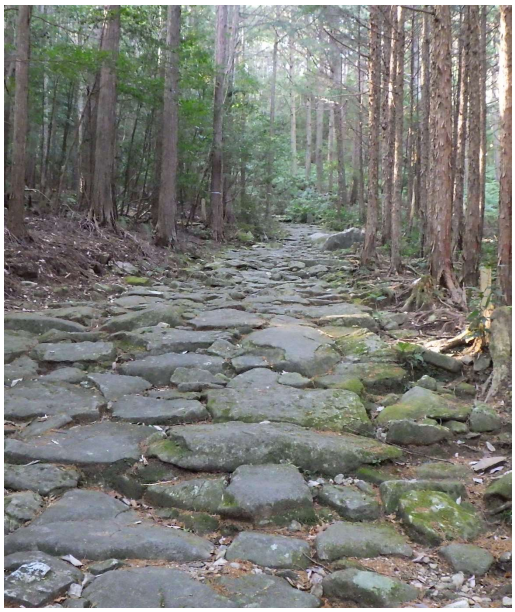


図 170　馬越峠道の石畳

図 171　夜泣き地蔵

夜泣き地蔵から南側の道は中央が窪んで断面が凹字状を呈する。土道の場合、人が歩き、水路となることで中央部の土が流されて断面が凹状となるが、この地点ももとは土道であって、路面の流出を防ぐために石畳が敷設された可能性がある。この辺りでは谷筋を三本越えることになる。谷の一つには大きな石材を用いた石橋が架けられている。

谷を越えると道はN字状に二度折れ曲がり、一里塚に至る。馬越峠の一里塚には、他の東紀州地域の一里塚と同様、一方に山桜、もう一方に松が植えられていたとされるが、現在は草木にうずもれている。

標高 240m付近には、表面に「遠州深見村／いしや」と刻まれた石材がある。塚本明は、石畳敷設時に石工が刻んだものではなく、旅人の悪戯と評価している[(6)]。ほかに、「×」「大」と刻まれた石畳も確認されている[(7)]。

一里塚から約 130m進み、標高 270m地点で林道と交わる。林道との交点から約 160m進むと、大きくＳ字状に二度曲がる。このあたりで石畳はなくなり、土道となる。少し上ると小さな尾根に切通しがあり、それを越えると眼前が開けて峠に至る。

峠の道の東側には、石積みにより一段高くなった平坦面があり、岩船地蔵堂が存在した(図 174･175)。石積みは高さ 1.4m、中央に幅 2.2m、７段の石階がある。石積み上の平坦面は約８m四方で、地蔵堂の礎石と考えられる石が残る。礎石は心々間距離が長辺 4.5m、短辺 3.6mで、『西国三十三所名所図会』(図 173)には、寄棟造の堂が描かれている。絵図では、棟のみ瓦葺きで大部分は檜皮葺きのように見えるが、平坦面には丸瓦や平瓦が散布しており、時代は不明ながら本瓦葺きの建物があったと考えられる。その道を挟んで向かいの平坦面には茶店があったとされ、『西国三十三所名所図会』には切妻造平入の板葺きの建物が描かれる。現在、この場所には東屋(あずまや)が建てられている。

また、岩船地蔵堂があった平坦面の南端には可涼園桃乙(かりょうえんとういつ)の句碑が建つ。

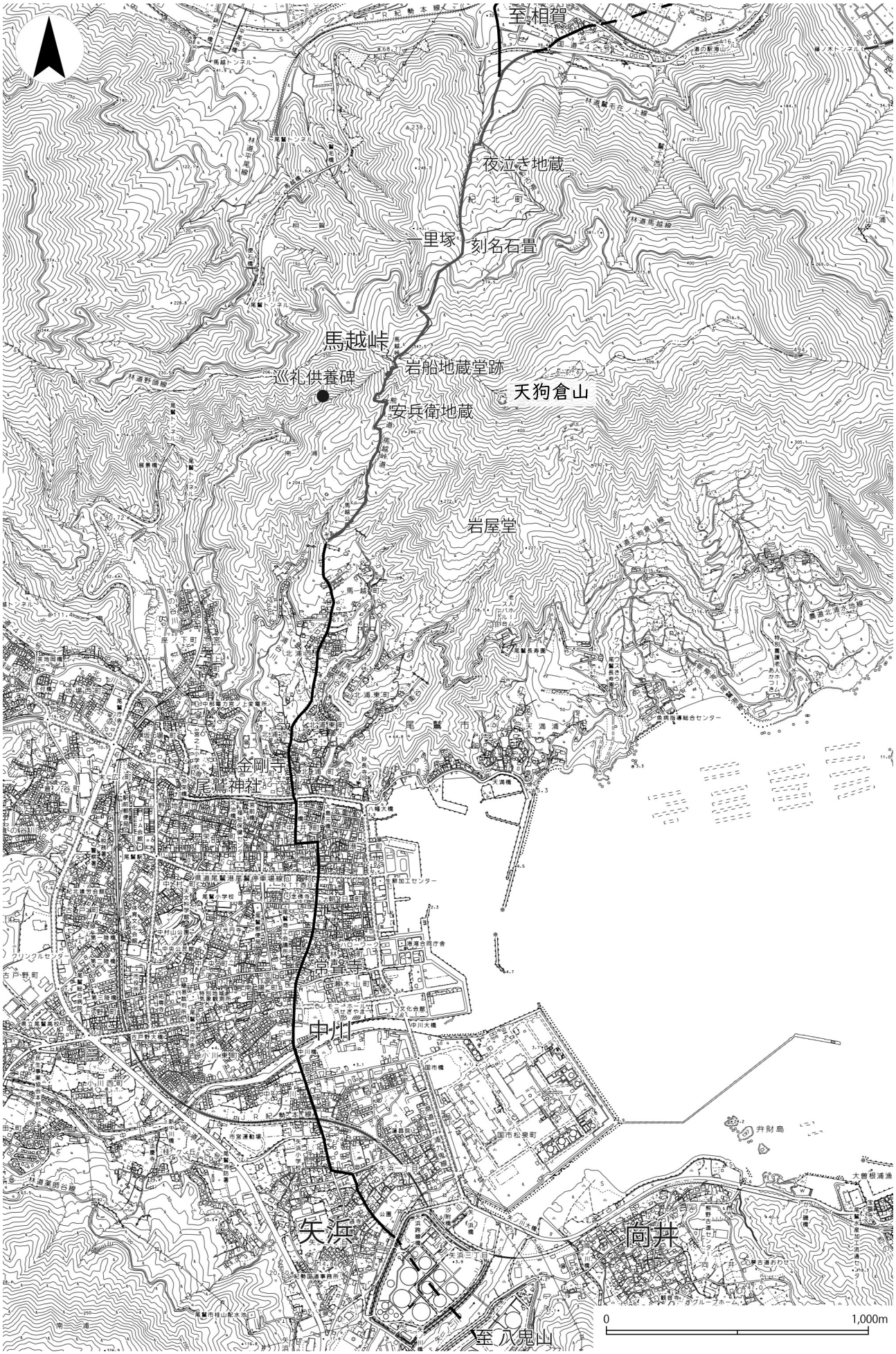


図 172　馬越峠道・尾鷲の道（1 /20,000）

【可涼園桃乙句碑】可涼園桃乙は近江国の俳人で、西国巡礼の途上、尾鷲に約１か月逗留した。馬越峠には、桃乙が夜桜見物の際に詠んだとされる句碑が建立されている。高さ195 cm、幅 82 cm、正面「夜は花の上に音あり/山の水/桃乙」、右面「嘉永(1854)七寅春」、左面「可涼園社中建」とある。昭和 50（1975）年に尾鷲市指定有形文化財（建造物）となった。なお、桃乙が書いた道中日記『烏日記』には「馬越坂にて、くつはむし道に這出よ馬古世坂」という句が見られる。

【岩船地蔵】岩船地蔵は享保４（1719）年に下野国岩船山高勝寺に発し、北関東を中心に流行した船形の台座を持つ地蔵菩薩である。享保年間に角力取りが地蔵を担いで馬越峠にやってきて、茶屋を営んでいた世古平兵衛家に婿養子となったとの伝承がある。海難防止の利益があるとされ、尾鷲の船乗りの信仰を集めた。

地蔵菩薩立像（図 176）は、像高 48 cm、船高 16 cm、船幅 72 cm。丸彫りで、右手は錫杖を通す孔が貫通しており、左手には宝珠をかざす。舟左舷には、「享保八＜癸／卯＞二月廿四日／施主＜茶屋／平兵衛＞」の銘を刻む。台座は別石だが、もとは岩船地蔵の台座であったと伝わる。正面に６名の法名と「無縁法界」の銘を刻む[7]。

岩船地蔵は、馬越峠から降ろされた後、尾鷲市天満浦の世古家に祀られていたが[8]、現在は尾鷲市南浦の老人ホーム尾鷲長寿園の敷内にある地蔵堂に安置されている。昭和 49（1974）年に尾鷲市指定有形民俗文化財となった。この地蔵堂には、ほかに地蔵菩薩立像１躯が安置されており、かつては岩船地蔵と同じく馬越峠に祀られていたと伝わる。

岩船地蔵堂と茶屋の跡地については、『西国三十三所名所図会』に岩船地蔵堂を拝む人物が描かれている。巡礼者が必ず訪れる礼拝施設として機能し、対面の茶屋で休息をとったことから、参詣道とは不可分の価値を有すると考えられる。

図 173　間越嶺岩船地蔵堂（『西国三十三所名所図会』）

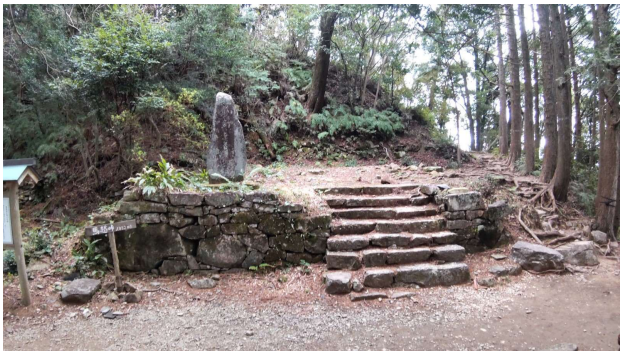


図 174　岩船地蔵堂跡

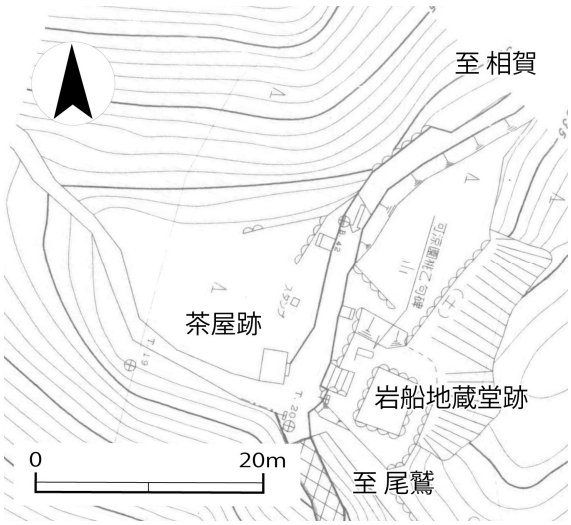


図 175　岩船地蔵堂・茶屋跡平面図（1/600）

この平坦面のすぐ南に天狗倉山（天狗岩）へ通じる道が分岐するが、詳細は次節で述べる。

馬越峠から尾鷲市街への道は峠からまっすぐ南へと下るが、道から逸れた南西方向、丑ノ谷と呼ばれる場所に巡礼供養碑がある（図 177）。高さ 48cm、幅 27cm で下部は欠損している。正面「西国順禮□」、右面「寛延（1750）三庚午」、（左面）「剥悉上人／清山浄定代□／一□妙蓮伸□／□□□□□／正□貞□」と陰刻される。この供養碑があることから、丑ノ谷へと下っていく経路があった可能性が考えられるが、文献などの記載もなく詳細は明らかではない。

峠から尾鷲へと下る道は石畳が敷設されているが、峠の北側に比較してやや雑然とした感がある。幅は約 1.5m で、何度か折り返しながら下っていくと街道東側に沢があり、そこに安兵衛地蔵が祀られている。

【安兵衛地蔵】煉瓦造りの祠に収められた高さ 53 cm、幅 19 cmの地蔵（図 178）。台座正面に「天保（1835）／六年／未／二月」と刻む。祠を改修した畦地安兵衛にちなみ、安兵衛地蔵と呼ばれる。ほかにも桜地蔵、水呑み地蔵の名でも呼ばれる。

図 176　岩船地蔵

図 177　馬越峠の巡礼供養碑

図 178　安兵衛地蔵

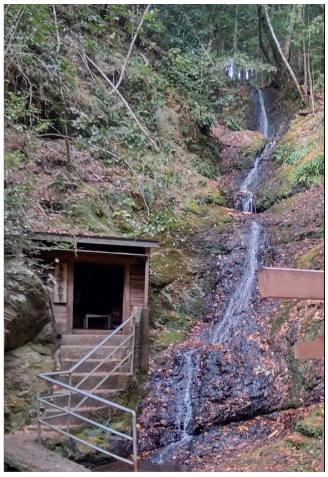


図 179　馬越不動滝と祠

馬越峠道の石畳南端が史跡範囲の終点となり、公園が整備されている。公園西側には、馬越不動滝があり、岩壁をくり抜いて造った祠に不動明王立像と役行者倚像が祀られている（図 179）。

そこから南に約 500m、舗装された道を下って行くと、傍らに近代に活躍した詩人、野口雨情（うじょう）の歌碑「鰤（かます）は港に　杉檜は山に　紀伊の尾鷲はよいところ」がある。馬越墓地の中を下った南端に津波供養碑がある。宝永４（1707）年の津波により尾鷲は大きな被害を受け、その犠牲者の 7 回忌である正徳３（1713）年に建立された。また、街道の脇には石造地蔵菩薩立像が祀られている。高さ 55 cm、幅 29 cm、像右に「享保（1726）十一□」、像左に「□月廿四日」と刻まれ、道中の安全を祈願したと思われる。これを過ぎると街道は北浦町に入り、金剛寺の東に至る。

註

（1）徳川林政史研究所の所蔵する検地帳に記載がある。
（2）伊藤良「北牟婁郡」『三重県の地名』日本歴史地名体系第 24 巻、911 - 922 頁、平凡社、1983 年。
（3）仁井田好古『紀伊続風土記』第 3 輯、歴史図書社、1970 年。
（4）伊藤文彦「文化遺産としての「巡礼路」の保存と継承の研究～熊野参詣道伊勢路を事例に～」博士論文、2019 年。
（5）野地義智『三重県紀伊国北牟婁郡地誌』1889 年。
（6）塚本明「Ⅲ　石造物のかたちと意識　5　交通と石造物」『三重県石造物調査報告Ⅰ～東紀州地域～』三重県教育委員会、2009 年。
（7）三重県・三重県教育委員会『熊野古道と石段・石畳』2007 年。
（8）田崎通雅・伊藤裕偉「Ⅴ個別事例報告　29 馬越の岩船地蔵」『三重県石造物調査報告Ⅰ～東紀州地域～』三重県教育委員会、73 頁、2009 年。

６　岩屋堂と岩屋堂道

○　岩屋堂道

西国巡礼と岩屋堂道　馬越峠道が通る天狗倉山の南斜面中腹に、岩屋堂と呼ばれるところがある。岩屋堂へと通じる道は、「岩屋道」や「岩屋堂道」と呼ばれている。

伊勢方面から熊野や西国三十三所巡礼[(1)]にむかう旅人は、熊野道の沿線にある観音霊場や名所へも立ち寄りつつ、旅を続けていた。岩屋堂もそのひとつである。『西国三十三所道しるへ』（関係史料１、明和８〔1771〕年刊）や『天保新増西国順礼道中細見大全』（関係史料２、天保 10〔1839〕年刊）には、岩屋堂に関する情報が記されており、西国巡礼道中の名所として周知されていた。道中日記の記載状況から、旅人の 10 人に１人程度は岩屋堂を訪れているようである[(2)]。

さて、参詣者が岩屋堂へと向かう道には２つある。ひとつは、馬越峠から天狗倉山の山頂付近（稜線部）を経て向かう道、もうひとつは、馬越峠から熊野道の本線[(3)]を天狗倉山の中腹まで道なりに進み、そこから岩屋堂へと向かう道である。道中日記は、前者の道を利用した記載の方が多い。また、この道は雨天時には歩きにくいと記した道中日記もある（関係史料２）。後者には道標（後述）がある。

図 180　岩屋堂道（馬越峠～天狗倉山）(1)

馬越峠から天狗倉山へ　まずは馬越峠から天狗倉山の山頂付近を経て岩屋堂に向かう道を辿ろう。峠から南へ下る熊野道の本線の左手、峠頂部にある地蔵堂の南に、東方の天狗倉山山頂方面へと向かう道がある。この道は、最初の100mほどが山寄せ道（図 180）で、その後、尾根上をたどる道に変わる。道幅は 80～120 ㎝程度で、道路敷は基本的に土道だが、勾配がきつくなる場所には石段が設けられている。（図 182）。石段は簡単な造作であり、熊野道の本線である馬越峠道にある緻密な石敷きとは異なる。

表３　道中記に記載された岩屋堂（塚本明編『道中記に描かれた馬越峠と尾鷲』2006 年から作成）

番号	性格	年号	西暦	岩屋堂の記載	聖観音（中世）	三十三観音石仏	備考（書名など）	ページ
1	案内記	元禄3	1690	岩屋・天狗のいわや	石仏（此岩屋大師の作）	―	「西国三十三所道しるへ」	153
2	案内記	元禄3	1690	岩屋・天狗の岩や	石仏（大師の作といふ）	―	「順礼道しるへ」	158
3	案内記	享保7.1	1722	岩や・天狗の岩や	石仏（大師の作といふ）	―	「西国順礼」	154
4	日記	享保8.2	1723	岩窟	観音	―	史料時期は享保２～８年とされているため、年号は最新の享保８年とした	50
5	日記	宝暦3.1?	1753	岩屋	聖観音弘法御作	―		51
6	日記	天明6.3	1786	大岩	観音	三十三観音有	山中（天狗岩か）に「弘法大師護摩御たき被成候所あり」と記載	10
7	案内記	寛政3	1791	岩屋・天狗の岩屋	石仏（大師の作とも）	―	「西国順礼細見記」	161
8	日記	文政2.2	1819				岩屋堂に続くと見られる「岩山わる道」の記載のみ	72
9	日記	文政7.1	1824	岩屋	弘法大師岩屋の観音	―		76
10	案内記	文政7	1824	天狗の岩窟	石仏（大師の作と云）	―	「西国順礼道中細見大全」	164
11	日記	文政13.2	1830	岩屋	観音	―		23
12	日記	天保15.2	1844	岩屋・天狗之岩屋	石仏（大師之作とも）	―	道中案内記写しか	90
13	日記	弘化5.2	1848	岩や・天狗の岩屋	石仏（大師の作と云）	―	道中案内記写しか	95
14	日記	文久2.3	1862				天狗岩に行者堂あり	149
15	日記			岩屋・天狗の岩屋	石仏（大師の作とゆふ）	―	道中案内記写しか	120
16	日記			大石			難読	123
17	案内記			いわや	くわんおん	―	「新版増補西国道中記」	170

1 「岩屋道」道標

図 181　岩屋堂道（1 /10,000）

尾根伝いの道を標高 480m付近まで登ると天狗岩が見えてくる。

天狗岩　天狗倉山の山頂は２つあり、西側のやや低いところが江戸時代の道中案内記で「天狗岩」と記載された場所である。ここは標高約 519mで、馬越峠（標高約 332m）からおよそ 180m登ったことになる。

天狗岩は、幅約 40m、高さ 10mを超える、タマネギ状風化を示す巨大な熊野酸性火成岩類（これまで「花崗斑岩」と呼ばれていたが、近年の地学研究では「流紋岩」に分類される[(4)]）の岩塊である（図 183）。現在は高く伸びた植林ヒノキで目立たないが、草木がなかった頃には、この岩を見上げると恐怖さえ覚たであろう。

天狗岩の付近には、石造不動明王立像、「高倉下大神」などと刻んだ昭和前期の石造物や木造役行者像を祀った祠がある。江戸時代には弘法大師がここで護摩焚きをしたという伝承もあり[(5)]、修験の影響が見て取れる。天狗岩の上に登ると、尾鷲湾が一望できる。

天狗岩に行かない場合、山頂の北にある山寄せの道を東にたどる。自然に形成された谷を渡るところには石積みが構築されている。なかには明治頃かと考えられる矢穴を伴った割石もある。

天狗岩から岩屋堂へ　天狗岩を発ち、岩屋堂へと向かう。天狗岩から東へ尾根筋を 150mほど進んだ後、道は南の谷部へと折れる。急な斜面を標高差 80mほど一気に下る。急斜面のためか、道は不明瞭である[(6)]。標高 440m付近で急斜面は終わる。このあたりから道は明確で、経年利用で溝状を呈した山寄せの道となっている（図 184）。

標高 350m付近で尾根伝い道となる。傾斜はさらに和らぐが、それでも全体には急勾配である（図 185）。道幅は 100 ㎝前後で石段・石畳はない。このあたりは道沿いに大石が点在し、そこに登れば尾鷲湾を眺めるスポットとなっている。標高 300～250mあたりは、やや急な斜面をつづら折れで下る。溝状の窪を呈する場所もあるが、途切れている地点もある。

標高 250～220mあたりは安定した尾根伝い道となる。標高 225m付近に、そのまま尾根伝いに続く道と、右へ曲がる道との分岐点がある。後者の道が岩屋堂へと通じる。山寄せ道を下り、兵衛谷川の流路をまたぐと岩屋堂である。岩屋堂あたりの標高は約 190mである。

岩屋堂から尾鷲へ　岩屋堂の詳細は後述するので、先に

図 182　岩屋堂道（馬越峠～天狗倉山）(2)

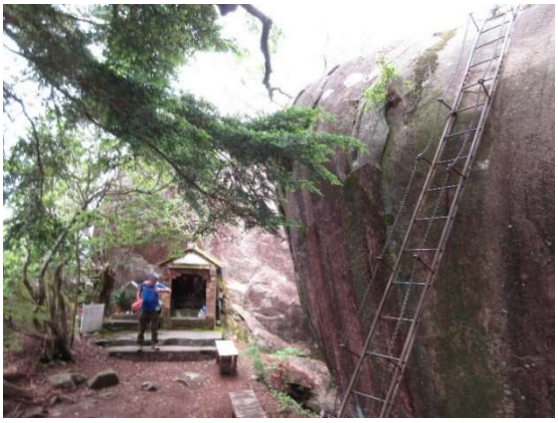


図 183　天狗岩（天狗倉山の山頂）

図 184　岩屋堂道（天狗倉山～岩屋堂）(1)

図 185　岩屋堂道（天狗倉山～岩屋堂）(2)

岩屋堂以南の道を見ておく。

天狗倉山から通じる道を経て岩屋堂を参拝した旅人は、そこから尾鷲へと向かう。天狗岩から岩屋堂にかけての道とは異なり、一部に石段・石畳が設けられている。路面幅は120～170㎝である。

岩屋堂から南に下っていく。標高約 160m付近までは山寄せの道である。急斜面部には谷側に石積みを設けているところもある。標高175m付近では、土砂崩れで通行不能になった路線を変更した地点が確認できる(図186)。標高約160～90m付近は尾根上の道である。路面幅は180㎝ほどで、石段・石畳が敷かれている部分もある。石段・石畳は、１人が歩行できる１石程度が敷かれているのみである（図187・188)。

標高約140m付近で、右側（西）に分岐する道が交差する。ここを右手に進むと馬越峠道の本線方面へ通じる（後述)。交差点を道なり（左）に進む。畑地や人家跡の間を通り、標高約 75m付近で林道天狗倉山線との交差点に至る。ここには、地元の好意で車が３台ほど停車可能な駐車場が設けられている（図181、Ⓟの位置)。

林道を横切り、さらに南へと進む。この道は地元で「先祖道」と呼ばれている。路面幅は約150㎝、石段も設けられているが、今はほとんど使われておらず、荒れている（図189)。標高45m付近で屈曲した後は、セメント舗装道となる。路面は、しばらくは幅100㎝程度で、標高30m付近以南になると幅３～４ｍに拡幅され、南へと続いている。なお、標高５ｍほどの地点から、かつては現在の北浦公民館のあたりまで尾根を上ってから斜面を下る道だったようだが、現在は削られて擁壁となり、かつての道の位置には金属製の階段が取り付けられている。

岩屋道道標から岩屋堂への道　次に、馬越峠から天狗岩へ向かわず、熊野道本線を天狗倉山中腹まで下ってから岩屋堂に向かう道を見よう。

馬越峠から標高70m付近まで下ると、左手に向かう道がある。この道の路面幅は約150mで、今は全く使われていない（図190)。この交差点に、かつて岩屋堂への道を示す道標（図181-1、現在、尾鷲市観光物産協会で保管）があった[7]。地元の石材ではない花崗岩製の角柱形で、頂部は宝形造風。基部は欠損し、残存高50.5㎝、碑面幅16㎝、奥行き15㎝である。碑の一面に「是ゟ岩屋道／五町あり」と刻まれている。紀年銘はないが、その形状から

図186　岩屋堂道（岩屋堂～尾鷲）(1)
旧道（下）と新道（上）

図187　岩屋堂道（岩屋堂～尾鷲）(2)

図188　岩屋堂道（岩屋堂～尾鷲）(3)

図189　岩屋堂道（岩屋堂～尾鷲）(4)

江戸中期から明治前期頃までの間に作られたものと考えられる。

道標が示す道は、熊野道本線との交差点から東へと続き、100mほど先で林道天狗倉山線と交差して旧状を失う。この先は、林道と同じ位置を進んで流路をひとつ渡り、そこから林道を離れて谷筋を通り、標高 103mあたりで尾根に上がる。その後、先述の岩屋堂から「先祖道」へと続く道としばらく並走し、標高 140m付近でその道に合流している。標高 60～103m付近の谷筋の道は、現在では判然としない。

図 190　岩屋堂道（本線道～岩屋堂）

図 191　岩屋堂道（本線道～岩屋堂）

○岩屋堂

岩屋堂と周辺施設　岩屋堂は、長軸約 21m・短軸約 20m・高さ約 12mの、天狗倉山頂付近から転落してきたであろう巨岩が中心である（図 192）。『西国三十三所みちしるべ』（関係史料１）には「岩屋」、『天保新増西国順礼道中細見大全』（同２）には「天狗の岩屋」、「風土記御用ニ付御調へ書上帳」（同４）には「岩屋堂」とある。なお、明治後半期と考えられる資料には「天狗倉山岩谷寺」と記載されている[8]が、この名称は他史料では確認できない。

巨岩の周辺は、南西と北東が自然流路で遮られ、南東は自然流路に面した斜面、北西は天狗倉山山頂方面へと続く急斜面となっている。巨岩の周囲、長軸約 60m・短軸約 40mの間が整地されており、巨岩をとりまく施設がある。ここでは、巨岩だけでなく周囲の施設を含め、全体を岩屋堂として扱う。

岩屋堂の中心となる巨岩は、下に庇状の空間（洞）がある（図 192）。ここに石造聖観音菩薩坐像のほか、西国三十三所観音石仏や石造地蔵菩薩坐像など多くの石造物が祀られている（後述）。

図 192　岩屋堂　巨岩と洞

巨岩の外側では、北東部の自然水路沿いに通路があり、山神・稲荷・竜王・白蛇のほか、馬頭観音を祀った小祠が点在する（図 193）。自然水路沿いの通路は、現在はコンクリートで固められているが、かつては石段・石畳の道であった形跡がある。祠も全てコンクリート製となっているが、かつては木製祠だったと考えられる。

図 193　岩屋堂　巨岩の北部

巨岩外の南西部には、割石や自然石で区画された平坦地が２か所あり、堂跡と考えられる（図 194、堂跡１・２）。堂跡１には石列・礎石のほか、南東面には向拝の縁石や沓

脱石と考えられる石が残存する。石列は横積みではなく立石造である。堂跡２は堂跡１の背後にある。区域内をさらに分割する石列もある。南西部には小規模な石垣がある。

堂宇について、『見聞闕疑集』には、延宝７(1689)に常聲寺住職の鐵船が隠居地に定め、翌年にここへ移って中興開山になったことが記されている（関係史料３）。これに依拠すれば、堂宇の建立は延宝８(1680)年となる。常聲寺は尾鷲市林町にある曹洞宗寺院で、現在も岩屋堂での読経を行っている。

堂跡１と巨岩との間は、堂跡から２ｍほどの高さの段で、墓地となっている。堂跡１の正面右に墓地へと至る石段がある。墓地には８基ほどの墓石がある（図 195）。墓石には無縫塔と自然石塔があり、無縫塔台座の１基には「常聲十世」の文字が刻まれており鐵船（５世）以降も常聲寺住職が当地にいた（隠居していた）と考えられる。

墓地の東には「景清一族郎党」を供養した木製塔婆（図 196）がある。平家落人伝説との関係が考えられるが、この塔婆の初現やここに供養された経緯は不明である。

巨岩と堂跡１の前面（東側）は幅５ｍ程度の通路を兼ねた平坦地がある。ここから墓地に至る石段の脇に享保６(1720)年銘の廻国供養塔がある。平坦地南東面は雛壇状に造成され、江戸時代以降現代まで修復の手が加わったと思われる石垣で壁面が擁護されている。平坦面から南西に向かって参道が延び、段の間には石段が設けられている。

なお、巨岩の東隅には、近現代の造成と考えられるセメント製の基礎が残る。また、巨岩の開口部上面には、洞を囲う目的で壁を取り付けた痕跡（昭和後半期頃と思われる）が残っている。これらは、岩屋堂が現代に至るまで信仰の場として使われてきたことを示す痕跡である。

巨岩の内部（洞）　巨岩内部は、最大高約 4.9m、最大幅約９ｍ、奥行き約６ｍの洞となっている。基本的には自然の洞だが、開口部の上部に、風化の度合いや岩の摂理とは異なる部分がある（図 197）。人為的な敲打調整痕と考えられる。巨岩の空間は、一見すると自然のままのようだが、実際は人為的に調整し形を整えていると考えられる。

岩屋は、平成 29(2017)年まではトタンに覆われ、床面には板が敷かれていた。また、その前には資材庫があった（図 198）。これらは、「天狗倉山まるごとプロジェクト」の努力により、同年 10 月からはじまった周辺整備の一環として翌年３月までに撤去された。

図 194　岩屋堂　堂跡１の石列・沓脱石

図 195　岩屋堂　墓地

図 196　平家景清一族郎党供養の木製塔婆

図 197　岩屋堂　巨岩開口部の敲打調整痕

洞内の壁際にはセメント製の雛壇が造られており、ここに本尊の石造聖観音菩薩坐像のほか、多くの石仏・木造仏が安置されている。また、洞内の上部には、護摩焚きによるものと考えられる煤が付着している。

図 198　かつての岩屋堂（平成 29 年 11 月撮影）

○　岩屋堂の文化財

主な文化財の全体配置を図 202 に、洞内の配置を図 203 に示す。また、表４・５に法量その他の観察内容を示した。

石造聖観音菩薩坐像　洞内の石造聖観音菩薩坐像は、岩屋堂の本尊にあたる（図 199)。『見聞闕疑集』(関係史料３）などに弘法大師作と記されているのがこの石仏と考えられる。石材は、当地産の流紋岩と考えられる。台座も含めた全高 52.8 ㎝、全幅 22.4 ㎝、像高 36.2 ㎝、像幅（脚部）18.8 ㎝である。光背の先端と顔面の左側を欠損する。丁寧に刻まれた蓮花座に右足を上にして結跏趺坐する聖観音菩薩を半肉彫で刻む。右手は与願印、左手には未敷蓮を持つ。長らく鎌倉時代の作とされていたが、彫りが華奢であること、図案化された衣紋の形状などから、室町時代に製作されたと考える方が妥当であろう。

図 199　石造聖観音菩薩坐像

西国三十三所観音石仏　32 躰は洞内、１躰は岩屋外の小祠に配置されている（図 203)。天明６(1786)年３月の道中日記に「大岩ノ中、観音脇に三十三観音有り」と見え[9]、この石仏群がそれ以前から存在していたことは確実である。「常聲寺什物目録」(参考史料５）では、延宝５(1677)年の制作とする[10]。像様や蓮華座の形態から推察できる石仏の年代観も 17 世紀後葉から 18 世紀前葉頃なので、この寺伝が伝える年代と齟齬はない。

西国三十三所観音と考えられるが、無銘のため、石仏と三十三所寺院との比定は難しい。参考までに、表５には昭和 46(1971)年の尾鷲市教育委員会調査による比定寺院を掲載した。なお、当石仏を三十三所全体として見ると、馬頭観音１躰・聖観音２躰が多く、千手観音１躰・十一面観音２躰が少ない。

像はいずれも軟質の砂岩で、個体間の石材差はほぼない。全体によく似た像様だが、垂髻を含む頭部の表現や円光背の有無から、像様１（８･29）と像様２（それ以外）の大きく２つに区分できる（図 204)。像様２の範疇でも、千手観音の腕の長さ、如意輪観音の天衣先端の処理、垂髻の長短などで若干の違いがある。台座は全て蓮華座。全体形で３類（細分４類)、蓮華部意匠で６類に区分でき（図 205)、台座１類が 30 点、台座２・３ａ・３ｂはそれぞれ１点のみである。蓮華部意匠と像様には、蓮台Ｄ１類が像様１と対応、蓮台Ｄ２ｂ類は像様の垂髻が短いという対応関係がある。

以上のことから、この石仏群制作には２系統の工人（工人集団）が携わったと考えられる。ただし、用いる石材は同じであり、三十三観音という一群の石仏を分割し別工人に発注することは常識的に考えにくい。石仏制作の受注者が複数系統の工人を抱えていたことに起因する差だろうと考えられる。

その他の石仏　地蔵菩薩坐像・地蔵菩薩立像・不動明王立像・弘法大師坐像が洞内にある。地蔵菩薩坐

像の台座には宝永７(1710)年８月の銘がある。宝永４(1707)年 10 月４日に発生した宝永地震津波物故者の供養塔と伝えられる。三回忌法要であろうか。不動明王立像と弘法大師坐像は、明治期以降に製作されたと考えられる。

木造仏　２躯ある。１躯は像高約 62 ㎝の木造薬師如来立像（図 200、図 203Ａ）で、石造聖観音菩薩坐像の横に置かれている。傷みが激しい。江戸時代のものと考えられる。もう１躯は如来立像（図 203Ｂ）で、洞内南隅の地面に直置きされている。像高約 68 ㎝で躯体と蓮花座は一木造。これも傷みが激しい。江戸時代末期から明治時代頃の制作と考えられる。これら木造仏は巨岩南の堂宇に伴うもので、堂宇の倒壊によって岩屋堂内に移設されたと考えられる。

その他　護摩焚きに使われたと護摩釜と鍋がある（図 201）。いずれも鉄製。護摩釜の蓋外縁には羯磨が刻まれ、内側には輪宝が配される。摘部は宝珠形。鍋は直径約 54 ㎝で二方把手に三足がつく。所属時期は不明。

図 200　木造薬師如来立像

図 201　護摩釜と鍋

熊野参詣のなかの岩屋堂　岩屋堂は熊野道本線からは少し外れた位置にあるが、巨岩内に祀られた伝弘法大師作の石仏を目指し、旅人の 10 人に 1 人程度が訪れていた。巨岩内部空間の大半を占めるのは西国三十三所観音石仏で、現在ではこちらの方が岩屋堂を象徴する仏像群となっているが、江戸時代の旅人が目指したのは、伝弘法大師作の石造聖観音菩薩坐像の参拝であった。

岩屋堂は天狗倉山山頂の天狗岩とともに、修験の法要を行う場であった。岩屋堂内に残された護摩釜がそれを示している。また、常聲寺によって寺庵が結ばれていた場という側面も持つ。

このように岩屋堂は、観音信仰、修験、そして地域霊場という複数の顔を持つ場である。馬越峠に至った旅人がそこへ行くためには険しい道をたどらねばならなかったが、可能であれば立ち寄りたい名所であった。熊野道沿いの重要な霊場と位置づけられる。

註

(1)　江戸時代の史料には「順礼」が多い。史料表記は「順礼」のままとし、本文中では「巡礼」とする。
(2)　塚本明編『道中記から見た馬越峠・尾鷲』（三重大学人文学部・塚本明研究室編、2006 年）では、170 点の道中記が掲載されており、そのうちの 17 点で岩屋堂に関する記述が確認できることに拠る。
(3)　岩屋堂を経由する道と経由しない道とを分けるため、ここでは便宜的に後者を「本線」と記述する。
(4)　南紀熊野ジオパーク推進協議会編『南紀熊野ジオパーク大地に育まれた熊野の自然と文化に出会う』（第５版、2022 年）等を参照。
(5)　前掲註(1)文献、10 頁。
(6)　川口有三氏の御教示によれば、この急斜面道は、比較的新しい時期に林業用に整備されたという。
(7)　この道標は一時、馬越墓地に遺棄されていたが、昭和 59 年に紀北町在住の国分征出夫氏が発見された。その後、国分氏が地元で聞き取りを行い、原位置が判明した。。
(8)　「紀伊尾鷲常聲寺記録」（皇學館大学蔵、『鈴木敏雄氏遺稿・旧蔵資料目録』整理番号 3920）。
(9)　前掲註(1)文献、10 頁
(10)　相賀徳一・伊藤良「岩屋堂の調査報告」（1971 年 11 月３日付け、尾鷲市教育委員会所蔵資料）には、「「常聲寺記録」によると、延宝５年(1677)年常聲寺住職鉄船寿門和尚と比丘が発願して、33 躰の観世音石佛を建立している」とある。「常聲寺什物目録」（明治 20〔1887〕年、関係史料５）も延宝５年とするが、尾鷲市教育委員会『尾鷲市の文化財』（1976 年）では延宝７年となっている

図 202　岩屋堂平面略図

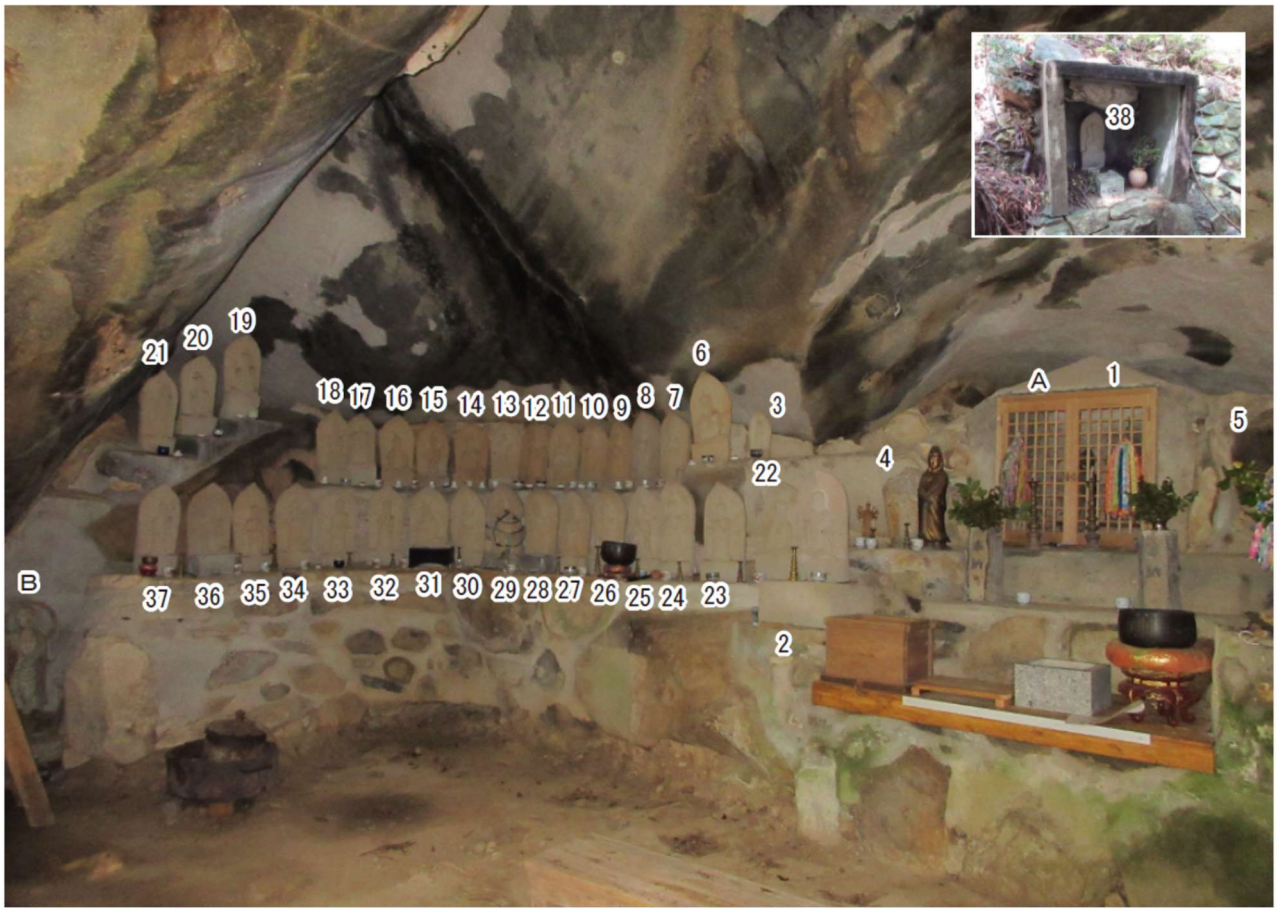


図 203　岩屋堂　洞内の状況　　＊番号・記号は本文及び表４・５と対応

図 204　岩屋堂　西国三十三所観音石仏の分類　＊像は蓮台区分毎に観音種類と表情等の類似で並べている

図 205　岩屋堂　西国三十三所観音石仏台座分類

表４　岩屋堂石造物一覧(1)：西国三十三所観音石仏以外　　＊末尾列は『三重県石造物調査報告Ⅰ』(2009)の報告番号

番号	分　類	名　称	所在場所	法量（cm）	年号（時代）	西暦	銘　文	備考（材質等）	県石造物調査番号
1	石仏	聖観音菩薩坐像	岩屋堂内	全高52.8、全幅22.4、厚さ14.0 像高36.2、像幅18.8	（室町）			背面研磨 光背先端・顔面左欠損 熊野酸性火成岩（流紋岩）	尾鷲415
2	石仏	地蔵菩薩坐像	岩屋堂内	塔高62、塔幅29、塔厚22、像高37 台座高23、台座幅47・奥行き48	宝永７	1710	（台座正面）奉寄進／岩屋堂／三界萬霊等／定入代 （台座右面）仲助市／内室／施主／同／老母 （台座左面）宝永七／庚寅／八月日	砂岩	尾鷲412
3	石仏	地蔵菩薩立像	岩屋堂内	全高33.5、全幅16、厚さ9、像高19	（江戸）			砂岩	尾鷲418
4	石仏	不動明王立像	岩屋堂内	全高50、全幅34、厚さ４、像高27.5	（明治以降）			花崗岩	尾鷲416
5	石仏	弘法大師坐像	岩屋堂内	全高47、全幅29、厚さ29 像高31.5、像幅24、像厚15	（江戸以降）			砂岩 台座は像と別石	尾鷲417
39	供養塔	廻国供養塔	堂跡１東	現高135、幅75、厚14	享保６	1720	（正面）以万人講常燈立廻国／□納大乗妙典六十六部／供養廻向／享保五庚子天／正月元旦　願主／寶山入心上座	砂岩か	尾鷲413
40	塔婆類	五輪塔	堂跡１東	残高22、幅16	（戦国末）			砂岩 一石五輪塔の火・水輪部片	尾鷲414
41	塔婆類	無縫塔	墓地	塔高48、塔幅24、全高89	（江戸）		（台座右面）常／聲／十／世	台座は２石　砂岩	
42	塔婆類	無縫塔	墓地	塔高51、塔幅27、全高70	（江戸）		（台座右面）定入	砂岩	
43	塔婆類	無縫塔	墓地	塔高45.5、塔幅17、全高63	（江戸）			砂岩	
44	塔婆類	無縫塔	墓地	塔高62.5、塔幅24、全高87	（江戸）			砂岩	
45	塔婆類	自然石塔婆	墓地	塔高105、塔幅38、厚さ45	（江戸？）			砂岩	
46	塔婆類	自然石塔婆	墓地	塔高72、塔幅31、厚さ32	（江戸？）			砂岩	

表５　岩屋堂石造物一覧(2)：西国三十三所観音石仏　　＊末尾列は『三重県石造物調査報告Ⅰ』(2009)の報告番号

番号	名称（像様）	特　　徴	所在場所	法量（cm）				台座	蓮台	蓮台	尾鷲市教委比定番数・寺	県石造物調査番号
				像高	全高	幅	厚さ					
6	如意輪観音坐像	一面六臂	岩屋堂　堂内	36.5	62	30	18	1	B	砂岩	一番　青岸渡寺	尾鷲441
7	十一面観音立像	一面二臂	岩屋堂　堂内	41.5	59	27	16	1	D2b	砂岩	二番　紀三井寺	尾鷲447
8	千手観音立像	一面十臂	岩屋堂　堂内	43.5	62	31	14	1	D1	砂岩	三番　粉河寺	尾鷲420
9	千手観音立像	一面十臂	岩屋堂　堂内	41	59.5	28	13	1	C	砂岩	四番　施福寺	尾鷲421
10	千手観音立像	一面十臂	岩屋堂　堂内	42	60	26	13	1	〔B〕	砂岩　蓮台部破損	五番　葛井寺	尾鷲422
11	千手観音坐像	一面八臂	岩屋堂　堂内	35	60	29	13	2	B	砂岩	六番　壺阪寺	尾鷲423
12	千手観音立像	一面十臂	岩屋堂　堂内	42	60	28	15	1	B	砂岩	十六番　清水寺	尾鷲424
13	十一面観音立像	一面二臂	岩屋堂　堂内	35	60	31	16	1	B	砂岩　長谷寺式	八番　長谷寺	尾鷲448
14	不空羂索観音坐像	一面八臂	岩屋堂　堂内	35	61	29	15	1	C	砂岩	九番　南円堂	尾鷲440
15	千手観音立像	一面十臂	岩屋堂　堂内	41	60	28	15	1	D2a	砂岩	十番　三室戸寺	尾鷲425
16	如意輪観音坐像	一面二臂	岩屋堂　堂内	33.5	61	28.5	15	1	B	砂岩	七番　龍蓋寺（岡寺）	尾鷲442
17	馬頭観音坐像	三面六臂	岩屋堂　堂内	34	60.5	27	14	1	B	砂岩	廿九番　松尾寺	尾鷲451
18	聖観音立像	一面二臂	岩屋堂　堂内	40.5	63	27.5	14	1	C	砂岩	廿一番　穴太寺	尾鷲435
19	准胝観音坐像	一面十二臂	岩屋堂　堂内	36.5	64.5	28	18	3a	D2b	砂岩	十一番　上醍醐准胝堂	尾鷲450
20	如意輪観音坐像	一面二臂	岩屋堂　堂内	31.5	60.5	28	16	3b	D2b	砂岩	十三番　石山寺	尾鷲443
21	聖観音立像	一面二臂	岩屋堂　堂内	36.5	60	24	15	1	D2b	砂岩	廿六番　一乗寺	尾鷲436
22	如意輪観音坐像	一面二臂	岩屋堂　堂内	37	60.5	28	17	1	B	砂岩	廿七番　円教寺	尾鷲444
23	千手観音立像	一面八臂	岩屋堂　堂内	39	61.5	29.5	16	1	D2a	砂岩	十九番　行願寺	尾鷲426
24	千手観音立像	一面十二臂	岩屋堂　堂内	43	63	29	15	1	D2b	砂岩	廿番　善峯寺	尾鷲427
25	千手観音立像	一面十臂	岩屋堂　堂内	38	62	29	15	1	C	砂岩	廿二番　総持寺	尾鷲428
26	千手観音立像	一面十臂	岩屋堂　堂内	43	62	27	13	1	B	砂岩	廿三番　勝尾寺	尾鷲429
27	千手観音立像	一面八臂	岩屋堂　堂内	38	60.5	26	16	1	D2a	砂岩	廿四番　中山寺	尾鷲430
28	千手観音立像	一面十臂	岩屋堂　堂内	44	62	29	13	1	B	砂岩	廿五番　清水寺	尾鷲431
29	千手観音立像	一面十二臂	岩屋堂　堂内	43	64	33	15	1	D1	砂岩	卅番　宝厳寺	尾鷲432
30	聖観音立像	一面二臂	岩屋堂　堂内	41	63.5	28	14	1	D2a	砂岩		尾鷲437
31	如意輪観音坐像	一面二臂	岩屋堂　堂内	34.5	62	29	16	1	B	砂岩	十八番　六角堂	尾鷲445
32	聖観音立像	一面二臂	岩屋堂　堂内	41	62	29	15	1	B	砂岩		尾鷲438
33	十一面観音？立像	一面二臂	岩屋堂　堂内	42.5	60	26	14	1	D2b	砂岩	卅三番　華厳寺	尾鷲449
34	千手観音立像	一面十二臂	岩屋堂　堂内	39.5	61.5	28.5	18	1	A	砂岩	卅一番　長命寺	尾鷲433
35	千手観音立像	一面十臂	岩屋堂　堂内	38.5	63	29	13	1	B	砂岩	卅二番　観音正寺	尾鷲434
36	如意輪観音坐像	一面二臂	岩屋堂　堂内	35	62	30	14	1	D2b	砂岩	十四番　三井寺	尾鷲446
37	聖観音立像	一面二臂	岩屋堂　堂内	36.5	60.5	27	15	1	B	砂岩	廿八番　成相寺	尾鷲439
38	馬頭観音坐像	三面八臂	岩屋堂外　北西	36	64	28	15	1	B	砂岩		尾鷲419

関係史料

・〈　／　〉は、割注、／で改行位置を示す
・「　」は改行位置を示す

1　『西国三十三所道しるへ』（部分）

＊国会図書館デジタルアーカイブ

○香の本江　八丁
此所、町四五丁あり、此出」口に川二つあり、次の川」あしき川なり、水出ニハ」此町出口より右のかたへ」びんの山と云所へ廻るべし、更ニびんの村と云所ニ渡し」舟ありて、一人三文つゝニ取」渡す、扨、是よりまぐし」坂と云坂をこへて此さか」下■へ、麓ニ小川有、越て」おわしの町也、まぐし」坂の左の峯に、天狗」岩として大き成立岩有、又、ふもとに岩屋あり、石」佛あり、此岩屋、大師の」作とも天狗のいわやとも」いふ也、
○おはし江　一里半
此町、出口に中江川とて川」あり、又先ニて、屋の子川とて」おはしの川あり、此おは」し、よき町也、家千軒の」所也、此所舟つき也、海上、木の本まて七里、新宮」まて二十里、此陸地ハ八
鬼山越也、此坂上り下り」三里有、薄はへ茂り、大」木おゝひかさなり、或昼」ひる・あぶなども居て、道ハ」せはく石たかく、向を見」はらし休むべき所も」なし、茶やもなき大難」所なり、上り坂に七曲」とて四・五丁の間、猶難所」あり、同上り坂の内ニ、十王」堂有、是より峠の寺」まで四十九丁有、此一丁」一丁に石の地蔵あり、此寺、山号ハ八鬼山、寺号ハ」日輪寺と云、四間半五間」半の萱ぶきの丑寅向」の寺也、本尊ハ石の三宝」荒神、長二尺五寸、弘法」大師の御作、わきに阿弥」陀・薬師・観音、弘法の御願」あり、此寺、向のふもとに九」鬼嶋と云村あり、坂下り
付ハ三鬼の濱へ出る、左ニ」長良村とて一・二丁あり、」右ハ三鬼の松原へ入なり、」小川有、此山、峠の木の間」より大海見ゆる

（巻末）
明和八辛卯年二月改正
寺町通松原下ル町
京都書林　菊屋喜兵衛板

2　『〔天保／新増〕西国順礼道中細見大全』（部分）

＊国会図書館デジタルアーカイブ

古ノ本ゟ一り半〈此間／難所〉
をはし〈宿休・船着／よき町也〉
古ノ本、出端ニ川有、高水ニハ右〈廻り」　川上之びんの村に船ハたし有、
間越坂〈上下／一り〉難所也、麓ニ茶や一」軒あり〈右本ゟ／半り〉峠ニ地蔵堂、前に」茶や一軒あり、左の峯ニ天狗岩」と云大岩有、其山下ニ天狗の岩窟、」石佛有〈大師の／作と云〉、是へ廻りてをわしへ」出る道あれども、雨天ニハ行がたし、
尾鷲ゟ三り〈此間／難所〉
三木〈宿休、此所も／船着也〉
尾鷲ゟ半り行て八之濱村、川有、」舟渡、是より八鬼山ニかゝる
八鬼山〈上り五十丁〉、四十五丁目ニ」日輪寺、本尊三宝荒神〈長貳尺六寸／弘法大師作〉、脇ニ阿弥陀・観音・薬師〈何れも／同作〉、茶所にて食物を売もの有、峠ゟ」下り卅八丁目、茶屋あり〈重五郎／茶やト云〉、茶やより三十六丁、三木濱〈下る

（巻末）
文政七年甲申十月　御免
同　八年乙酉十一月　開版
天保十年己亥正月　購版
同　十一年庚子四月　増修
著編　俣野通尚翁
刷補　池田東籬翁
書図　森川保之
京寺町通松原下ル町
原版主　菊屋喜兵衛

3　『見聞駁雑集』（部分）

＊「尾鷲大庄屋文書」（尾鷲市蔵）

一、岩屋、北川ゟ道法十三町、従往古自然の巌窟」也、石仏の聖観音、岩内ホ安置し、弘法大師御作」と申伝候、延寶七未年、常聲寺鐵船和尚閑」居の地に見定、同申年此所〈隠居罷致、中興」開山に成、元禄十一寅十月十八日遷化なり、沙弥定」入続住居、然之岩屋〈常聲寺支配ニ成、

4　『風土記御用ニ付調へ書上帳』（文化五年辰二月、部分）

＊「尾鷲大庄屋文書」（尾鷲市蔵）

一、山窟　壱ヶ所　〈東西七間／南北九間〉」旧ゟ岩屋堂と唱申候、
是ハ、右間越坂峠ゟ七・八丁東ニ有之、長壱尺壱寸、観世音」菩薩座像之石仏有之候、右者弘仁癸卯ノ年、」弘法大師此山ニ分ケ入、御自作と申伝へ候、尤西国順礼」道中記ニも出有之候、

5　「常聲寺什物目録」

＊太田寿氏写『社寺記録』所収、『常聲寺届書』（明治二十年五月）、部分（尾鷲市立図書館蔵）

一、岩屋（谷）堂　本尊聖観音像　壱躯
石像　弘法大師作
一、三十三観世音像　三十三躯
石像、作者不詳、延宋（ママ）五年五世寿門和尚」、雄廓比丘発願寄附也、当寺ヨリ距離凡廿」八・九町、方位北ノ方魔越ノ中央、西国往来ノ路傍也、（後略）

7　尾鷲から三木里

○ 尾鷲（北浦・中井浦・南浦・林浦）

図 206　金剛寺仁王門

尾鷲の道　馬越峠から下ってくると県道 778 号中井浦九鬼線に突き当たる。県道と並行して北川が流れ、川の北側が尾鷲市北浦町である。県道沿いの西側に十一面観音菩薩を本尊とする金剛寺がある。『西国三十三所名所図会』では薬王山光林寺の名で見え、「本尊十一面観音作者未詳古佛　此地は街道の右に入之」と記されている。

【護國山金剛寺】曹洞宗の寺院。本尊は十一面観音菩薩で、慶長９（1604）年に島勝浦（紀北町）の円通山安楽寺と本尊を交換して入手した。かつては薬師如来を本尊とし、薬王山光林寺と称していた。正徳４（1714）年、寺号の光林が紀州３代藩主徳川綱教の院号と同じであったため、金剛寺と改称した。古くは北川上流の「牛の谷」の奥地に所在していたとされる。仁王門（図 206）と仁王像は尾鷲市指定文化財。

図 207　尾鷲神社

【尾鷲神社】金剛寺の西隣に鎮座する尾鷲の氏神で、祭神は牛頭天王（ごずてんのう）（スサノオノミコト）。安永４（1707）年の津波で流出したのち、現在地に再建された（図 207）。

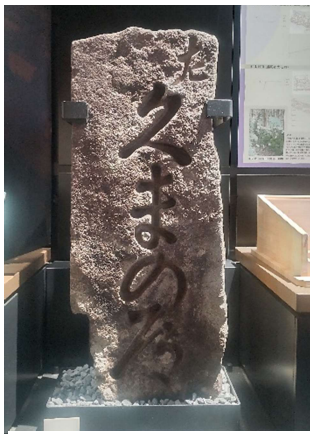


図 208　中井町の道標

北川を渡る橋の前に「左くまの道」の道標がある、これは大正２（1913）年に設置されたものである。橋を渡ると、江戸時代には中井浦と呼ばれた地区に至る。川を渡った地点にはかつて高札場があり、常時７枚の高札が掲げられていたとされる。熊野道は約 200m南進したところで、十字路を東に曲がる。この交差点には「左久まの道」の道標があったが、現在は三重県立熊野古道センターに移設展示されている（図 208）。道標のあった交差点から約 80m東進すると十字路の交差点があり、ここを南に曲がると江戸時代に南浦と呼ばれた尾鷲の中心部に至る。そこから約 300m南進すると、江戸時代に林浦と呼ばれた地区に入る。この地区には、八鬼山と関わりの深い清順が逗留したとされる常聲寺が所在する。

南浦と林浦の境界から約 300m南下すると、熊野道の東側に山鼻庚申塚がある。貞享３（1686）年銘を有する高さ 217 ㎝の巨大な庚申供養碑が中心にあり、周囲に道標地蔵と巡礼墓碑がある。これらの石造物は熊野道沿道にあったものが、時期は不明ながら山鼻庚申塚に集められたと考えられる。また、この場所にはかつて山見茶屋という茶店があったとされる。

【山鼻庚申塚の道標地蔵】高さ 52 ㎝、幅 27 ㎝の石造地蔵菩薩立像で、像右「やまみちや」、像左「左／くまのみち」とある。表面の風化が激しく文字の判別は困難になっている。

【山鼻庚申塚の巡礼墓碑】高さ 60 ㎝、幅 24 ㎝の駒形墓碑で、正面「□永五□□天／妙□信女／

□月三日／三州奥平／村与助／娘つた」とある（図 210）。父与助が娘つたの菩提を弔うために建立した巡礼墓碑と考えられる。三河国に村名として奥平村はないが、現在の新城市周辺を指すと考えられる。

山鼻庚申塚から約 150m南下すると中川（図 211）に至る。ここで中川と矢ノ川の渡河方法について検討する。史料には享保 13（1728）年の『巡礼案内記』に「（略）川二ツ有大水にハ舟わたし」とあり、「川二ツ」は中川と矢の川を指すと考えられる。嘉永 6（1853）年の『西国三十三所名所図会』は、中川について「尾鷲より矢の濱にいたる間にあり舟わたし之」と記す。明治 22（1889）年の『三重県紀伊国北牟婁郡地誌』では、中川橋の記述がある。

以上から、江戸時代半ばまでは、通常時は徒歩、大水時は舟で渡河しており、江戸時代後期に舟渡による渡河が常態化したと考えられる。

図 209 山鼻庚申塚の道標地蔵

図 210 山鼻庚申塚の巡礼墓碑

図 211　中川

○　矢浜

矢浜の道　中川を越えると矢浜（やのはま）に至る。矢浜は近代以降の埋め立てにより地形が大きく改変され、近世以前の様相を把握するのは困難である。中川から約 350m南の交差点に袖片橋（図 212）と矢浜の道標（図 213）がある。

図 212　袖片橋

【袖片橋】長さ約 2.6m、幅約 1.2mの板状の石材。尾鷲発祥の伝説地であり、次のような話が伝わっている。尾鷲に初めて人が住み着いた時、水地浦と向井浦に人が住み始め、お互いに対岸にも人がいるのではと思い集落を出発し、相逢うたのが、矢浜の小川に架かる石橋であった。集落の人に対岸にも人が住んでいることを伝えるため、互いに着物の片袖を渡し証拠としたので、以来その場所を袖片橋（ソデカタシ）と呼ぶようになった[1]。江戸時代にはその橋は熊野道の一部であったが、土地の改良工事に伴い、昭和 48（1973）年に現在地に移設された。

【矢浜の道標】高さ 72 ㎝、幅 27 ㎝、正面「くまのみち」と陰刻された石柱。紀年銘がなく、製作年代は不明。左右の表示がないのも珍しい。

図 213　矢浜の道標

袖片橋から南下し、矢浜コミュニティセンターの前を進むと、民家の間に小道が残る。街道にしては、幅が狭いが、地元では「矢浜道」と呼ばれている。小道は矢の浜公園で消失し、矢浜３丁目の造成地に

至る。この辺りで、矢の川を渡河したと考えられるが、渡河地点は、複数箇所が想定される。文政 12（1829）年刊行の『新増補細見指南車』には、「川有舟わたし」、天保 11（1840）年刊行の『天保新増補西国順礼道中細見大全』には「川有舟渡」とあり、中川と同様、江戸時代後期には舟渡が常態化していたと考えられる。矢の川を渡ると八鬼山越えとなる。

○八鬼山

八鬼山越え　矢の川を越えた後は、近代以降の開発により近世の道の痕跡は失われ、「大道」という字が残るのみである。南東に進むと八鬼山の山裾に取り付き、国史跡指定範囲となる。八鬼山越えの国史跡指定範囲は全長約 6,100mあり、熊野参詣道伊勢路で最も区間が長い。

八鬼山越えは「西国一の難所」とされ、元禄３（1690）年の『西国三十三所道しるへ』には、「此坂上り下り三里有薄はへ茂り大木おゝひかさなり或はひるあぶなども居て道はせはく石たかく向をみはらし休むべき所もなし茶やもなき大難所なり」とあり、江戸時代前期には整備が十分になされていない状況が読み取れる。嘉永 6（1853 年）年の『西国三十三所名所図会』には、「上り五十丁下り四十五丁山路険阻にて至つて難所なり地上に多く石を敷て道を堅むるといへども坂急なるを以て杖をつき過つときハ必らず転倒す下りを慎むべし」とあり、転倒を避けるため、慎重に進むことが奨励されていた。

矢浜大道から上り始めてすぐに石畳みがある。尾鷲市は全国的でも有数の多雨地域であり、八鬼山越えの道も雨による路面の流出を防ぐため、峠付近を除いて多くの部分に石畳が敷設されている。また、道路には進行方向と垂直に洗い越しが敷設されており、排水機能も確保されていた。

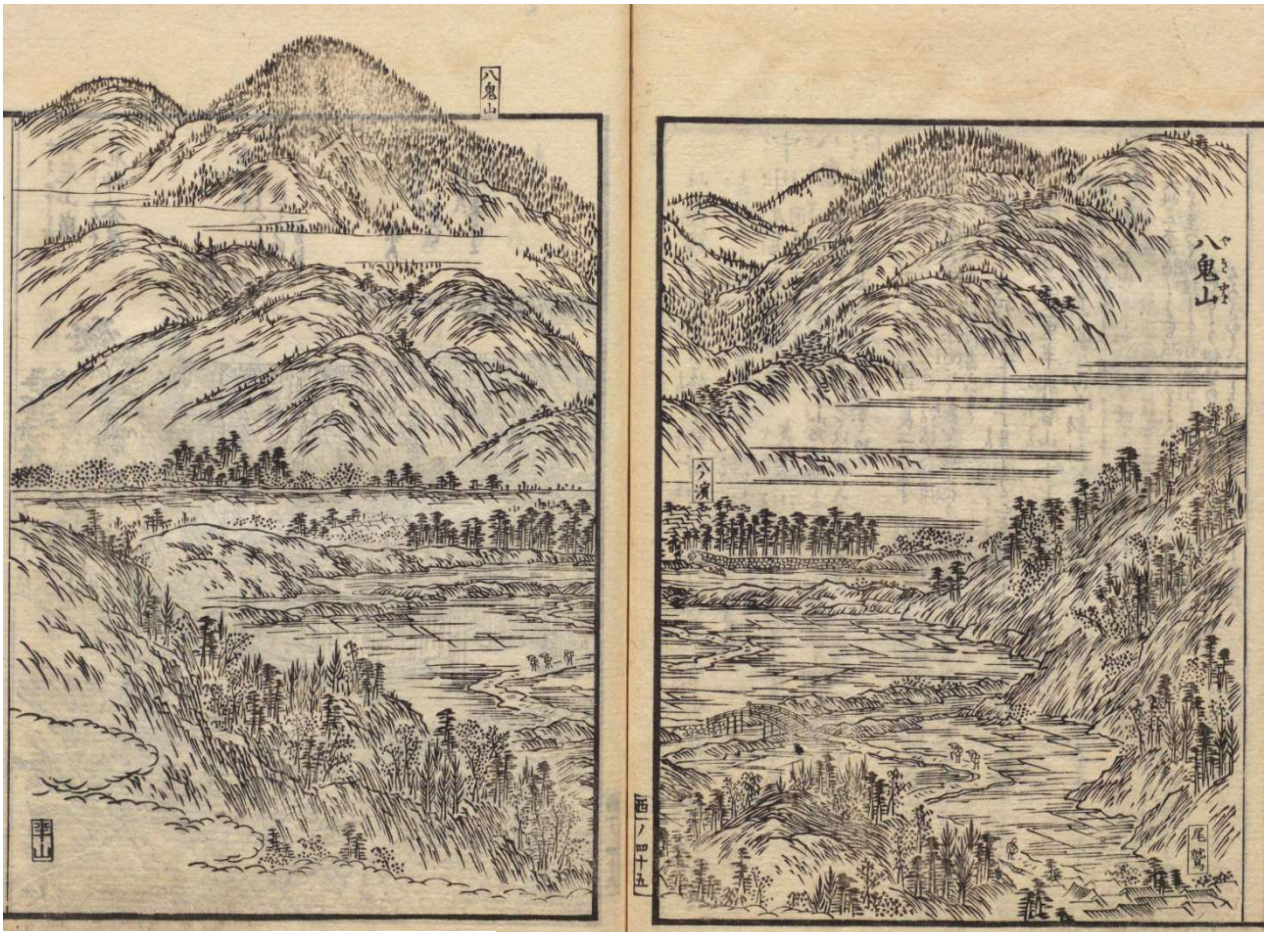


図 214　八鬼山（『西国三十三所名所図会』）

前述の『西国三十三ところ道しるべ』には「茶やもなき」とあるが、時代が下るにつれ、沿道に複数の茶屋が整備されていった。

緩やかな坂道を約 800m上っていくと巡礼供養碑がある。八鬼山は病気平癒を願って西国巡礼に向かう者にとっては険しく、志半ばで命を落とす者もいた。八鬼山越え道中には４基の供養碑の存在が知られている。

図 215　八鬼山の石畳

図 216　桜茶屋の一里塚

【巡礼供養碑①】幅 37 ㎝、高さ 64 ㎝の櫛形墓標で、正面「恭然貫道信士」、右面「安政二卯(1855)四月十八日」、左面「常州築波郡／中嶋村武兵衛門□」とある。現在の茨城県つくばみらい市から来た巡礼者の供養碑である。

巡礼供養碑から約 500m進むと、籠立場とされる平坦面がある。籠立場は紀州藩主や巡見使が街道を通行する際、乗っている籠を停めて休憩した場所であり、「水呑み茶屋」という茶屋があったと伝わる。平坦面の西側には樹齢 300 年と推定されるヒノキの大木があり、北東に一つ目の町石がある。

町石は目的までの距離を示す目的で設置されるもので、八鬼山には本来 50 基の町石が設置されていたと考えられるが、現存するのは 35 基である（図 217・218、表６）。

町石の造立経緯については諸説あり、伊藤裕偉は、天正 13（1585）年に行われた神宮の式年遷宮に関わる山田・大湊の神宮御師ら「都市民」と修験者の関与を指摘している[2]。また、伊藤文彦は、日輪寺を熊野三山（浄土）に見立て、地蔵に導かれ浄土へと至る巡礼路として整備されたとする[3]。

江戸時代の西国巡礼に向かう巡礼者は、このような数百年前の造立者の意図は知る由もなかったと考えられるが、伊勢から熊野三山へ向かう道中で最も標高の高い八鬼山を越えるにあたり、定期的に現れる地蔵に励まされ、山頂へと歩みを進めたことは想像に難くない。これらの町石は「八鬼山町石及び関連石仏」として昭和 53（1978）年に三重県指定有形民俗文化財となっている[4]。籠立場から約 50m進むと清順上人供養碑がある。

【清順上人供養碑】幅 36 ㎝、高さ 76 ㎝の石製不動明王立像。像右「伊勢内宮清順上人／為頓証菩提也」、像左「永禄(1566)九年四月三日」と陰刻される。清順は戦国時代の尼僧で、荒れ果てた神宮の惨状を嘆き、諸国を勧進して浄財を募り、宇治橋の復興や外宮の造営・遷宮を成した。諸説あるが、紀伊国（現. 熊野市紀和町）の出身とされ、伊勢－紀伊間を往復して、尾鷲の常聲寺に逗留したとされる。

清順上人供養碑から約 250m進むと林道と交わる。林道との交差点から約 100m進むと巡礼供養碑②がある。

【巡礼供養碑②】幅 46 ㎝、高さ 73 ㎝の櫛形墓標で、正面「壹劔芦部浦／月江秋転信士／俗名西氏勘六」、左面「元文三戊(1738)午九月十四日」と陰刻される。現在の長崎県壱岐市から来た巡礼者の供養碑である。

表６　八鬼山町石法量及び銘文一覧

No	法量		銘文		
	高さ（cm）	幅（cm）	像左	像上	像右
1	66	34	十五丁　妙秀　丙戌九月十八日	（欠損）	□湊太田十衛門尉
2	60	26	□四十一丁　五人	（欠損）	（欠損）
3	60	26	〔以下不明〕十月十五日	（欠損）	十九丁　いせ□
4	74	31	林勝昌栄信女	（欠損）	いせ大見なと大田十衛門尉内
5	60	36	□□□四年八月三日	（欠損）	妙慶禅定尼
6	65	31	卅三丁　七郎三郎　内二人		いせ山田下馬所小法や
7	47	36	（欠損）	（欠損）	（欠損）
8	76	28			舟江彦蔵
9	73	31	〔以下不明〕永妙法御くま	（欠損）	三十九丁　いう普門小衛門道宗
10	40	21	（欠損）	（欠損）	〔以上不明〕せ河崎与三
11	60	28	卅五丁	（欠損）	いせ山田下座甚兵へ
12	64	31	三十七丁		□丁　い世山田下馬所福田九衛門
13	63	33	天正十七＜己／丑＞十月十二日		伊勢山田村山武慶
14	60	28	□□□八年正月吉日	（欠損）	伊勢山田豊田椿叟大夫
15	55	30	十七六月廿四日	（欠損）	□□船江十二人
16	73	31	天正十七年己丑	□一町	伊勢山田岡元　かち　源兵衛
17	54	32		（欠損）	
18	70	35	三十二町	（欠損）	□セ山田舟江　泉正
19	72	31	永心　春雪　宗資　浄性	廿六丁	いせ山田舟江　恕運　清元　心化
20	60	32	元真　四月十七日		廿八丁　いせ山田大路
21	65	32	天正十七八月十五日		四十二丁　木内三郎衛門
22	76	33	元清逆修　己丑		廿七丁　いせ山田大路
23	72	31	八月吉辰　光永居士	（欠損）	□□山田岩渕小田二郎頭
24	75	29	十四　四十六丁	（欠損）	いせ山田大路才八　ホ十人
25	71	29	辛卯　三月廿五日	□一丁	世義寺
26	60	28	曽祢平次郎為菩提	（欠損）	山田浦口之郷　丈禅□
27			卅丁〔以下不明〕		いせ山田〔以下不明〕
28	71	29			四十七丁
29	54	48	＜己／丑＞八月十五日		四十八丁　河崎世古太郎右衛門
30	41	30	四十三丁　＜己／丑＞八月十五□		いせ河崎□□□
31	60	31			
32	67	30	＜戊／丑＞八月吉辰　妙樹禅尼	五十丁	伊勢山田岩淵徳衛門内
33	53	29	伊勢山田川崎世古弥七郎	□九丁	伊勢山田中山加兵衛
34	66	30			
35	53	32	〔以上不明〕一志祝佐渡守福〔以下不明〕	（欠損）	（欠損）

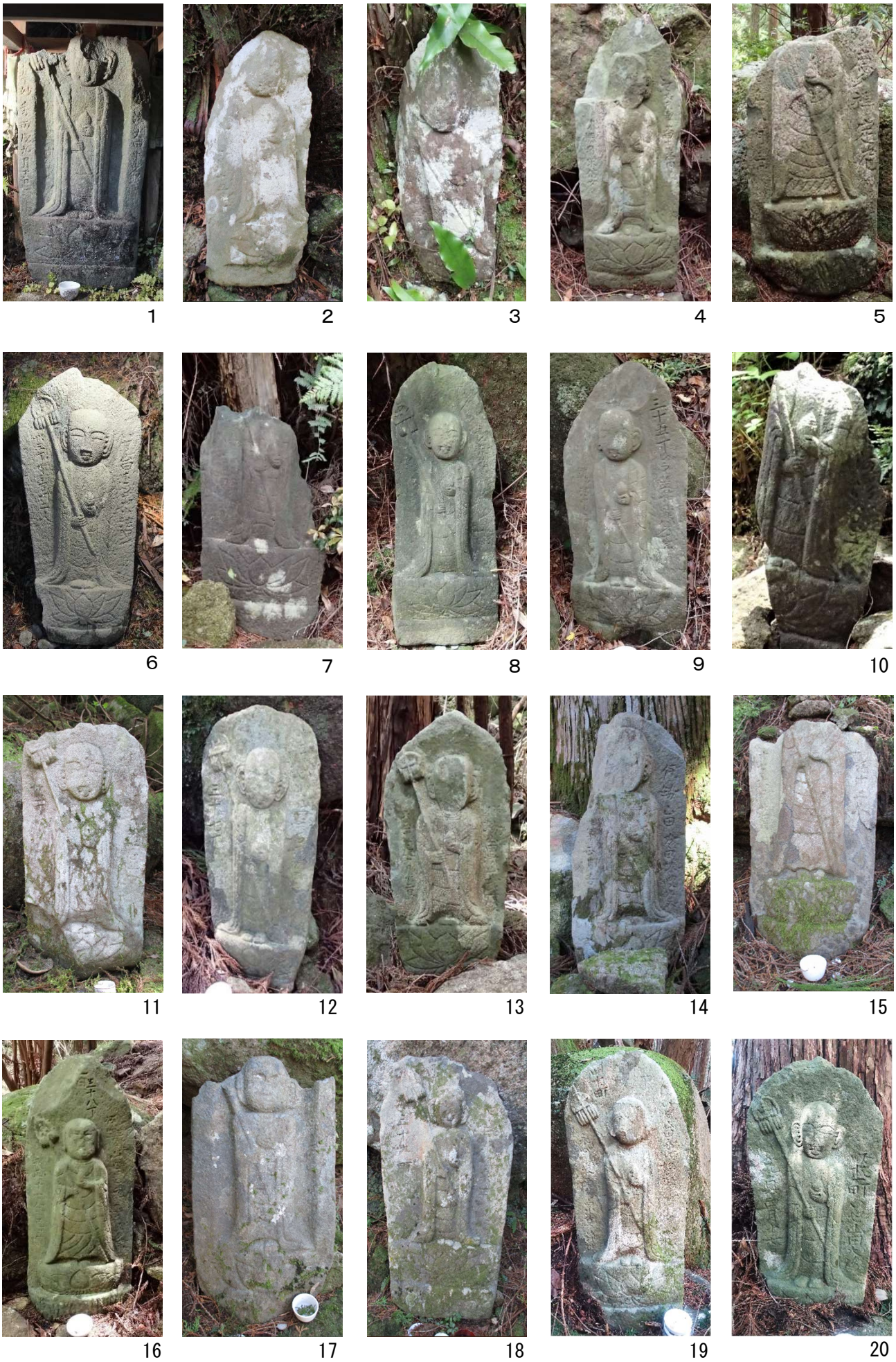


図 217　八鬼山町石及び関連石仏（No. 1-20）

21

22

23

24

25

26

27

28

29

30

31

32

33

34

35

36

37

熊野三所権現とされる石仏

図 218　八鬼山町石及び関連石仏（No. 21-37）

図 219　八鬼山越えの道（1 /20,000）

巡礼供養碑②から約 200m進むと巡礼供養碑③がある。

【巡礼供養碑③】幅 38 ㎝、高さ 64 ㎝の櫛形墓標で、正面「千山自郷信士」、右面「文化十四丁丑（1814）年／九月五日」、左面「備州三原茅町／浦谷屋幸蔵」と陰刻される。現在の広島県三原市から来た巡礼者の供養碑である。

三つ目の巡礼供養碑から約 280mの区間は「七曲り」と呼ばれる難所となる。『三重県紀伊国北牟婁郡地誌』には、「中腹以上ハ左右ニ曲折路頭岩石ヲ以テ築キ最モ険ナリ俗呼テ七曲リト云う」とある[5]。この区間は急勾配となり、石畳道の線形は折れ曲がる。「七曲り」の終点から約 200m進むと三十三町石がある。この付近に巡礼供養碑④があったとされるが、現在その所在は不明である。

【巡礼供養碑④】櫛形墓標で、正面「西上州群馬郡／大暁恵泉信士／白川村北原紋之丞」と陰刻される。現在の群馬県高崎市から来た巡礼者の供養碑であった[6]。供養碑の所在は不明であり、代わりに苔むした自然石が置かれている。

三十三町石から約 250m進むと桜茶屋の一里塚がある。直径約６ｍ、高さ約２ｍで、東側に松、西側に山桜が植えられていた。熊野参詣道に残された一里塚で唯一、道の両脇の塚が完存している。ここにはかつて「吹風茶屋」という名の茶店があったとされる[7]。

一里塚から約 300m進むと、蓮華石・烏帽子岩と呼ばれる巨岩がある。文化７（1810）年、巡礼者の小沢平助は道中日記に、「四十八丁ほど登り、右脇に蓮華石、烏帽子石あり」と記録している。

そこから約 100m進むと、標高 522mの九木峠に至る。ここで街道は二手に分岐しており、南の道が熊野街道、東の道は尾鷲市九鬼町へと至る。大正 15（1926）年に九鬼村役場が建立した道標「右　みきさとみち／左　くきみち」がある。九鬼峠から約 300m進むと八鬼山荒神堂に至る。

【荒神堂】荒神堂は八鬼山日輪寺と称し、『西国三十三所名所図会』には、石積の基壇の上に切妻造妻入の板葺き屋根の堂が描かれている。「本尊三宝荒神＜長二尺五寸／弘法大師作＞脇檀

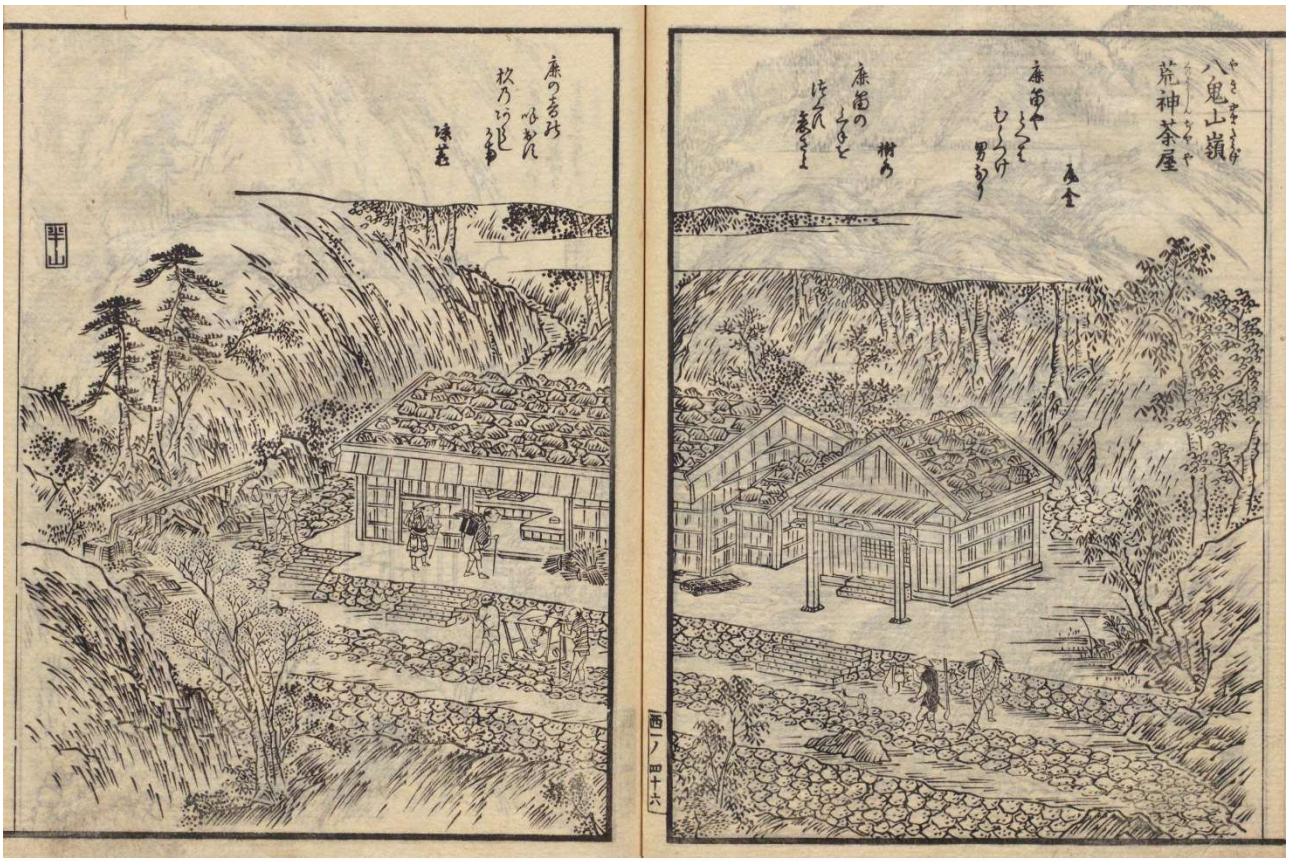


図 220　八鬼山嶺　荒神茶屋（『西国三十三所名所図会』）

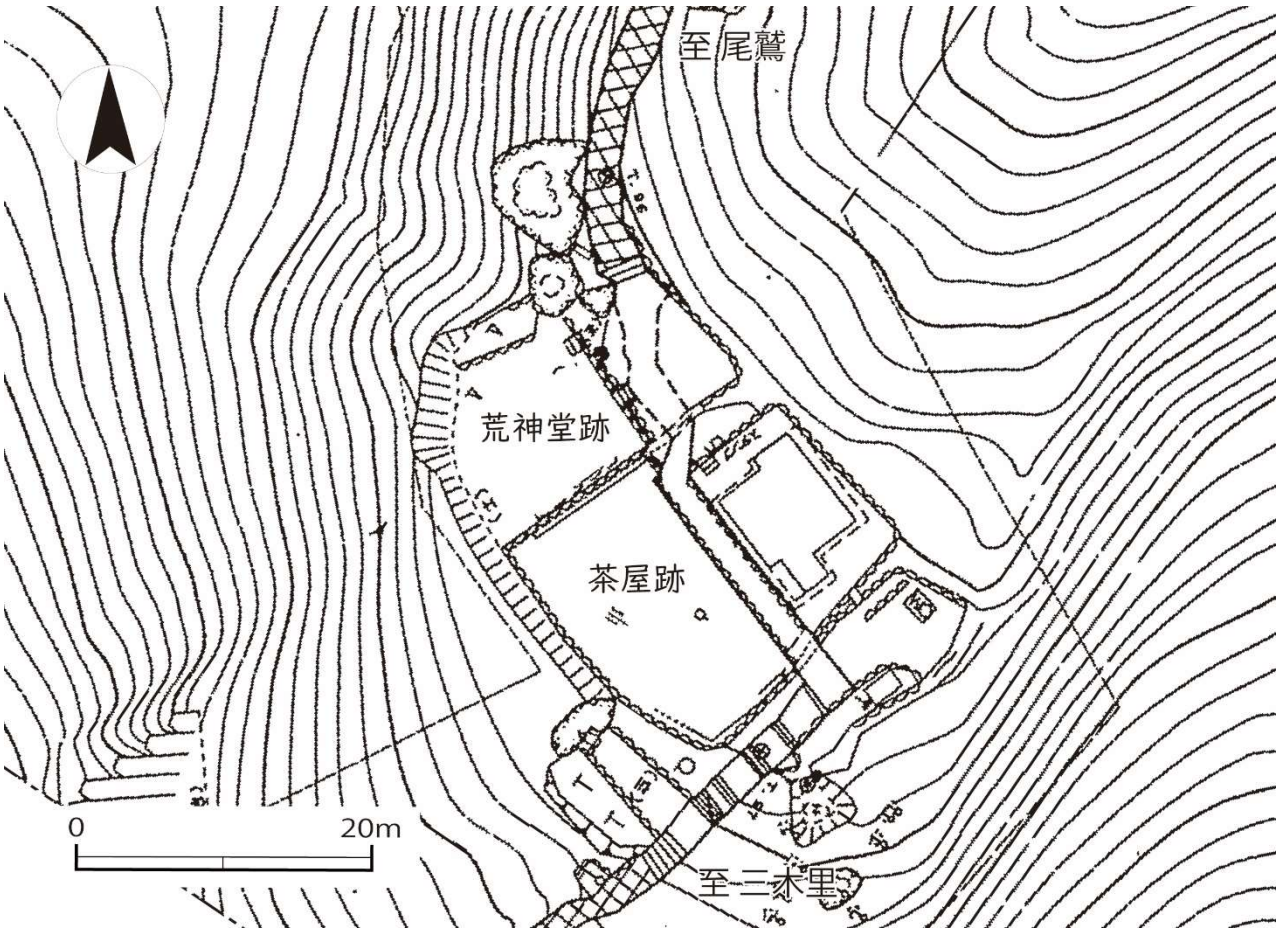


図 221　八鬼山荒神堂跡平面図（1/500）

阿弥陀仏　観世音　薬師如来＜共々／同作＞」と記され、阿弥陀・観音・薬師の三尊は熊野三山の本地仏であり、巡礼者は西国三十三所観音霊場の「前札所」として、道中の安全を願い参拝した。大宝２（702）年、修験者の阿闍梨返昌院仙玉法印が創基し、天正元（1573）年に権大僧都各真法印が中興したと伝わる。現在の荒神堂は令和元（2019）年に再建されたものであり、先代の荒神堂は、解体作業中に発見された墨書から明治 26（1893）年に再建されたことが明らかになった[8]。

【三宝荒神立像】荒神堂の本尊（図 218. No.36）。高さ 125 ㎝、幅 55 ㎝。像右「信劦之十人各真権大僧都／八華山日蓮此時本願」、像左「三宝大荒神本尊／天正四＜申／子＞今月今日所願成就如意」の銘を有する。天正４（1576）年に信濃国の各真が作成したものである。

図 222　八鬼山荒神堂

図 223　荒神堂礎石（『八鬼山荒神堂～落慶記念～』）

【荒神茶屋】文化９（1812）年の道中日記には「八鬼山日輪寺山伏寺なり。茶屋。餅、酒売るところあり」とある。また、『西国三十三所名所図会』には、「右堂にならびて茶所あり餅を商ふ俗に荒神茶屋といふ尤峠にハ人家なし此所にて休らふべし」とある。茶屋は切妻平入板葺き屋根で、旅人二人が店に入るところが描かれている。現在は茶屋の建物は残っていないが、石積み基壇が残る(図 224)。

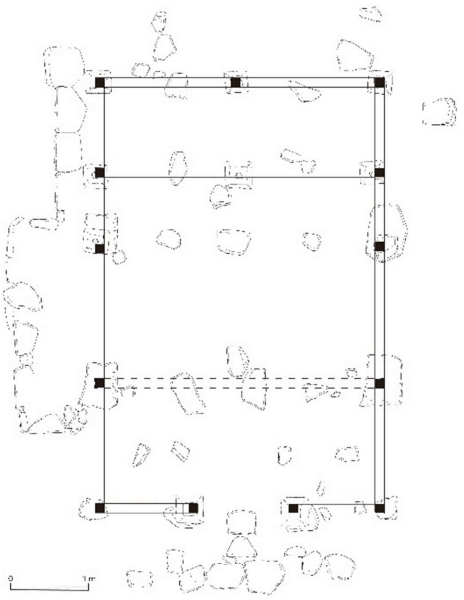


図 224　八鬼山荒神堂跡礎石実測図（1/100）

荒神堂の立地については、元は八鬼山の頂上付近（三木峠）にあったものが、宝永年間までには現在地に移転されたとの説がある[9]。本稿では、各種文献での峠までの距離が安定しないことや三木峠付近に堂跡と考えられる礎石や平坦面が確認できないことから、荒神堂の故地と断定することは避ける。

荒神堂と荒神茶屋は訪れる巡礼者にとっては、礼拝と休息が最大の目的であるが、それ以外に緊急時の避難所としても機能していた。『紀伊続風土記』には、「荒神堂一宇あり側に修験者の庵ありて往来の休足處とす（中略）近年好事の者北山の険阻高山なるによりて盗賊等徘徊すといふ雑説を作り劇場になせるより其名世に高く往還の旅客恐怖するものあり（後略）」とあり、八鬼山が盗賊の出る場所として恐れられていたことが記されている。巡礼者が八鬼山で殺害されたという記録は管見にないが、文化 12（1815）年初演の歌舞伎「敵討浦朝霧」などに、巡礼者が盗賊に斬殺される場面がある。

尾鷲大庄屋文書の中には、文久元（1861）年３月 20 日に八鬼山に追剥が出て、地元民が被害に遭い、荒神堂に住む万宝院という修験者が取り押さえたという事件が記録されている。幕末から明治にかけて流行した話芸、ちょぼくれちょんがれ「紀州焼山峠順礼殺」で巡礼者の母娘が盗賊に殺害される場面があるのは、こうした事件の影響があったのかもしれない。

このように、荒神堂と茶屋跡は巡礼者が安全に八鬼山を越えるために欠かせない施設であり、史跡指定を受けている参詣道と不可分の価値を有すると考えられる。

荒神堂から約 200m南進すると、八鬼山越えの最高所である標高 627mの八鬼山峠（三木峠）に至る。この場所にはかつて茶屋があったとされる平坦面があり、現在は東屋（あずまや）が建てられている。熊野街道はこの地点で、近世以来の道と明治 28（1895）年に計画された新道（通称：明治道）に分岐している。

【三木峠茶屋】越後の文人、鈴木牧之は寛政８（1796）年に八鬼山三木峠茶屋を訪れた際、「絶頂の茶店にて　春寒し見おろす海の果しなき」との句を残している[10]。18 世紀末には茶店が営まれていたことがわかる。

峠から約 200mは尾根筋に緩やかな道が続き、道の東側には世界遺産登録前に整備された「さくらの森広場」がある。「さくらの森広場」以南は急勾配の下り坂となり、約 1.1 km進むと十五郎茶屋（図 225）に至る。

【十五郎茶屋】『西国三十三所名所図会』には、「峠より卅八丁下りて茶屋あり亭主（あるじ）を重五郎といえるを以て俗に十五郎茶屋といふここにも餅を商ふ」「八鬼山嶺三十八丁下りて一軒家あり十五郎茶屋ト云」とあり、切妻造平入の板葺きの茶屋が描かれる。茶屋の中では、二人の旅客が休憩している。一人はキセルで煙草をふかし、もう一人は、草鞋の緒を締め直している。店の前には店員と思しき女性が柴をまとめている。また、店の前広場にはサルが１頭紐でつながれ、旅人二

人がそれを眺めている。現在、十五郎茶屋があった場所には東屋(あずまや)が建てられている。

十五郎茶屋からの下り坂も急勾配が続く、この坂道は紀州藩主や幕府巡見使が通行する際、供奉が槍を担ぐことを認められていたため、「槍かたげ」と呼ばれていたとのことである。

十五郎茶屋から南側には石段の道が残されており、約 450m進むと八鬼山山頂で分岐した明治道と合流する。合流地点から先は勾配が緩くなり、石畳が敷設されている。石畳道を約 170m進むと道脇に平坦面があり、紀州藩主が通行する際に休憩した場所との伝承があることから、籠立場とされている。籠立場から約 300mが国指定史跡の範囲となる。

八鬼山の国指定史跡範囲を過ぎると、アスファルト舗装された道になる。沓川(くつがわ)の左岸を約 400m南進し、Y字の分岐となる。向かって左側の道が熊野道である。明治時代に敷設された石畳を約 50m南下すると、名柄(ながら)一里塚(図 226)に至る。

【名柄一里塚】正徳２（1712）年に設置された一里塚。設置された当時は道の両脇に対となるように塚が造られたが、現在は１基のみ残っている。塚には黒松と山桜が植えられていたとされるが、すでに枯死し、タブノキが自生している。昭和 38（1963）年に尾鷲市指定史跡となった。

名柄一里塚から約 500m南下すると石畳はなくなり、アスファルト舗装となる。JR 紀勢本線の線路を越えると国道 311 号に合流し、眼前に砂浜の海岸が広がる。沓川の渡河地点は河口部の海岸であったと考えられる。

図 225　十五郎茶屋（『西国三十三所名所図会』）

図 226　名柄の一里塚

註

（1）太田寿「片袖橋」『伝説と詩の尾鷲』郷土叢書第 3 輯、15－16 頁、1959 年。
（2）伊藤裕偉「熊野街道八鬼山道周辺の中世石造物」『三重県史研究』第 24 号、2009 年。
（3）伊藤文彦「文化遺産としての「巡礼路」の保存と継承の研究～熊野参詣道伊勢路を事例に～」博士論文、2019 年。
（4）平成 27（2015）年に３基を追加指定した。
（5）野地義智『三重県紀伊国北牟婁郡地誌』1889 年。
（6）三重県教育委員会『三重県石造物調査報告Ⅰ～東紀州地域～』2009 年。
（7）三重県教育委員会『歴史の道調査報告Ⅰ―熊野街道―』1981 年。
（8）一般社団法人八鬼山荒神堂保存会『八鬼山荒神堂～落慶記念～』2019 年。
（9）前掲註（3）。
（10）鈴木牧之「西遊記神都詣西国順礼」『秋月庵発句集』鈴木牧之顕彰会、1983 年。

８　三木里から曽根

○　三木里

三木里の道　熊野道は沓川の河口を渡河後、松原の中に続いていたと思われるが、その線形は現在では不明である。この松原は名柄一里塚と同様、正徳２（1712）年に紀州藩５代藩主徳川吉宗により整備されたとされ、昭和 48（1973）年に尾鷲市指定天然記念物となっている。

松原を抜けて国道 311 号を渡り、急坂を上ると三木里の宿場に至る。江戸時代には入海の港町として栄え、商家や旅籠が立ち並んでいたという。熊野道沿いに法然寺という寺院がある。寺と西国巡礼の関係は不明であるが、境内にある「あいがめさま」と呼ばれる地蔵菩薩立像の一つがかつて熊野道沿いに設置され、道標として機能していた可能性がある(図 227)。高さ 52 ㎝、幅 24 ㎝の地蔵菩薩立像で、像右「寛政□三月日」、像左「□の／ミち　施主友七」とある。

図 227　法然寺の道標（あいがめさま）

高台の町並みは約 400m続き、坂を下った先で丁字路に至る。東側はすぐ港へ至る道で、西側が八十（やそ）川の渡河地点に至る道となる。付近に道標があり、正面に「ひだりくまのみち」とある(図 228)。この周辺が八十川の渡河地点となる。

図 228　三木里の道標

海路（三木里から曽根）　三木里から曽根に至るルートには陸路と海路があった。『西国三十三所名所図会』には「是より曽根といたる山路二里其中間に加田村といたる浦里あり又此三木の浦より曽根にいたるに入海一里の舟わたし有」と記される。陸路は八十川を渡り、ヨコネ道、三木峠道、羽後峠道を通って曽根へと至る。海路は、八十川の河口の港を出航し、曽根の飛鳥神社前の港に至る。また、『西国三十三所みちしるへ』などの道中案内記で確認できる。（表７）。

三木里から曽根までは内湾であり、波が穏やかであったことから、船の利用が可能であったのだろう。一方、陸路は峻険であり、海路より時間もかかることから、道中案内などでは勧められなかったが、波が高く船が出せない日や船賃を節約するために用いられたのだろう。

表７　三木里から曽根への海路の記録一覧

西国三十三所道しるへ	元禄3年	1690年	此所より曽根へ入海の上一里の間一人十五匁にて舟にのする此舟のりてよき所也
順礼案内記	享保13年	1728年	此所よりそねまて内海一りの舟渡し有
西国巡礼細見記	安永５年	1775年	そね迄内海一里の舟わたしのりてよし
順礼道中指南車	天明２年	1782年	入海舟あり此所のりてよし
西国巡礼道中細見増補指南車	文化３年	1806年	此間入り海舟ありのりてよし
新増補細見指南車	文政12年	1829年	三鬼よりそねへ入海一り船渡乗がよし船ちん一艘三百文割合也
天保新増西国順礼道中細見大全	天保11年	1840年	三木よりそねへ入海一り舟渡乗がよし舟賃壱艘三百文割合也

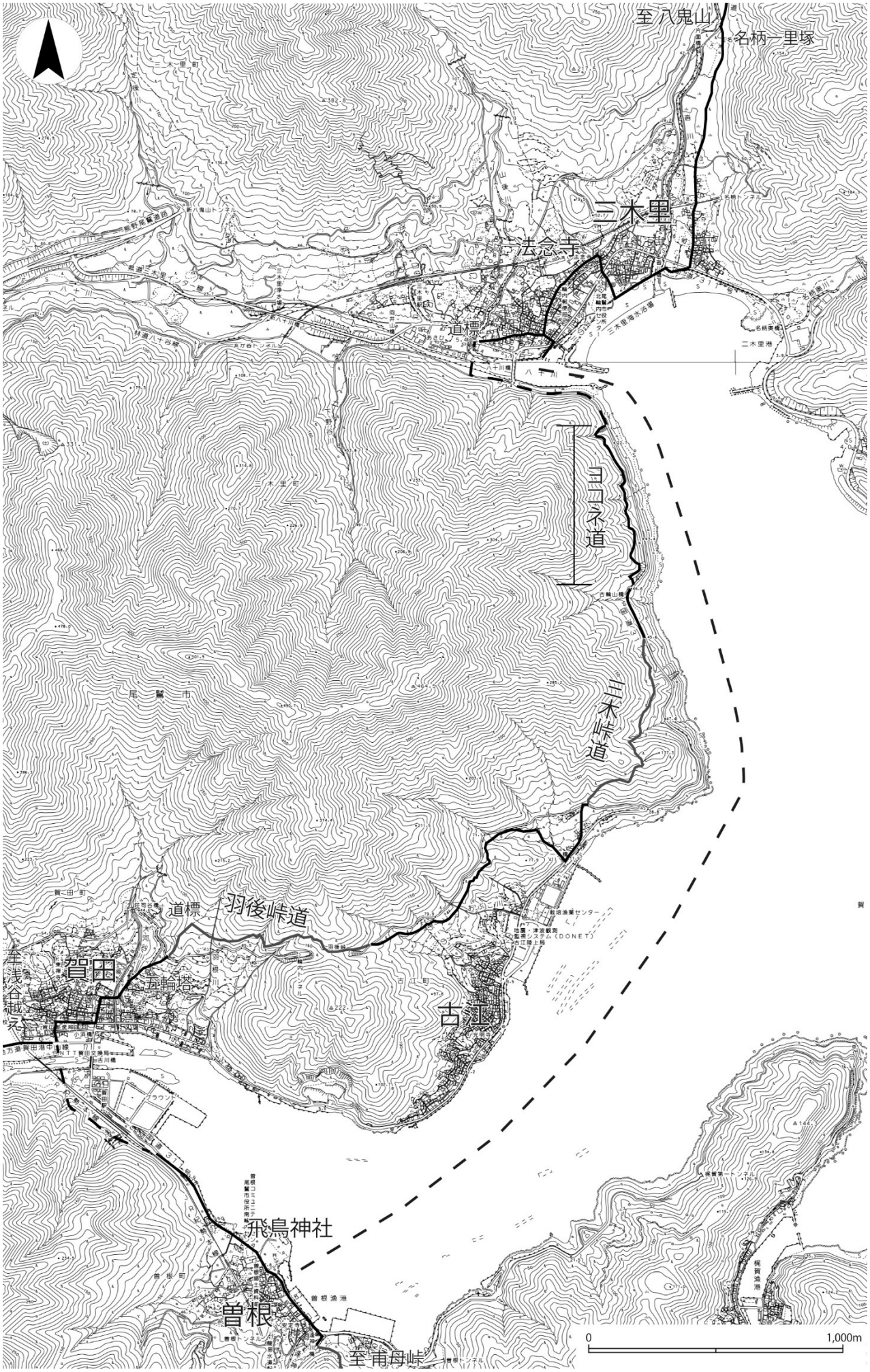


図 229　ヨコネ道・三木峠道・羽後峠道（1 /20,000）

ヨコネ道　三木里から賀田へと向かう道は、八十川を渡ったのち山道となったと考えられるが、国道 311 号により地形が大きく改変され、その入口は不明である。現在は八十川を渡河して約 450m国道を南下した地点から、山道に入れるように整備されている。

この道は字から「ヨコネ道」と呼称され、未舗装区間は全長600m、最高点は標高 65m、幅は 1.8m以下の範囲が多く、八鬼山越えと比べると狭い。上りと下りには石段が敷設され、平坦地は土道である。ヨコネ道の石段(図 230)に用いられている石材は、八鬼山越えと比較して小さく、南にある三木峠道の石段に類似していることから、三木峠道と同様に近世に整備された道と考えられる。道は長らく埋没しており、実態が不明となっていたが、地元有志の尽力により石段などの遺構が顕在化した。

図 230　ヨコネ道の石段

未舗装区間の終点はコンクリートブロックの階段となり、国道 311 号へ合流する。

三木峠道　ヨコネ道が国道 311 号と合流した地点から約 200m南下すると、三木峠道の入口に至る(図 231)。平成 14（2002）年に史跡指定された。全長約 800m、最高点は標高 122m、幅は 1.8m以下の範囲が多い。ヨコネ道と同様、上りと下りに石段が敷設されるほか、石畳が敷設される区間もある。峠までは視界が開け熊野灘が一望できる。

図 231　三木峠道始点（三木里側）

江戸時代の俳人、鈴木牧之は、三木峠を訪れた際に「三木の峠にて此辺りの海岩往昔鬼の栖と聞へて　三鬼山や坐る身に染む春の風」と句を残している[1]。

峠から約 200m下るとアスファルトで舗装された道路に至り、史跡区間の終点となる。

図 232　古江町の石段

○ 古江

古江の道　三木峠道を下るとアスファルト舗装された林道と交わる。林道を越え、民家の脇、果樹園の間を下り、再び国道 311 号に合流する。国道を約 100m進み小川を越えると北側に階段があり、そこを上る。石積の段々畑の間を抜けると、スギの造成林が広がり、道の一部には江戸時代に作られたと考えられる石段(図 232)が残る。国道から約 1 km進むと再び林道と交わり、すぐに羽後峠道の世界遺産区間となる。

なお、古江の集落には行き倒れた巡礼者のものとされる墓碑が２基あり、かつては参詣道沿いにあったと考えられるが、現在は移動しており、原位置は明らかではない。

【古江の巡礼墓碑①】尾鷲市古江町 693 番地に所在する。高さ 66 ㎝、幅 32 ㎝の櫛形墓碑で、正面「敢非禅定門」、右面「安永二巳(1773)年」、左面「四月十七日」と陰刻される。

【古江の巡礼墓碑②】尾鷲市古江町字真谷に所在する。高さ 72 ㎝、幅 33 ㎝の櫛形墓碑で、正面

図 233　羽後峠道の石畳

図 234　羽後峠道の猪垣

図 235　羽後峠道の道標

「清淳禅定尼」、右面「享和三年(1803)」、左面「亥五月十四日」と陰刻される。

羽根後峠道　羽後峠道の史跡指定範囲は全長約 900m、最高点は標高 150m、幅は 1.8m以下の範囲が多い。三木峠と同様、上りと下りに石畳(図 233)が敷かれ、平坦地は土道である。道の南側には猪垣が長く続く(図 234)。峠から約 300m西進すると道標(図 235)があり、高さ 50 ㎝、幅 34 ㎝、「是より左くまの道」と陰刻される。この道標は昭和 56（1981）年の歴史の道調査時には賀田の民家の庭にあったが、その後、現在地に移設された。道標の場所で南に進路を変え、猪垣の間を過ぎ下ると林道に再合流する。

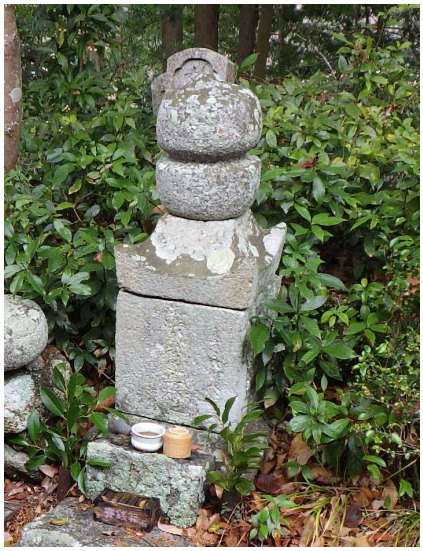


図 236　賀田羽根の五輪塔

○賀田

賀田の道　史跡の区間が終わると、林道によりかつての熊野道が削られており、一度アスファルト舗装された林道へと下りる迂回路が設置されている。迂回路を経て、未舗装の道が約 50m続くが、再びアスファルト舗装された林道でとぎれている。この林道に下りて南西方向、民家の脇に賀田羽根(かたはね)の五輪塔がある。

【賀田羽根の五輪塔】残存高 102 ㎝、幅 40 ㎝、水輪を欠損した五輪塔である。「寛永十八辛巳年/慈長道善禅定門/淡州□□□十月八日」。尾鷲市指定有形文化財。

図 237　賀田の道標

賀田羽根の五輪塔から約 300m下り、大河谷川を越えると賀田の集落に至る。近世における賀田の表記は「賀田」の他に「加田・嘉田・嘉多・賀太」などがみられる。安永４（1707）年の津波では、海沿いの浜通りが流出、安政元（1854）年の津波では 73 戸が流出し、６名の死者を出している[(2)]。現在は古川の河口に国道 311 号の橋が架けられているが、近世の渡河地点は約 140m上流であり、道標が残る。賀田の道標は、高さ 282 ㎝、幅 39 ㎝、正面「右　浅谷道／左　熊野道／大川柳助」とある。古川を越えるとすぐに曽根村の北の関所跡があったが、現在は JR 紀勢本線により分断されている。

○曽根

図 238　曽根北の関所跡

曽根の道　弘治（1555～1558）年間に、佐佐木宇右衛門正吉が曽根浦の南北に関所を設けたとされる。北の関所跡(図 238)には庚申塚が祀られ、享保 9（1724）年銘の石燈籠や天保 11（1840）年の廻国供養塔、天保 14（1843）年の手水鉢など、紀年銘を有する石造物がいくつか残されている。なお、南の関所は、曽根集落の南の向井地墓地の上にあった安定寺に隣接する場所にあったとされる。

北の関所跡をから南東へ山裾を下ると国道 311 号に合流し、南側に JR 賀田駅がある。賀田駅から約 700m進むと曽根の集落に至る。集落の入り口には小川があり、国道から約 20m 上流に石橋が架けられている。石橋を渡り約 30m進むと道祖神(図 239)が祀られている。高さ 36 ㎝、幅 24 ㎝で、向かって右が男神像、向かって左が女神像とされる。道祖神は集落の境界に祀られ、集落の守り神としての正確が強かったが、近世以降は旅の神としての性格も帯びるようになった。かつては、土塚に収められていたが、昭和 35（1960）年頃コンクリート製の祠に祀られた[3]。尾鷲市指定有形民俗文化財。また、国道 311 号沿いには、「曽根の首なし地蔵」と呼ばれる地蔵が祀られており、元は熊野参詣道沿いにあったとされる。

図 239　曽根道祖神

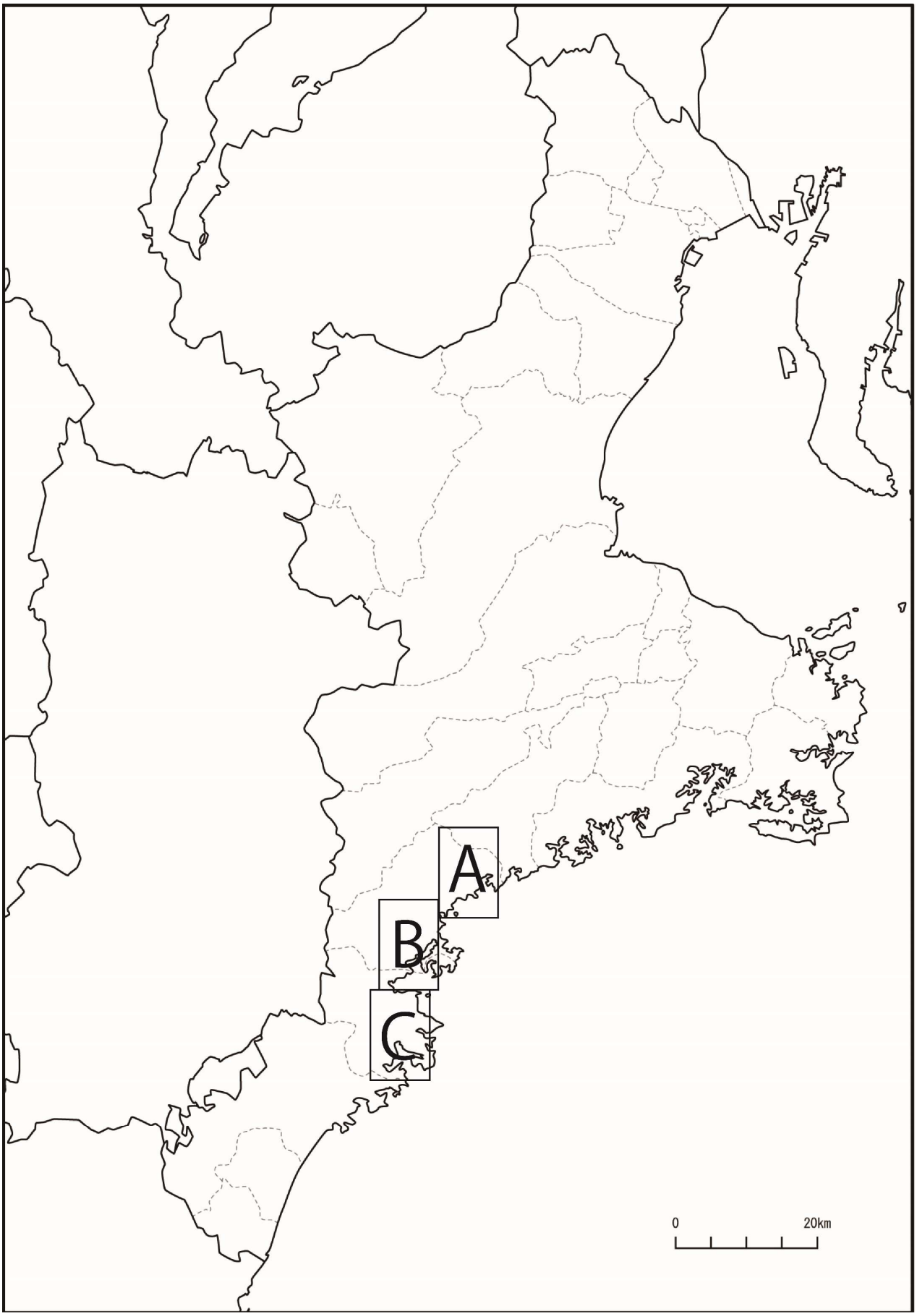
道祖神から約 100m進むと国道に再び合流し、飛鳥神社(図 240)に至る。飛鳥神社は、和歌山県新宮市にある阿須賀神社の末社で、東ノ瀬崎と呼ばれる磯辺に立地する。江戸時代には阿須賀大明神の名で呼ばれていた。三木里からの航路は飛鳥神社の脇の港に至る。境内には、巨樹が立ち並び、亜熱帯・暖地性草木樹叢として学術上貴重なため、県指定天然記念物となっている。飛鳥(あすか)神社を過ぎると保甫峠を越え、二木島（熊野市）へと至る。

図 240　飛鳥神社

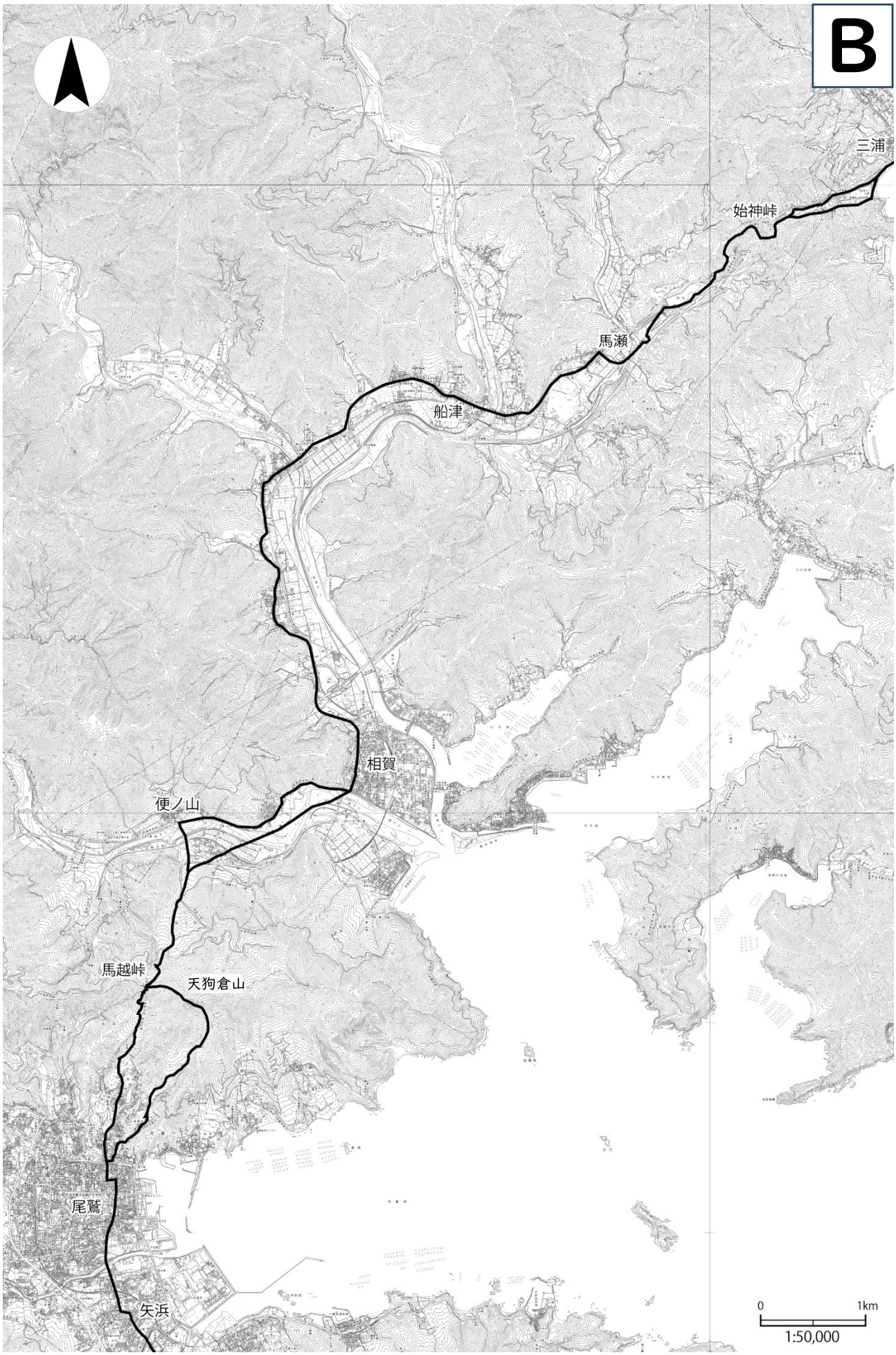
曽根から新鹿への近道（浅谷越）　賀田から曽根・二木島を経由せず新鹿(あたしか)へと向かう道（浅谷越(あさたにごえ)）がある。この経路は、文政 12（1829）年の『新増補細見指南車』に「加田より新鹿へ近道あり此方へゆけバ案内とりてよし」とあり、近道を通る場合は案内人を付けることが推奨されている。また天保 11（1840）年の『天保新増西国順礼道中細見大全』では「加田より新鹿へ近道あれども行へからす」とあり、使用しないことを勧めている。明治時代に作成された「紀伊国南牟婁郡賀田村全図」「紀伊国南牟婁郡曽根浦全図」「南牟婁郡新鹿村地図」には約 7 ㎞の道が示されており、賀田から古川を遡り、峠を越えて湊川の支川へと至る。この道はごく短期間、少数の巡礼者が使用した可能性はあるが、主要な経路ではなかったと考えられる。

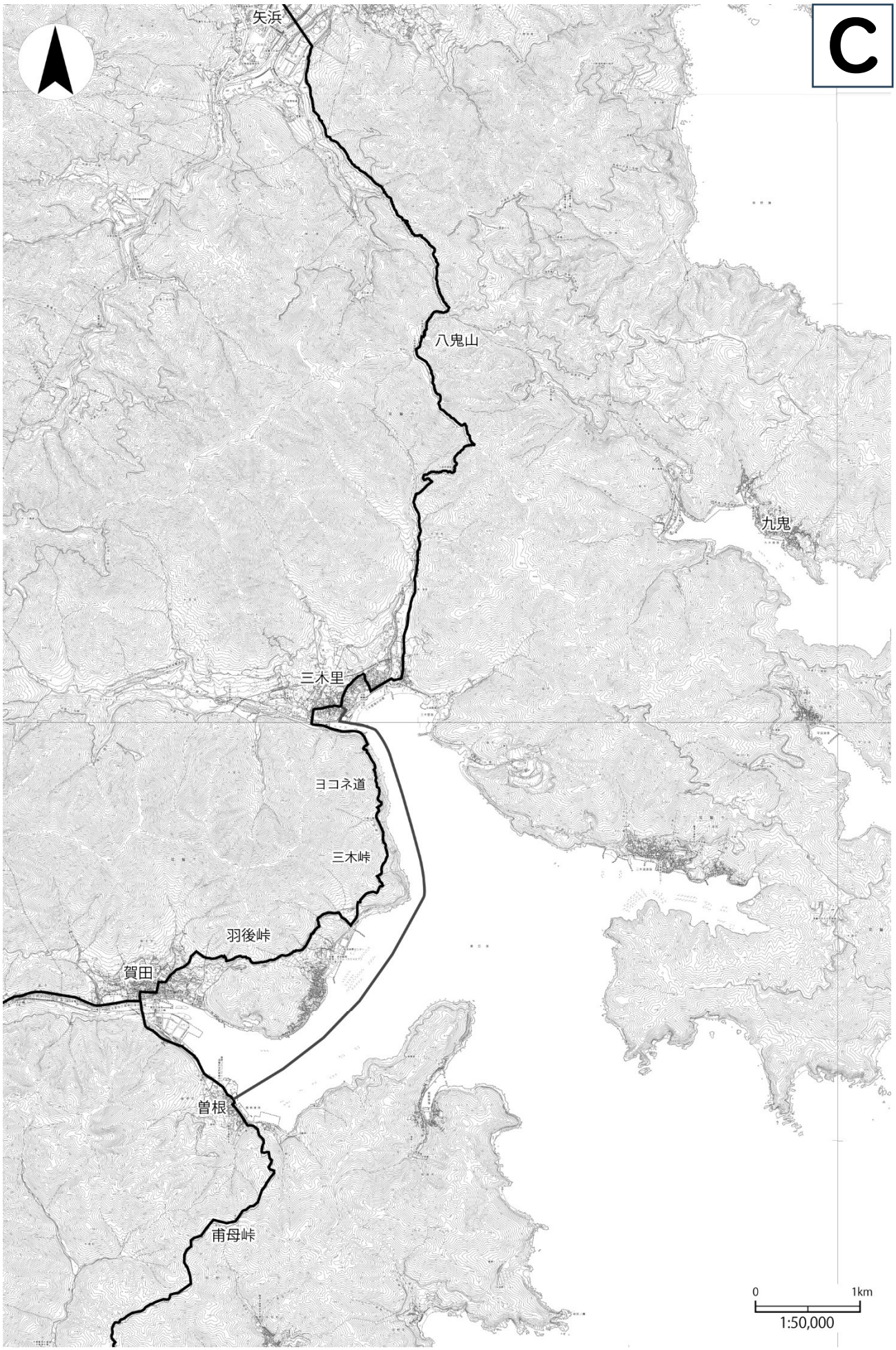
註

（1）　鈴木牧之「西遊記神都詣西国巡礼」『秋月菴発句集』鈴木牧之顕彰会、1983 年。
（2）　伊藤良「尾鷲市」『三重県の地名』日本地名体系第 24 巻、923-935 頁、平凡社、1983 年。
（3）　東紀州地域活性化事業推進協議会『熊野古道を歩く』伊勢文化舎、1991 年。


A
B
C
0
20km

A
梅ヶ谷
ツヅラト峠
荷坂峠
志子
中桐
東長島（三郷）
島地峠
長島
加田
一石峠
海野
古里
鋸坂
道瀬
三浦峠
三浦
0
1km
1:50,000


B
三浦
始神峠
馬瀬
船津
相賀
便ノ山
馬越峠
天狗倉山
尾鷲
矢浜
0
1km
1:50,000


C
矢浜
八鬼山
九鬼
三木里
ヨコネ道
三木峠
羽後峠
賀田
曽根
甫母峠
0
1km
1:50,000

熊野参詣道伊勢路調査報告書Ⅱ

（大紀町～尾鷲市）

令和７（2025）年３月

三重県教育委員会